

本資料のうち、枠囲みの内容は防  
護上の観点から公開できません。

女川原子力発電所第2号機 工事計画審査資料	
資料番号	02-工-B-19-0162_改3
提出年月日	2021年10月8日

### VI-2-2-10 第3号機海水ポンプ室の耐震性についての計算書

2021年10月

東北電力株式会社

## 目次

1. 概要	1
2. 基本方針	2
2.1 位置	2
2.2 構造及び補強の概要	3
2.3 評価方針	9
2.4 適用基準	12
3. 耐震評価	13
3.1 地震時荷重算出断面	13
3.2 使用材料及び材料の物性値	17
3.3 許容限界	18
3.3.1 構造部材の健全性に対する許容限界	18
3.3.2 基礎地盤の支持性能に対する許容限界	28
3.4 評価方法	29
3.4.1 構造部材の健全性評価	29
3.4.2 基礎地盤の支持性能評価	41
4. 構造部材の地震時応答	42
4.1 全応力解析による荷重に対する断面力分布	45
4.2 有効応力解析による荷重に対する断面力分布	64
4.3 過剰間隙水圧比分布	83
5. 耐震評価結果	88
5.1 全応力解析による荷重に対する耐震評価結果	88
5.1.1 構造部材の健全性に対する評価結果	88
5.1.2 各要求機能に対する評価結果	94
5.1.3 Sクラスの施設等を支持する機能に対する評価結果	96
5.1.4 基礎地盤の支持性能に対する評価結果	99
5.2 有効応力解析による荷重に対する耐震評価結果	101
5.2.1 構造部材の健全性に対する評価結果	101
5.2.2 各要求機能に対する評価結果	103
5.2.3 Sクラスの施設等を支持する機能に対する評価結果	105
5.2.4 基礎地盤の支持性能に対する評価結果	107

## 1. 概要

本資料は、添付書類「VI-2-1-9 機能維持の基本方針」にて設定している構造強度及び機能維持の設計方針に基づき、第3号機海水ポンプ室が基準地震動  $S_s$  に対して十分な構造強度及び支持機能を有していることを確認するものである。

第3号機海水ポンプ室の構造部材の健全性評価にあたっては、地震応答解析により算定した荷重を三次元構造解析モデルに作用させて確認する。基礎地盤の支持性能評価にあたっては、地震応答解析により基礎地盤に発生した接地圧を確認する。

2. 基本方針

2.1 位置

第3号機海水ポンプ室の位置を図2-1に示す。

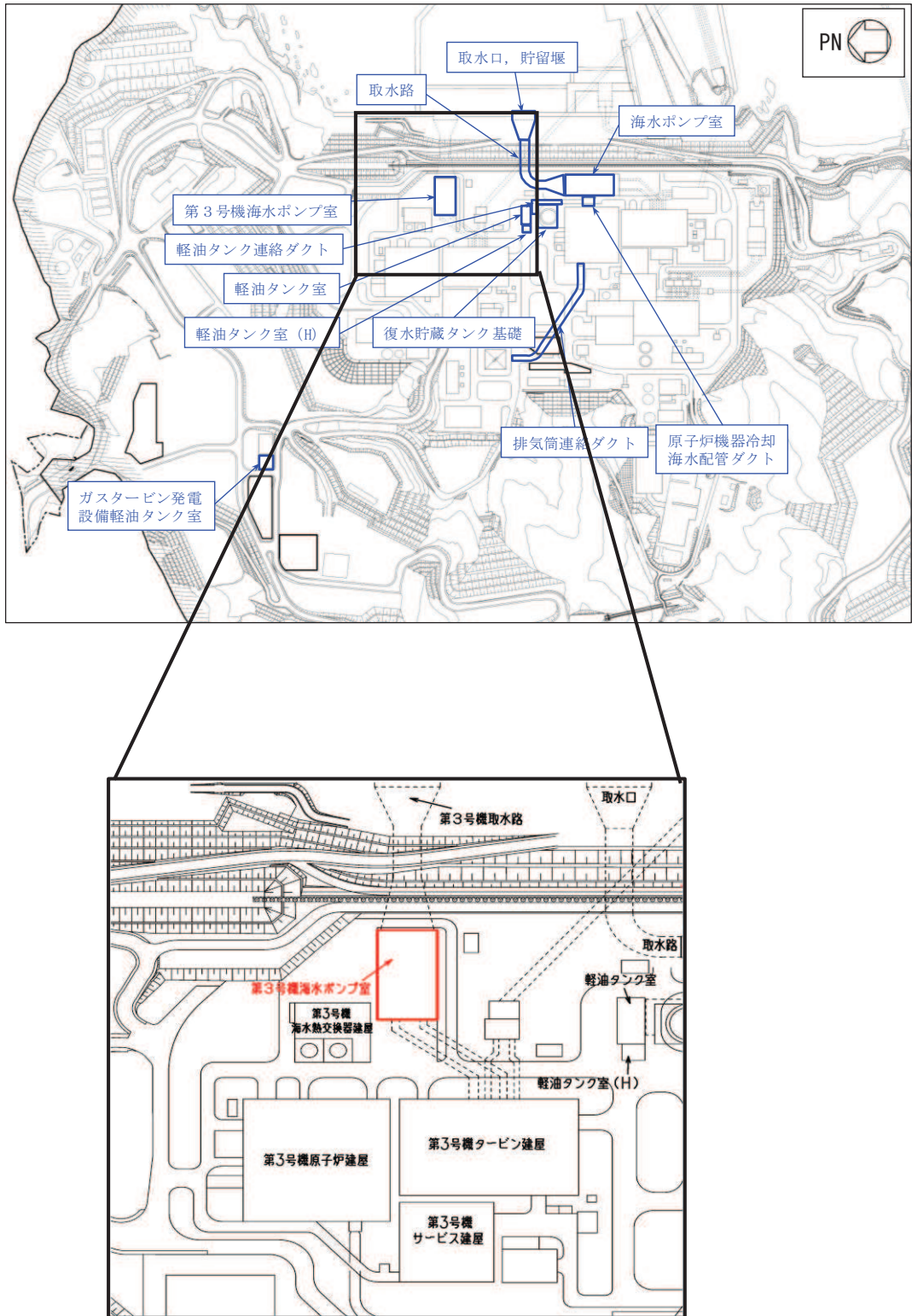


図2-1 第3号機海水ポンプ室の位置図

## 2.2 構造及び補強の概要

第3号機海水ポンプ室の平面図を図2-2に、断面図を図2-3～図2-5に、耐震補強の概要図を図2-6に、補強計画図を図2-7～図2-10に、概略配筋図を図2-11～図2-13に示す。

第3号機海水ポンプ室は、浸水防護設備である防潮壁を間接支持する支持機能及び浸水防止のための止水機能が要求される。

第3号機海水ポンプ室は、地下2階または地下3階構造となっており、上部はスクリーンエリア、循環水ポンプエリアの2エリアに分かれている。下部は水路となっており、スクリーンエリアの下部は四連のボックスカルバート構造、循環水ポンプエリアの下部は二連のボックスカルバート構造となっている。また、上部は各エリアが隔壁により仕切られ、各エリアによって開口部の存在や中床版の設置レベルが異なる等、複雑な構造となっている。

第3号機海水ポンプ室は、加振方向に平行に配置される妻壁や隔壁等の面部材を耐震部材として考慮する箱形構造物である。

第3号機海水ポンプ室の耐震性を確保するために耐震補強を実施する。

曲げ・軸力系の破壊に対する補強として、水路部における導流壁の増厚、気中部における隔壁の追加及び妻壁への補強梁の追加を実施する。

せん断破壊に対する補強として、後施工せん断補強工法（セラミックキャップバー工法）（以下「CCb工法」という。）によるせん断補強を実施する。

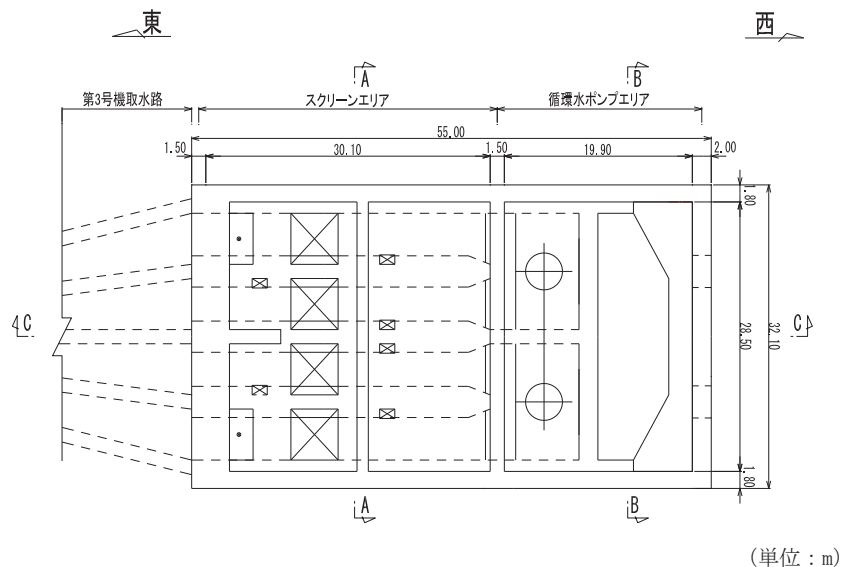


図2-2 第3号機海水ポンプ室平面図

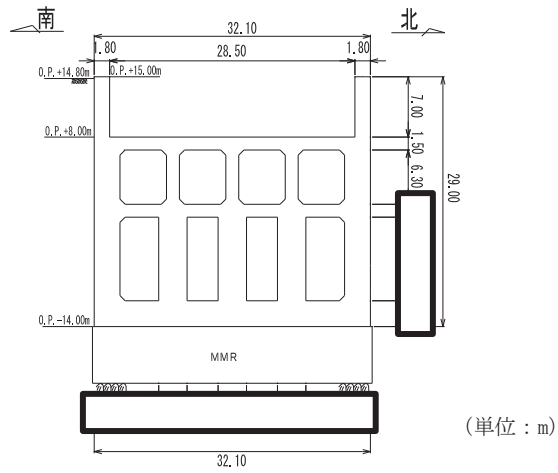


図 2-3 第 3 号機海水ポンプ室断面図 (A-A 断面)

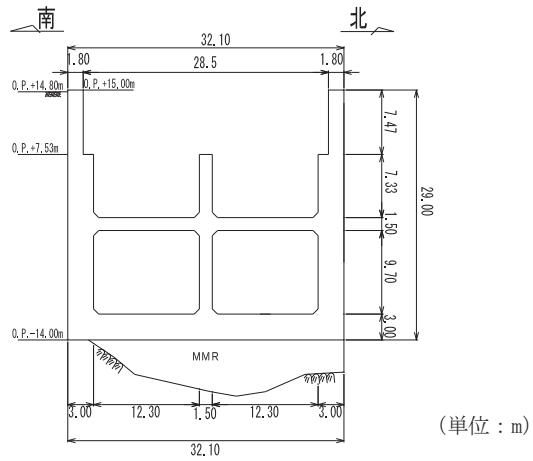


図 2-4 第 3 号機海水ポンプ室断面図 (B-B 断面)

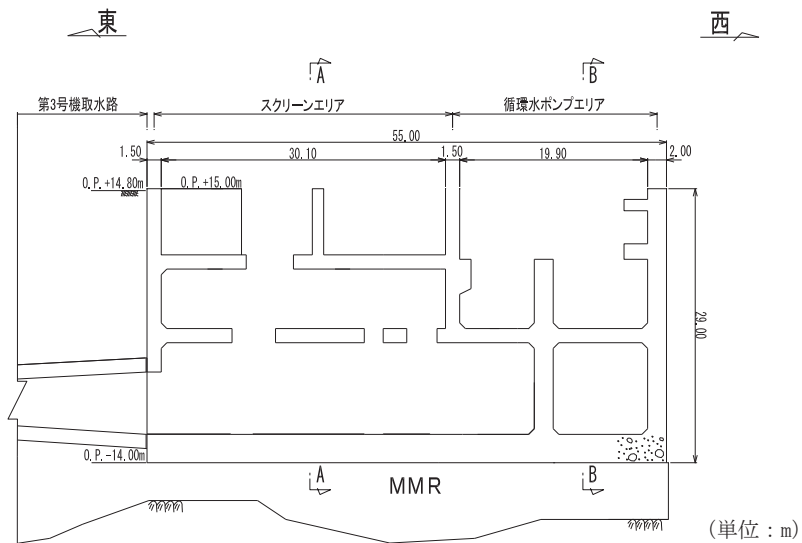


図 2-5 第 3 号機海水ポンプ室断面図 (C-C 断面)

枠囲みの内容は防護上の観点から公開できません。

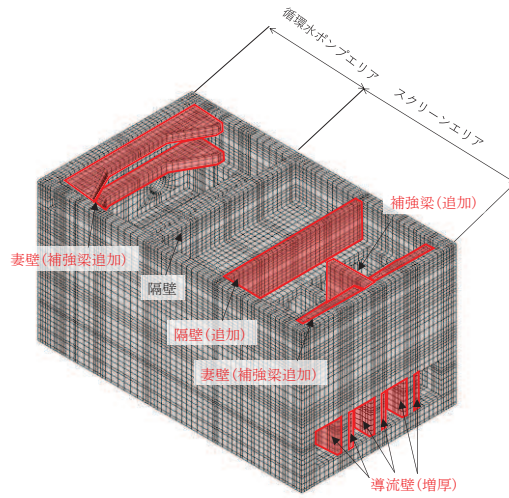
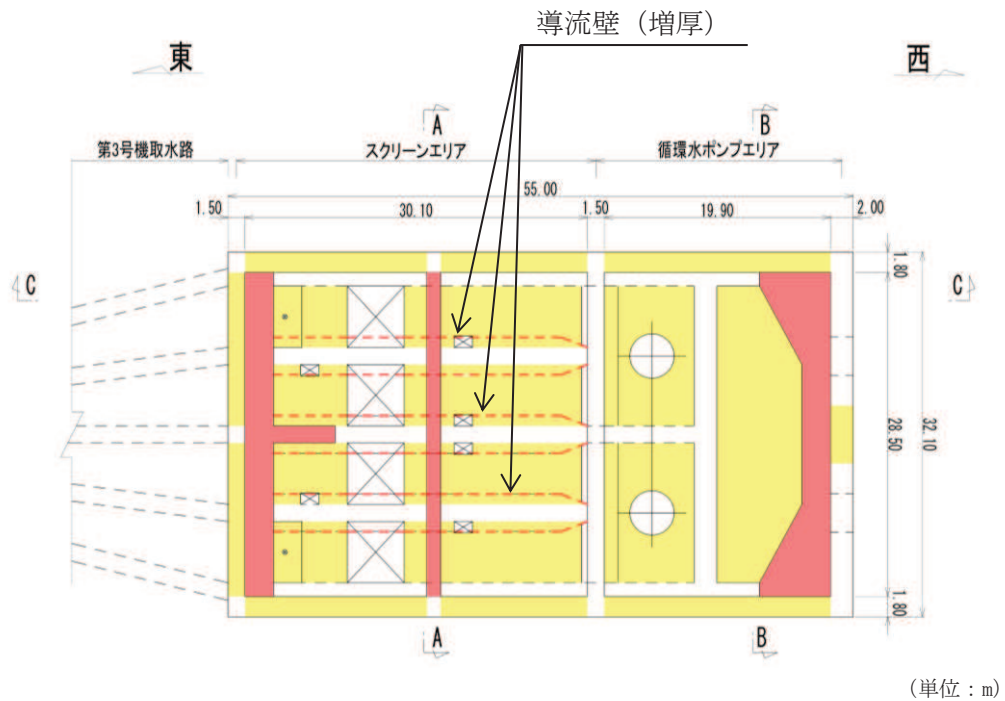


図 2-6 耐震補強の概要図



- : CCb による耐震補強箇所
- : 部材増厚または部材追加箇所

図 2-7 補強計画図 (平面図)

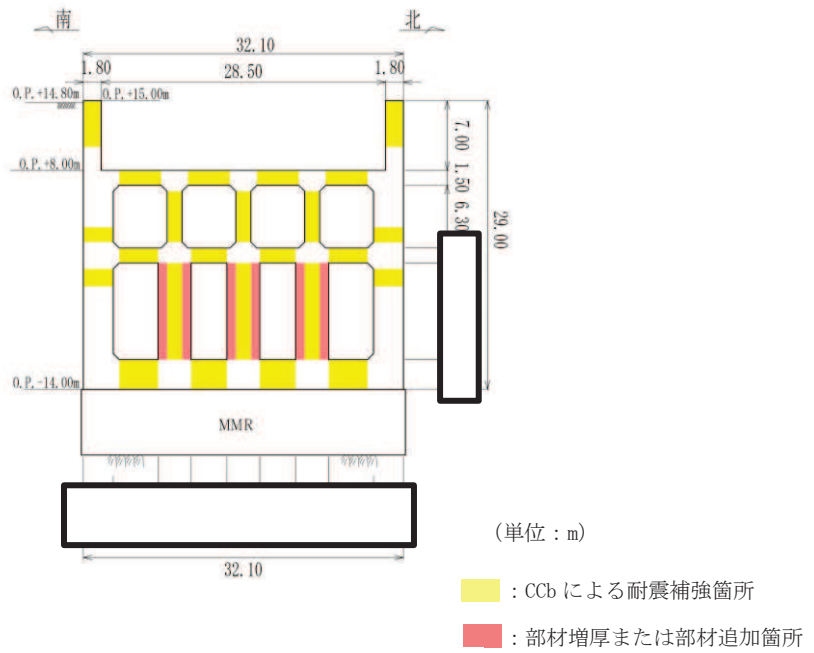


図 2-8 補強計画図 (A-A 断面, 南北 (スクリーンエリア))

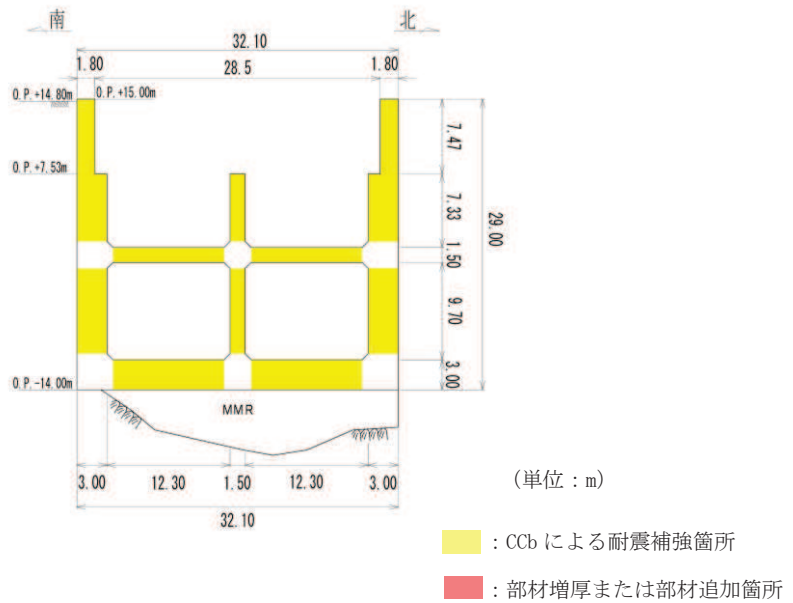


図 2-9 補強計画図 (B-B 断面, 南北 (循環水ポンプエリア))

枠囲みの内容は防護上の観点から公開できません。



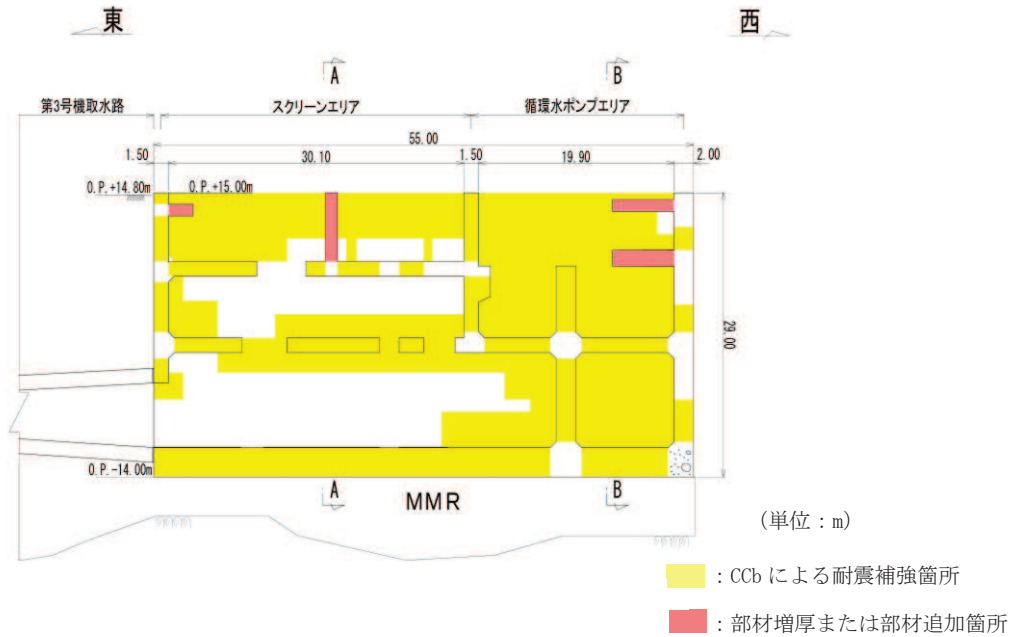


図 2-10 補強計画図 (C-C 断面, 東西)

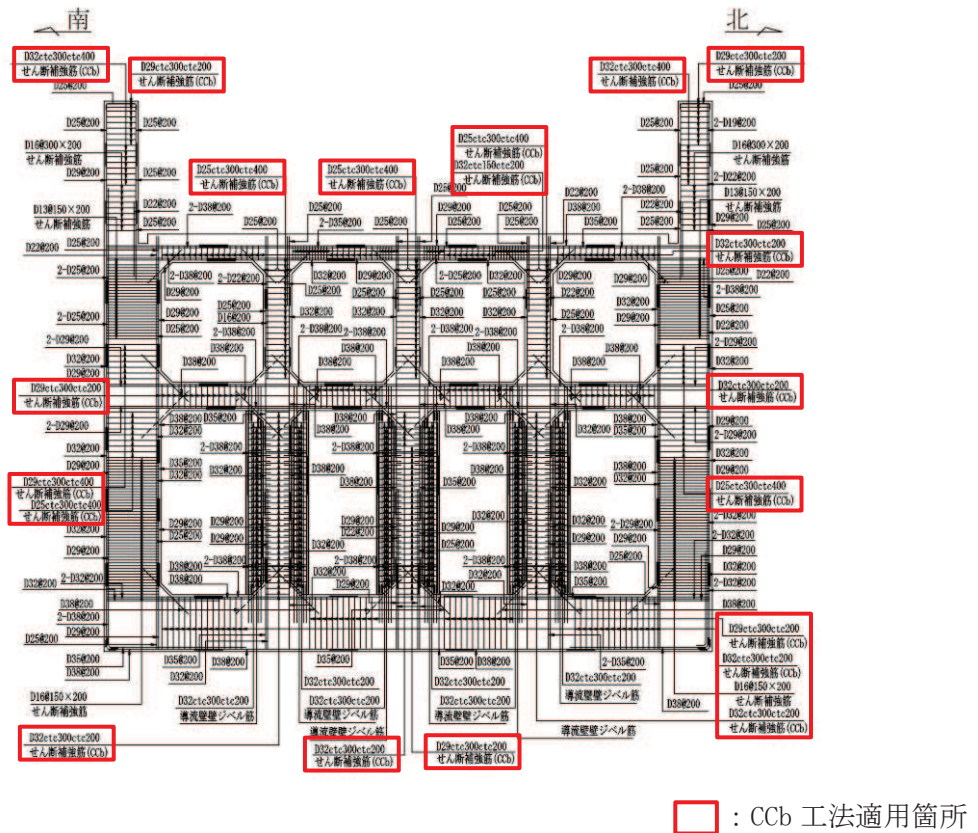


図 2-11 第 3 号機海水ポンプ室概略配筋図 (A-A 断面, 南北 (スクリーンエリア))

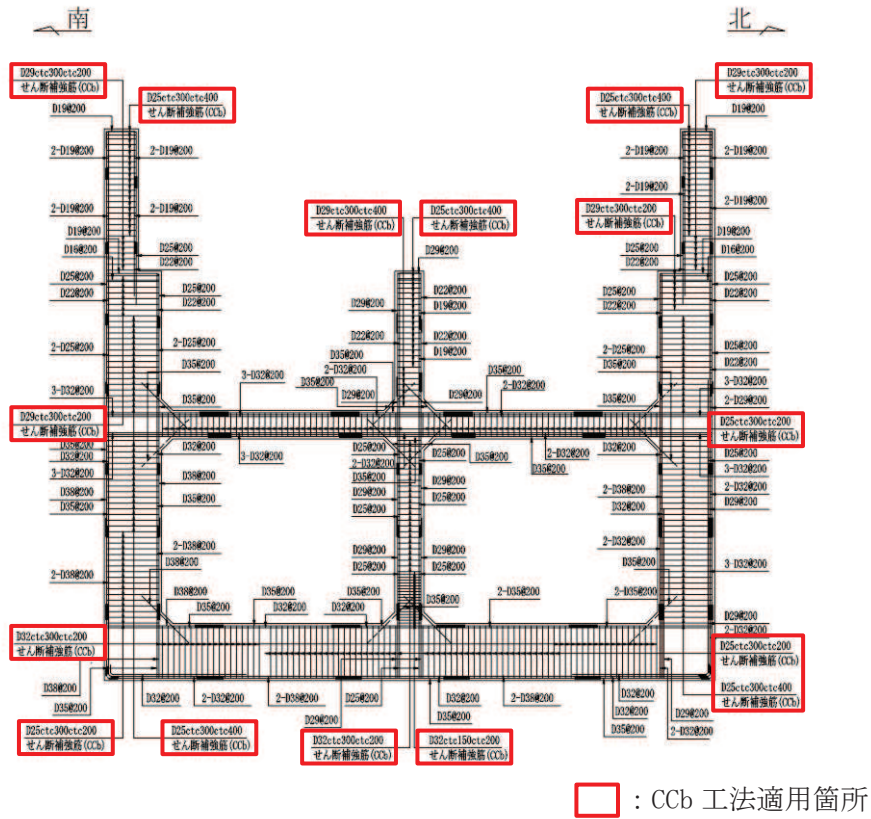


図 2-12 第 3 号機海水ポンプ室概略配筋図 (B-B 断面, 南北 (循環水ポンプエリア))

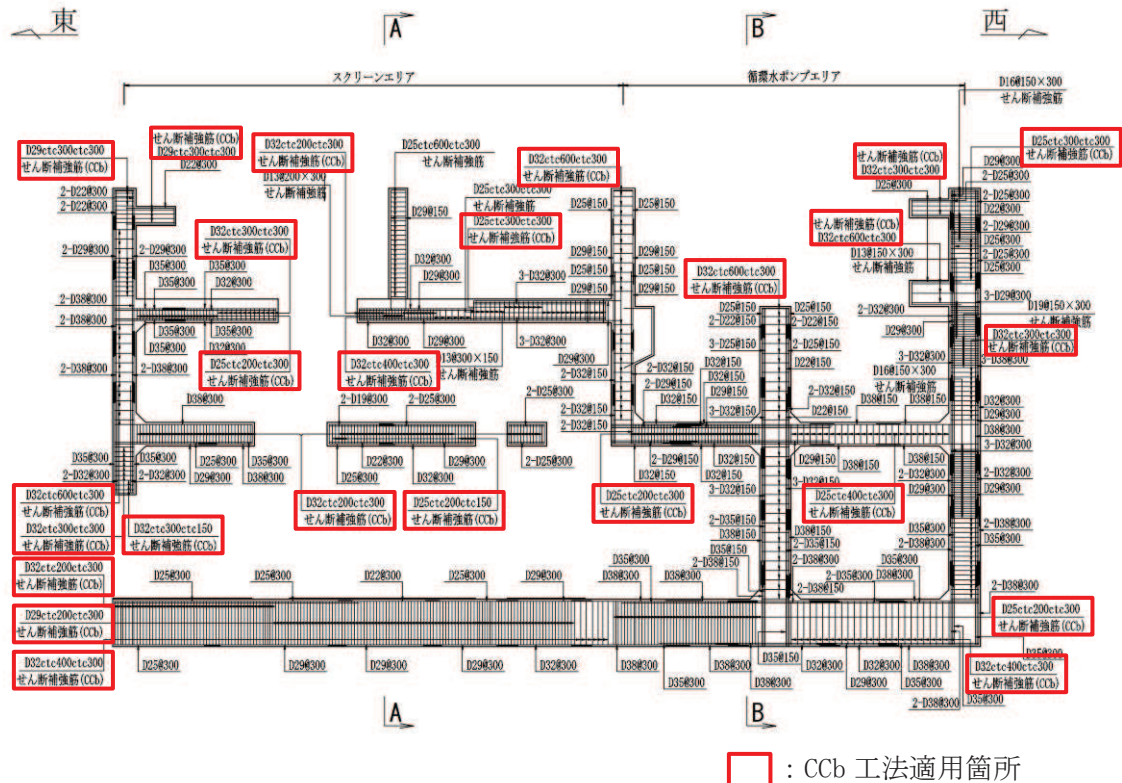


図 2-13 第 3 号機海水ポンプ室概略配筋図 (C-C 断面, 東西)

### 2.3 評価方針

第3号機海水ポンプ室は、設計基準対象施設においては、Sクラス施設等の間接支持構造物である屋外重要土木構造物に分類される。

第3号機海水ポンプ室の耐震評価は、添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」より得られた地震応答解析の結果に基づき、設計基準対象施設の評価として、表2-1に示すとおり、構造部材の健全性評価及び基礎地盤の支持性能評価を行う。

第3号機海水ポンプ室の耐震評価フローを図2-14に示す。

構造部材の健全性評価及び基礎地盤の支持性能評価を実施することで、構造強度を有すること及びSクラスの施設等を支持する機能を損なわないことを確認する。

構造部材の健全性評価については、添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」より得られた、水平方向及び鉛直方向の荷重を用いた、非線形ソリッド要素による三次元静的材料非線形解析（以下「三次元構造解析」という。）により応答値を算定し、添付書類「VI-2-1-9 機能維持の基本方針」に基づき、曲げ・軸力系の破壊については構造部材の照査用ひずみが許容限界を下回ることを、せん断破壊に対しては照査用せん断力及び照査用面内せん断ひずみが許容限界を下回ることを確認する。なお、せん断破壊に対する補強としてCCb工法を用いる場合には、構造部材に対してCCb工法の適用条件を満たしていることを確認し、CCb工法を採用する。

基礎地盤の支持性能評価においては、添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」より得られた基礎地盤の接地圧が、添付書類「VI-2-1-9 機能維持の基本方針」に基づく許容限界を下回ることを確認する。

表 2-1 第 3 号機海水ポンプ室の評価項目

評価方針	評価項目	部位	評価方法	許容限界		
構造強度を有すること	構造部材の健全性	鉄筋コンクリート部材	照査用ひずみ, 照査用せん断力及び照査用面内せん断ひずみが許容限界を下回ることを確認	曲げ・軸力		限界ひずみ*
				せん断力	面外	せん断耐力*
					面内	限界せん断ひずみ*
	基礎地盤の支持性能	基礎地盤	発生する接地圧が許容限界を下回ることを確認	岩盤の極限支持力		
MMR		MMR の支圧強度				
S クラスの施設等を支持する機能を損なわないこと	構造部材の健全性	鉄筋コンクリート部材	照査用ひずみ, 照査用せん断力及び照査用面内せん断ひずみが許容限界を下回ることを確認	曲げ・軸力		限界ひずみ*
				せん断力	面外	せん断耐力*
					面内	限界せん断ひずみ*

注記\*： 妥当な安全余裕を考慮する。

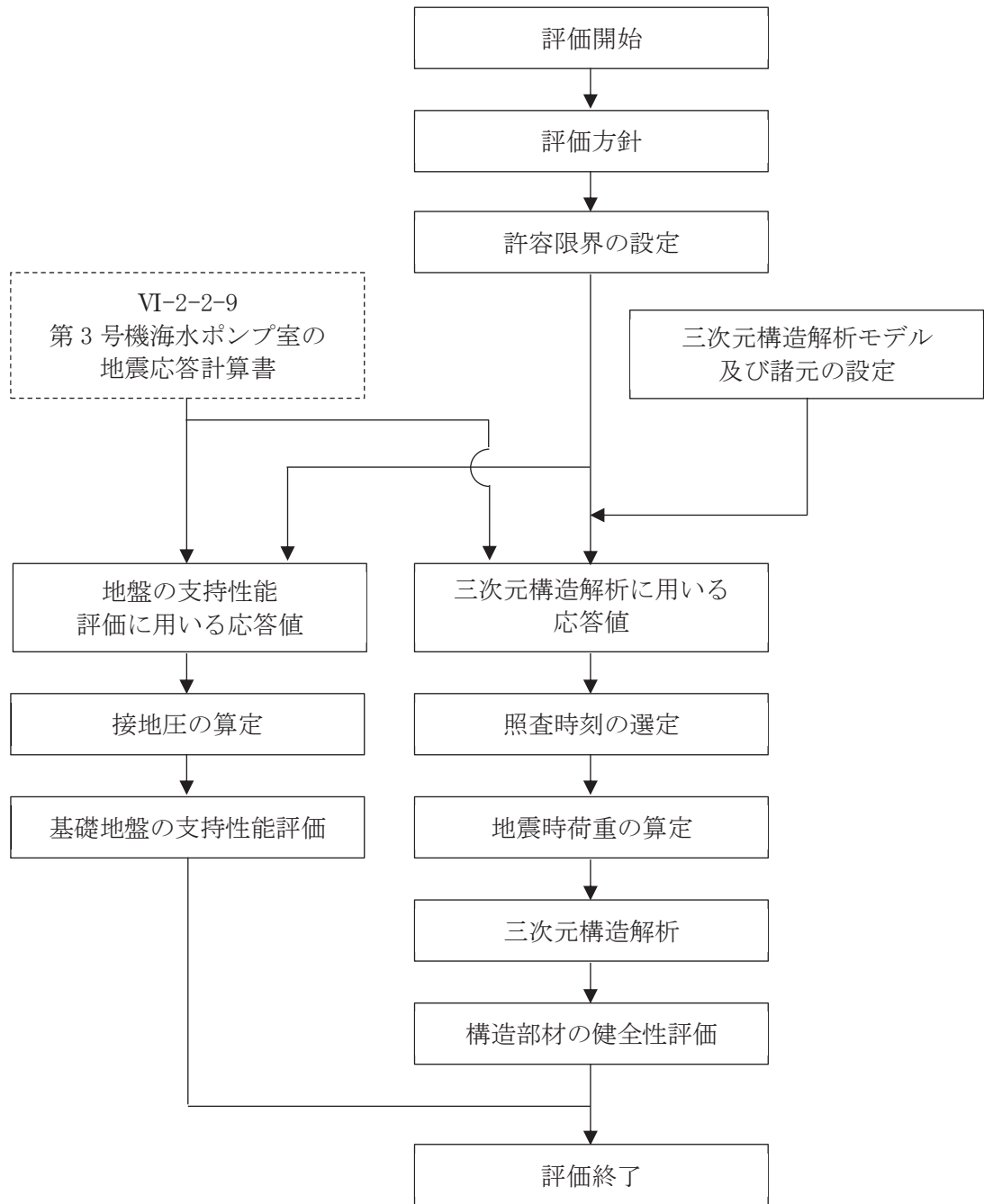


図 2-14 第 3 号機海水ポンプ室の耐震評価フロー

## 2.4 適用基準

適用する規格，基準等を以下に示す。

- 土木学会 2002年 コンクリート標準示方書[構造性能照査編]
- 土木学会 2012年 コンクリート標準示方書[設計編]
- 土木学会 2017年 コンクリート標準示方書[設計編]
- 土木学会 2005年 原子力発電所屋外重要土木構造物の耐震性能照査指針・マニュアル
- 原子力発電所耐震設計技術指針（J E A G 4 6 0 1 -1987）
- 日本道路協会 平成14年3月 道路橋示方書・同解説 I 共通編・IV下部構造編
- 日本道路協会 平成14年3月 道路橋示方書・同解説 V耐震設計編
- 一般財団法人土木研究センター 建設技術審査証明報告書 後施工セラミック定着型せん断補強鉄筋「セラミックキャップバー(CCb)」
- 鉄道総合技術研究所 平成13年3月 鉄道構造物等設計標準・同解説（開削トンネル）

### 3. 耐震評価

#### 3.1 地震時荷重算出断面

第3号機海水ポンプ室の地震時荷重算出断面位置を図3-1に示す。地震時荷重算出断面は、構造的特徴や周辺地質状況を踏まえ、南北方向では妻壁や隔壁の配置が異なることによる剛性差を考慮し、スクリーンエリア(A-A断面)及び循環水ポンプエリア(B-B断面)の各エリアの構造モデルを使用して地震応答解析を行う。第3号機海水ポンプ室の周辺状況は、各エリアにより異なり、地震時の土圧が大きいものと想定される循環水ポンプエリアの中心を通る地質断面を地盤モデルとして、地震時荷重算出断面とする。

また、南北方向については、構造的特徴や周辺地盤状況を踏まえ、構造物中心を通る東西断面(C-C断面)を地震時荷重算出用地質断面とする。地震時荷重算出用地質断面図を図3-2～図3-4に示す。

なお、加振方向に平行に配置され耐震上見込むことができる面部材の配置から、東西方向(C-C断面)が強軸方向となり、南北方向(A-A断面及びB-B断面)が弱軸方向となることから、耐震評価は弱軸方向である南北方向(A-A断面及びB-B断面)に対して実施する。

地震応答解析における解析手法は、添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」のうち、「3.2 解析方法」に示すとおり全応力解析及び有効応力解析とする。解析ケースを表3-1に示す。

また、第3号機海水ポンプ室は、加振方向に平行に配置される面部材(妻壁や隔壁)を有する箱形構造物であり、かつ、止水機能が要求される構造物であることから、ひび割れ状態を評価できるソリッド要素を用いた三次元構造解析により耐震評価を行う。

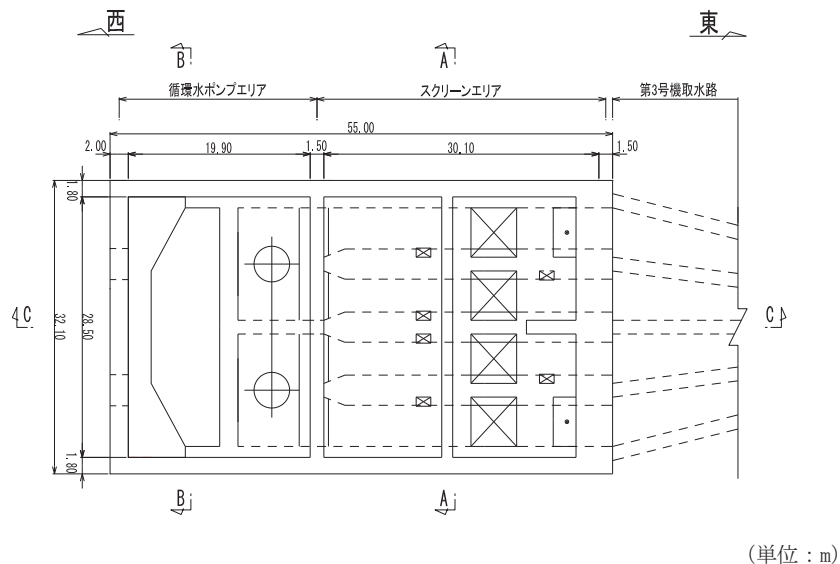


図3-1 第3号機海水ポンプ室の地震時荷重算出断面位置図

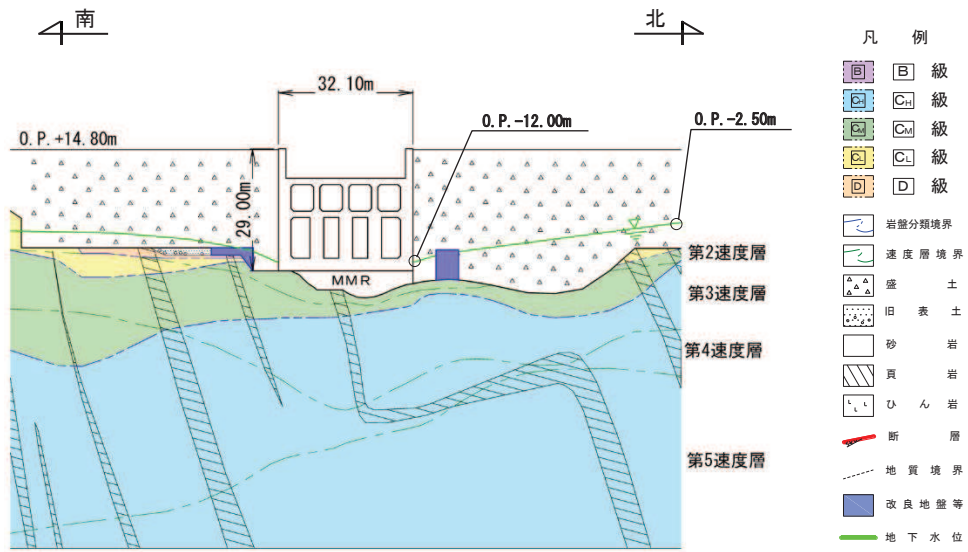


図 3-2 第 3 号機海水ポンプ室 地震時荷重算出用地質断面図  
(A-A 断面, 南北 (スクリーンエリア))

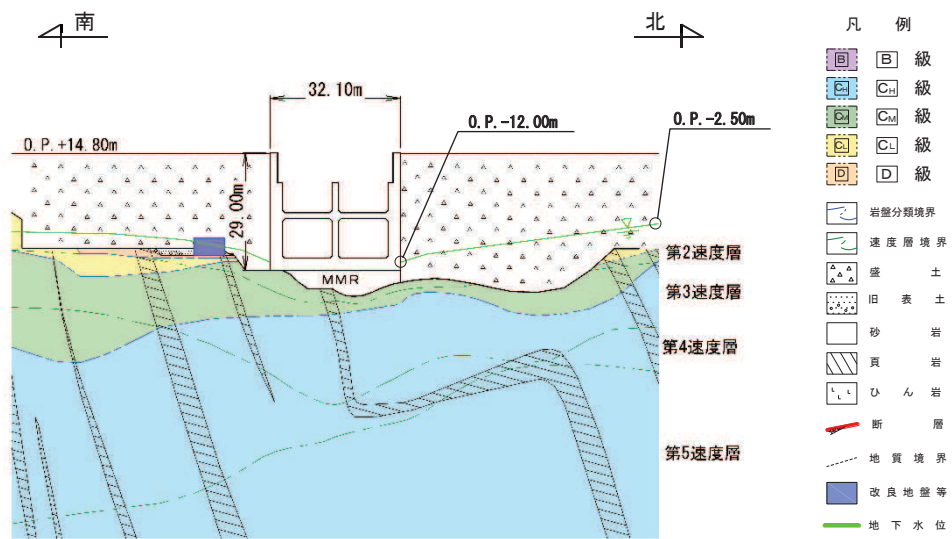


図 3-3 第 3 号機海水ポンプ室 地震時荷重算出用地質断面図  
(B-B 断面, 南北 (循環水ポンプエリア))

R 3  
VI-2-2-10  
⑤  
O 2



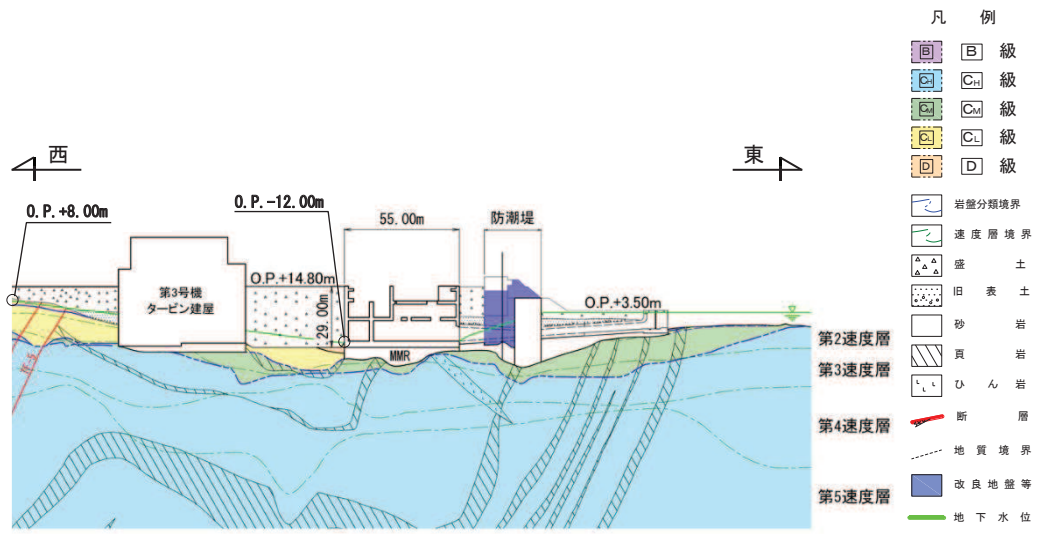


図 3-4 第 3 号機海水ポンプ室 地震時荷重算出用地質断面図 (C-C 断面, 東西)

表 3-1 耐震評価における解析ケース

解析ケース*1	解析手法	材料物性 (コンクリート) ( $E_0$ : ヤング係数)	地盤物性	
			盛土, 旧表土, D級岩盤, セメント改良土, 改良地盤 ( $G_0$ : 初期せん断弾性係 数)	C <sub>L</sub> 級岩盤, C <sub>M</sub> 級岩盤, C <sub>H</sub> 級岩盤, B級岩盤 ( $G_d$ : 動せん断弾性係数)
ケース① (基本ケース)	全応力解析	設計基準強度	平均値	平均値
ケース②	全応力解析	設計基準強度	平均値 + 1 $\sigma$	平均値
ケース③	全応力解析	設計基準強度	平均値 - 1 $\sigma$	平均値
ケース④*2	全応力解析	実強度に基づく 圧縮強度*3	平均値	平均値
ケース⑥ (基本ケース)	有効応力解析	設計基準強度	平均値	平均値
ケース⑦	有効応力解析	設計基準強度	平均値 + 1 $\sigma$	平均値
ケース⑧	有効応力解析	設計基準強度	平均値 - 1 $\sigma$	平均値
ケース⑨*2	有効応力解析	実強度に基づく 圧縮強度*3	平均値	平均値

注記\*1: A-A 断面, B-B 断面及び C-C 断面は, 全応力解析及び有効応力解析を実施する。

\*2: 基本ケース (ケース①及び⑥) を実施し, 曲げ・軸力系の破壊, せん断破壊及び基礎地盤の支持力照査における照査値の最大値を比較し, 最大照査値を示す解析手法において, 実強度を考慮した解析ケース (ケース④又はケース⑨) を実施する。なお, ケース①とケース⑥の曲げ・軸力系の破壊, せん断破壊及び基礎地盤の支持力照査における照査値の最大値の差が 0.05 未満の場合は, 両解析ケースで実強度を考慮した解析ケース (ケース④及び⑨) を実施する。

\*3: 既設構造物のコア採取による圧縮強度試験の結果を使用する。

### 3.2 使用材料及び材料の物性値

構造物の使用材料を表 3-2 に、材料の物性値を表 3-3 に示す。

表 3-2 使用材料

材料	仕様
コンクリート	設計基準強度 23.5N/mm <sup>2</sup>
鉄筋	SD345

表 3-3 材料の物性値（構造部材）

材料	項目		材料諸元	備考
鉄筋コンクリート	単位体積重量 (kN/m <sup>3</sup> )		24.0	
コンクリート	ヤング係数 (N/mm <sup>2</sup> )	実強度*	$3.46 \times 10^4$	解析ケース④, ⑨
		設計基準強度	$2.48 \times 10^4$	解析ケース①, ②, ③, ⑥, ⑦, ⑧
	ポアソン比		0.2	

注記\*：既設構造物のコア採取による圧縮強度試験の結果を使用する。

### 3.3 許容限界

許容限界は、添付書類「VI-2-1-9 機能維持の基本方針」に基づき設定する。

#### 3.3.1 構造部材の健全性に対する許容限界

##### (1) 曲げ・軸力系の破壊に対する許容限界

構造強度を有することの確認における構造部材（鉄筋コンクリート）の曲げ・軸力系の破壊に対する許容限界は、「原子力発電所屋外重要土木構造物の耐震性能照査指針・マニュアル（土木学会 原子力土木委員会，2005年6月）」（以下「土木学会マニュアル」という。）に基づき、限界ひずみ（圧縮縁コンクリートひずみ 1.0%）とする。

曲げ・軸力系の破壊に対する限界状態については、「土木学会マニュアル」ではコンクリートの圧縮縁のかぶりが剥落しないこととされており、圧縮縁コンクリートひずみ 1.0%の状態は、かぶりコンクリートが剥落する前の状態であることが、屋外重要土木構造物を模したラーメン構造の破壊実験及び数値シミュレーション等の結果より確認されている。この状態を限界値とすることで構造全体としての安定性等が確保できるとして設定されたものである。

各要求機能について、止水機能を損なわないこと及びSクラスの施設等を支持する機能を損なわないことの確認においては、コンクリート標準示方書に基づき、主筋ひずみ及びコンクリートの圧縮ひずみについて、部材降伏に相当するひずみ（主筋ひずみ 1725 $\mu$ ，コンクリート圧縮ひずみ 2000 $\mu$ ）とする。

鉄筋コンクリートの曲げ・軸力系の破壊に対する許容限界を表 3-4 に示す。

表 3-4 第 3 号機海水ポンプ室の曲げ・軸力系の破壊に対する許容限界

確認項目	許容限界	
構造強度を有すること	限界ひずみ	止水機能：主筋(SD345)：1725 $\mu$ コンクリート：2000 $\mu$
Sクラスの施設等を支持する機能を損なわないこと		支持機能：主筋(SD345)：1725 $\mu$ コンクリート：2000 $\mu$

(2) せん断破壊に対する許容限界

構造強度を有することの確認におけるせん断破壊に対する許容限界は、「土木学会マニュアル」に基づくせん断耐力とする。

せん断耐力は、「土木学会マニュアル」に基づき「a. 棒部材式」を適用することとし、ディープビームとなる部材についても、「a. 棒部材式」を用いることで安全側の評価とする。

CCb 工法を用いる構造部材については「b. CCb によりせん断補強された部材のせん断耐力式」を、増厚補強を行う構造部材については「c. 増厚部におけるせん断耐力式」を用いる。また、CCb 適用部材に対して増厚補強を行う場合については、「d. CCb 適用部材に対して増厚補強を行う場合におけるせん断耐力式」を用いる。せん断破壊に対する耐力評価フローを図 3-5 に示す。

増厚部におけるせん断耐力については、「鉄道総合技術研究所 平成 13 年 3 月 鉄道構造物等設計標準・同解説（開削トンネル）」（以下「鉄道標準」という。）によることとする。

各要求機能に対する確認について、止水機能及び支持機能のいずれも、せん断破壊に対しては、終局状態に至らないことを目標性能とすることからせん断耐力を許容限界とする。

壁部材の面内せん断に対する許容限界は、限界せん断ひずみ  $2000\mu$  ( $2/1000$ ) とする。限界せん断ひずみ  $2000\mu$  ( $2/1000$ ) は、「原子力発電所耐震設計技術指針（J E A G 4 6 0 1-1987）」において、耐震壁の終局耐力に相当する面内せん断ひずみ  $4000\mu$  ( $4/1000$ ) に余裕を見込んだ許容限界かつ耐震壁の支持機能に対する許容限界として規定されている。

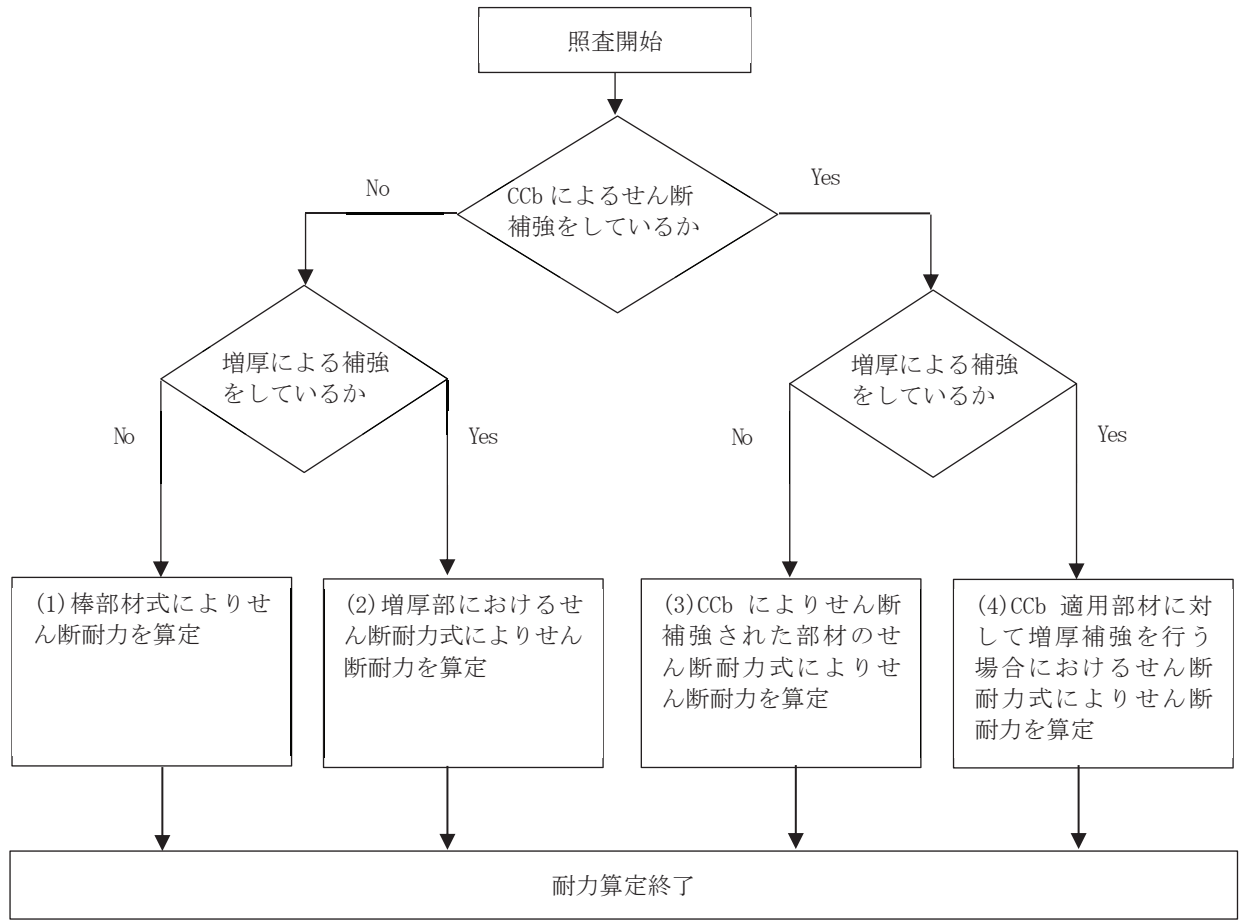


図 3-5 せん断破壊に対する耐力評価フロー

a. 棒部材式

$$V_{yd} = V_{cd} + V_{sd}$$

ここで,  $V_{yd}$  : せん断耐力

$V_{cd}$  : コンクリートが分担するせん断耐力

$V_{sd}$  : せん断補強鉄筋が分担するせん断耐力

$$V_{cd} = \beta_d \cdot \beta_p \cdot \beta_n \cdot \beta_a \cdot f_{vcd} \cdot b_w \cdot d / \gamma_{bc}$$

$$f_{vcd} = 0.20 \sqrt[3]{f'_{cd}} \quad \text{ただし, } f_{vcd} > 0.72 \text{ (N/mm}^2\text{)} \text{ となる場合は}$$

$$f_{vcd} = 0.72 \text{ (N/mm}^2\text{)}$$

$$\beta_d = \sqrt[4]{1/d} \quad (d \text{ [m]}) \quad \text{ただし, } \beta_d > 1.5 \text{ となる場合は } \beta_d = 1.5$$

$$\beta_p = \sqrt[3]{100p_v} \quad \text{ただし, } \beta_p > 1.5 \text{ となる場合は } \beta_p = 1.5$$

$$\beta_n = 1 + M_0/M_d \quad (N'_d \geq 0) \quad \text{ただし, } \beta_n > 2.0 \text{ となる場合は } \beta_n = 2.0$$

$$= 1 + 2M_0/M_d \quad (N'_d < 0) \quad \text{ただし, } \beta_n < 0 \text{ となる場合は } \beta_n = 0$$

$$\beta_a = 1$$

ここで,  $f'_{cd}$  : コンクリート圧縮強度の設計用値(N/mm<sup>2</sup>)で設計基準強度 $f'_{ck}$ を材料係数 $\gamma_{mc}$ で除したもの

$p_v$  : 引張鉄筋比  $p_v = A_s / (b_w \cdot d)$

$A_s$  : 引張側鋼材の断面積

$b_w$  : 部材の有効幅

$d$  : 部材の有効高さ

$N'_d$  : 設計軸圧縮力

$M_d$  : 設計曲げモーメント

$M_0$  :  $M_d$ に対する引張縁において, 軸方向力によって発生する応力を打ち消すのに必要なモーメント (デコンプレッションモーメント)

$$M_0 = N'_d \cdot D / 6$$

$D$  : 断面高さ

$a/d$  : せん断スパン比

$\gamma_{bc}$  : 部材係数

$\gamma_{mc}$  : 材料係数

$$V_{sd} = \{A_w f_{wyd} (\sin \alpha + \cos \alpha) / s\} z / \gamma_{bs}$$

ここで,  $A_w$  : 区間  $s$  におけるせん断補強筋の総断面積

$f_{wyd}$  : せん断補強筋の降伏強度の材料係数  $\gamma_{ms}$  で除したもので、  
400N/mm<sup>2</sup>以下とする。ただし、コンクリートの圧縮強度の特性値  
 $f'_{ck}$  が 60N/mm<sup>2</sup> 以上の時は、800N/mm<sup>2</sup> 以下としてよい。

$\alpha$  : せん断補強筋と部材軸のなす角度

$s$  : せん断補強筋の配置間隔

$z$  : 圧縮応力の合力の作用位置から引張鋼材図心までの距離で、  
 $d/1.15$  とする。

$\gamma_{bs}$  : 部材係数

$\gamma_{ms}$  : 材料係数

b. Ccb によりせん断補強された部材のせん断耐力式 (棒部材式)

第3号機海水ポンプ室において後施工せん断補強 (セラミックキャップバー (Ccb)) を配置した構造部材のせん断耐力については、「一般財団法人土木研究センター 建設技術審査証明報告書 後施工セラミック定着型せん断補強鉄筋「セラミックキャップバー (Ccb)」」に示されている以下の設計式により求める。

$$V_{pyd} = V_{cd} + V_{sd} + V_{CCbd} \quad (1)$$

$$V_{CCbd} = \beta_{aw} \cdot V_{awd}$$

$$= \beta_{aw} \left\{ A_{aw} \cdot f_{awy d} (\sin \alpha_{aw} + \cos \alpha_{aw}) / S_{aw} \right\} z / \gamma_b \quad (2)$$

$$\beta_{aw} = \eta = 1 - \frac{1}{2} \frac{y}{S_{rb}} \quad (3)$$

ここに,

$V_{cd}$  : せん断補強鋼材を用いない壁部材の単位幅あたりのせん断耐力

$V_{sd}$  : 既存のせん断補強鋼材により受け持たれる壁部材の単位幅あたりのせん断耐力



$V_{CCbd}$  : セラミックキャップバー (CCb) により受け持たれる壁部材の単位幅あたりのせん断耐力

$V_{awd}$  : セラミックキャップバー (CCb) を通常のスターラップと見なして求められる壁部材の単位幅あたりのせん断耐力

$\beta_{aw}$  : セラミックキャップバー (CCb) のせん断耐力の向上への有効性を示す係数

$A_{aw}$  : 単位長さ当たりの区間  $S_{aw}$  におけるセラミックキャップバー (CCb) の総断面積

$f_{awyd}$  : セラミックキャップバー (CCb) の設計降伏強度で  $400\text{N/mm}^2$  以下とする。

$\alpha_{aw}$  : セラミックキャップバー (CCb) が部材軸となす角度

$S_{aw}$  : セラミックキャップバー (CCb) の配置間隔

$z$  : 圧縮応力の合力の作用位置から引張鋼材図心までの距離で一般に  $d/1.15$  としてよい。

$\gamma_b$  : 部材係数 (一般に 1.10 としてよい)

$l_y$  : セラミックキャップバー (CCb) の先端型定着耐の定着長 (5D としてよい)

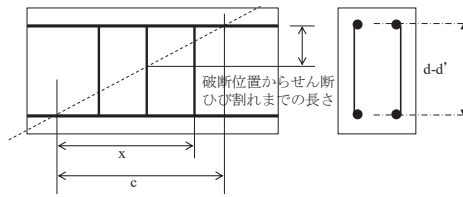
$S_{rb}$  : 補強対象部材の圧縮鉄筋と引張鉄筋の間隔

**D : CCb の鉄筋径**

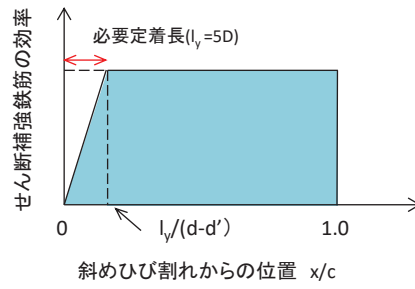
$d$  : 補強対象部材の有効高さ

$d'$  : 差し込み側の部材表面から圧縮鋼材図心までの距離

セラミックキャップバー (CCb) が負担するせん断耐力は、先端型定着体の定着長が 5D であることから、通常のせん断鉄筋に比べ補強効率が低下することから、セラミックキャップバー (CCb) が負担するせん断耐力は同定着長と補強対象部材の主筋間隔から算出される有効率  $\beta_{aw}$  を通常のせん断補強鉄筋の負担分に乗じることにより考慮されている。図 3-6 に有効率算定における概念図を示す。



(a) 斜めひび割れ内に定着不良が生じたせん断補強鉄筋



(b) 標準型

図 3-6 セラミックキャップバー (CCb) の有効率算定の概念図

c. 増厚部におけるせん断耐力式

増厚補強部において既設部材と補強部材を一体壁として考慮する場合におけるせん断補強鋼材が負担するせん断耐力  $V_{wd}$  の算定の考え方を図 3-7 に示す。せん断耐力式は、既設部材と補強部材が負担するせん断耐力の足し合わせとして図 3-7 の (解 8.4.3-3) により算定する。

各々の壁に分離してせん断補強鋼材を配置する場合において、せん断補強鋼材により受け持たれる設計せん断耐力は、式(解8.4.3-3)により算定してよい。

$h_1 > h_2$  の場合

$$V_{wd} = \left\{ \frac{A_{w1} \cdot f_{wyd} \cdot (\sin \theta_1 + \cos \theta_1) \cdot z_1}{s_1} + \frac{A_{w2} \cdot f_{wyd} \cdot (\sin \theta_2 + \cos \theta_2) \cdot z_2}{s_2} \cdot \frac{h_2}{h_1} \right\} / \gamma_b$$

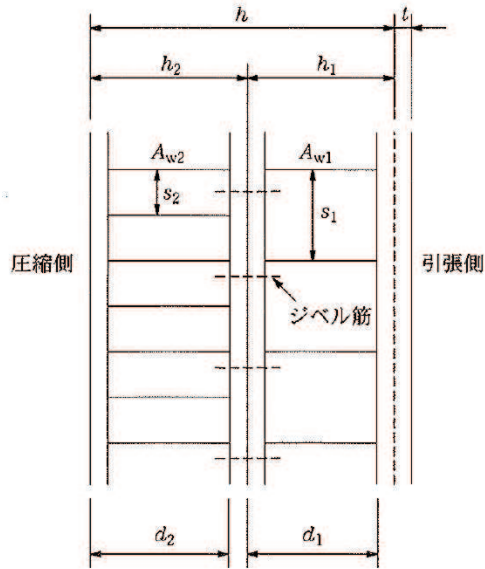
$h_1 = h_2$  の場合

$$V_{wd} = \left\{ \frac{A_{w1} \cdot f_{wyd} \cdot (\sin \theta_1 + \cos \theta_1) \cdot z_1}{s_1} + \frac{A_{w2} \cdot f_{wyd} \cdot (\sin \theta_2 + \cos \theta_2) \cdot z_2}{s_2} \right\} / \gamma_b$$

$h_1 < h_2$  の場合

$$V_{wd} = \left\{ \frac{A_{w1} \cdot f_{wyd} \cdot (\sin \theta_1 + \cos \theta_1) \cdot z_1}{s_1} \cdot \frac{h_1}{h_2} + \frac{A_{w2} \cdot f_{wyd} \cdot (\sin \theta_2 + \cos \theta_2) \cdot z_2}{s_2} \right\} / \gamma_b \quad (\text{解 } 8.4.3-3)$$

ここに、 $V_{wd}$ ：せん断補強鋼材により受け持たれる棒部材の設計せん断耐力



解説図 8.4.3-4 一体化におけるせん断補強鉄筋の配置 (分離して配置した場合)

図 3-7 既設部材と補強部材を一体壁としたせん断耐力の考え方  
(「鉄道標準」より抜粋 (一部加筆))

d. CCb 適用部材に対して増厚補強を行う場合におけるせん断耐力式

既設部材に CCb 補強を行う一体壁のせん断耐力のうちせん断補強鋼材が負担する設計せん断耐力  $V_{wd}$  は、図 3-6 に示す有効率  $\beta_{aw}$  を考慮する。例として、 $h_1 > h_2$  の場合に  $\beta_{aw}$  を考慮したせん断耐力式を式 (1) に示す。

コンクリート負担分のせん断耐力  $V_{cd}$  は、既設部材と補強部材との間にジベル鉄筋を配置し、既設部材と補強部材が一体として挙動するため、増厚を実施しない部材において参照している「土木学会マニュアル」に基づき算出する。

$$V_{wd} = \left\{ \frac{A_{w1} f_{wyd} (\sin \theta_1 + \cos \theta_1) z_1}{s_1} \cdot \beta_{aw} + \frac{A_{w2} f_{wyd} (\sin \theta_2 + \cos \theta_2) z_2}{s_2} \cdot \frac{h_2}{h_1} \right\} / \gamma_b \quad (1)$$

ここで、

$A_{wi}$  : 区間  $s$  におけるせん断補強筋の総断面積

$f_{wyd}$  : せん断補強筋の降伏強度を材料係数  $\gamma_{ms}$  (1.0) で除したもので、  
400N/mm<sup>2</sup>以下とする。ただし、コンクリートの圧縮強度の特性値  $f'_{ck}$  が60N/mm<sup>2</sup>以上の時は、800N/mm<sup>2</sup>以下とする。

$\theta_i$  : せん断補強筋と部材軸のなす角度

$s_i$  : せん断補強筋の配置間隔

$z_i$  : 圧縮応力の合力の作用位置から引張鋼材図心までの距離で、 $d/1.15$  とする。

$\gamma_b$  : 部材係数 (=1.1)

$h_i$  : 部材厚

(3) 壁部材の面内せん断に対する許容限界

壁部材の面内せん断に対する許容限界は、「原子力発電所耐震設計技術指針（J E A G 4 6 0 1-1987）」に基づき、面内せん断ひずみ  $2000\mu$  (2/1000) を許容限界とする。

「原子力発電所耐震設計技術指針（J E A G 4 6 0 1-1987）」において、限界せん断ひずみ  $2000\mu$  (2/1000) は、耐震壁の終局耐力に相当する面内せん断ひずみ  $4000\mu$  (4/1000) に余裕を見込んだ許容限界として規定されている。

### 3.3.2 基礎地盤の支持性能に対する許容限界

#### (1) 基礎地盤（牧の浜部層）

基礎地盤（牧の浜部層）に発生する接地圧に対する許容限界は、添付書類「VI-2-1-3 地盤の支持性能に係る基本方針」に基づき、岩盤の極限支持力とする。

基礎地盤（牧の浜部層）の許容限界を表 3-5 に示す。

表 3-5 基礎地盤の支持性能に対する許容限界

評価項目	基礎地盤	許容限界 (N/mm <sup>2</sup> )
極限支持力	牧の浜部層	11.4

#### (2) MMR（既設）

MMR（既設）に発生する接地圧に対する許容限界は、「コンクリート標準示方書[構造性能照査編]（土木学会，2002年制定）」に基づき、コンクリートの支圧強度とする。

MMR（既設）の許容限界を表 3-6 に示す。

表 3-6 MMR（既設）の支持性能に対する許容限界

評価項目	MMR（既設）	許容限界 (N/mm <sup>2</sup> )
支圧強度	コンクリート ( $f'_{ck} = 15.6 \text{ N/mm}^2$ )	$f'_a = 15.6$

### 3.4 評価方法

#### 3.4.1 構造部材の健全性評価

第3号機海水ポンプ室の耐震評価は、非線形ソリッド要素を用いた三次元構造解析により実施する。三次元構造解析には、解析コード「COM3 Ver. 9.15」を用いる。なお、解析コードの検証及び妥当性確認等の概要については、添付書類「VI-5 計算機プログラム（解析コード）の概要」に示す。

三次元構造解析への入力荷重は、添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」に基づく地震応答解析において、第3号機海水ポンプ室の耐震評価に支配的な荷重が最大となる時刻を選定し、当該時刻における地震時応答から設定する。

添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」に基づく地震応答解析により算定した地震時荷重（地震時土圧及び慣性力）を用いて、三次元構造解析により算定した照査用応答値が、「3.3 許容限界」において設定した許容限界を下回ることを確認する。

#### (1) 解析モデル

材料の非線形特性を考慮した非線形ソリッド要素でモデル化する。三次元構造解析モデルを図3-8及び図3-9に示す。

また、構造部材（鉄筋コンクリート）の非線形特性を図3-10及び図3-11に示す。

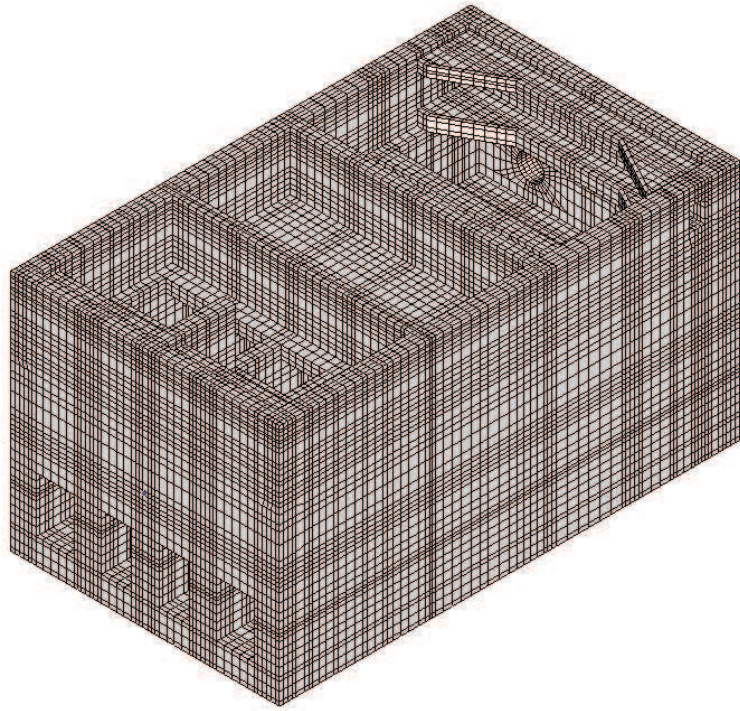
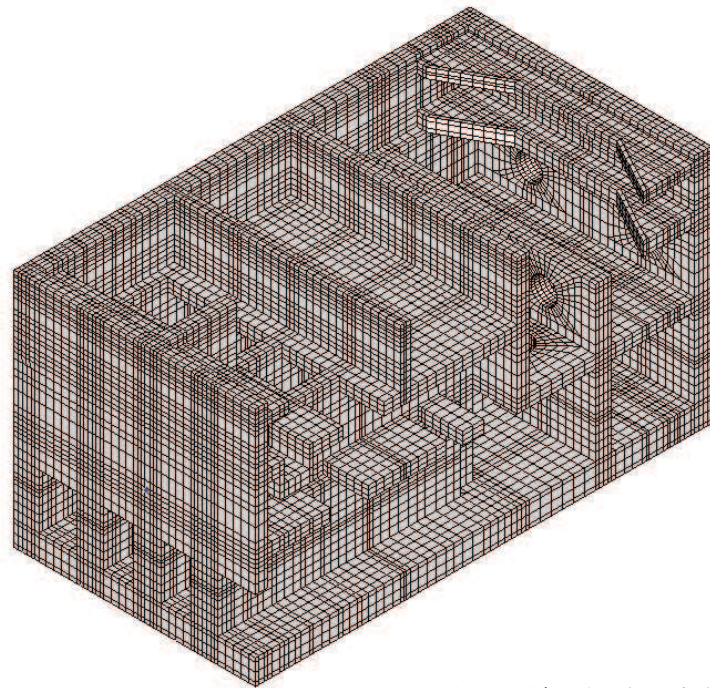


図3-8 三次元構造解析モデル図（鳥瞰図）



注：手前の側壁は非表示としている。

図3-9 三次元構造解析モデル図（鳥瞰図）



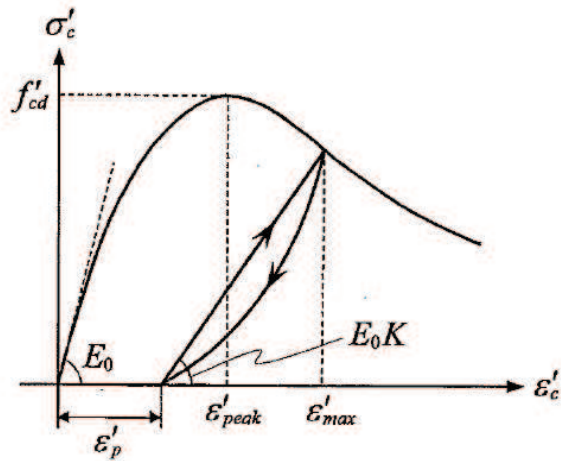


図3-10 構造部材の非線形特性（コンクリートの応力-ひずみ関係）  
 （「コンクリート標準示方書[設計編]（土木学会，2017年制定）」より引用）

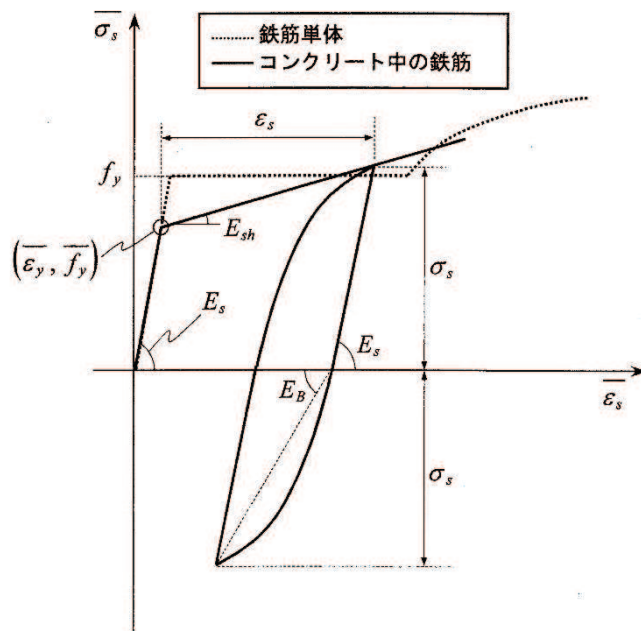
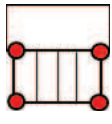
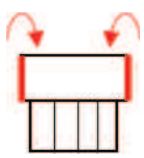


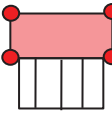
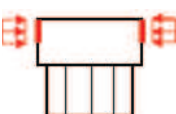


図3-11 構造部材の非線形特性（鉄筋の応力-ひずみ関係）  
 （「コンクリート標準示方書[設計編]（土木学会，2012年制定）」より引用）

(2) 照査時刻

構造部材の健全性評価において、照査時刻は構造的特徴を踏まえ、損傷モードごと及び部材ごとに評価が厳しくなる時刻を地震応答解析の結果から複数選定する。表 3-7 に照査時刻の選定の考え方を示す。

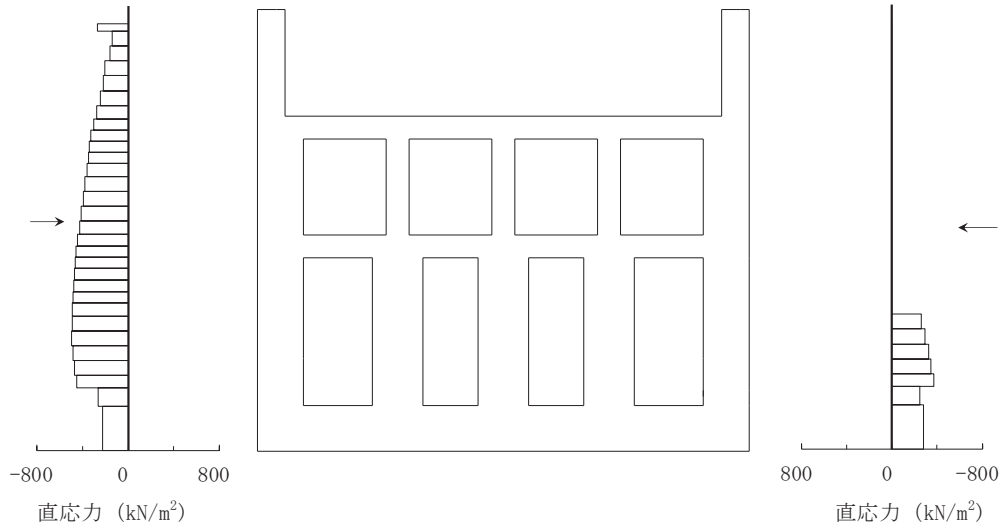
表 3-7 照査時刻の考え方

照査時刻	損傷モード	着目部位		荷重抽出時刻
時刻 1	曲げ・軸力系の破壊	壁 (面外)		下部構造（水路）における 頂底板間の層間変位が 最大となる時刻
時刻 2, 3	曲げ・軸力系の破壊	壁 (面外)		上部構造における 各側壁の転倒曲げモーメントが最大となる時刻
時刻 4	せん断破壊 (面外)	壁 (面外)		総水平荷重が 最大となる時刻
時刻 5, 6	せん断破壊 (面外)	壁 (面外)		上部構造における 各側壁の水平荷重が 最大となる時刻
時刻 7	せん断破壊 (面内)	壁 (面内)		面部材の層間変位が 最大となる時刻
時刻 8, 9	曲げ・軸力系の破壊 及び せん断破壊 (面外)	壁 (面外)		上部構造における 各側壁の上部荷重が 最大となる時刻

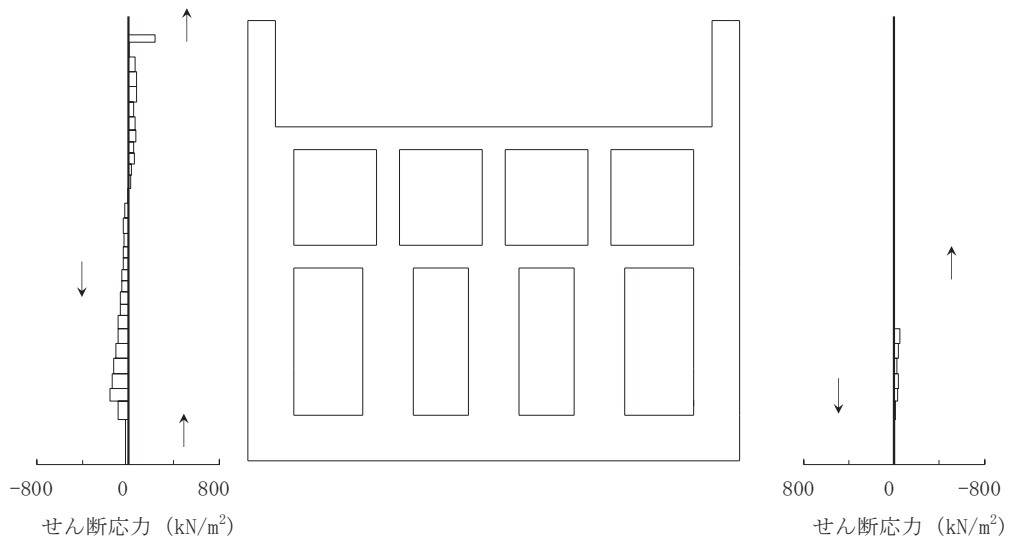
(3) 作用荷重分布図

a. 全応力解析による地震時荷重

曲げ・軸力系の破壊に対する照査及びせん断破壊に対する照査のうち、全応力解析による地震時荷重を用いた三次元構造解析の結果において照査値が最大となる作用荷重分布図を図3-12及び図3-13に示す。



直応力

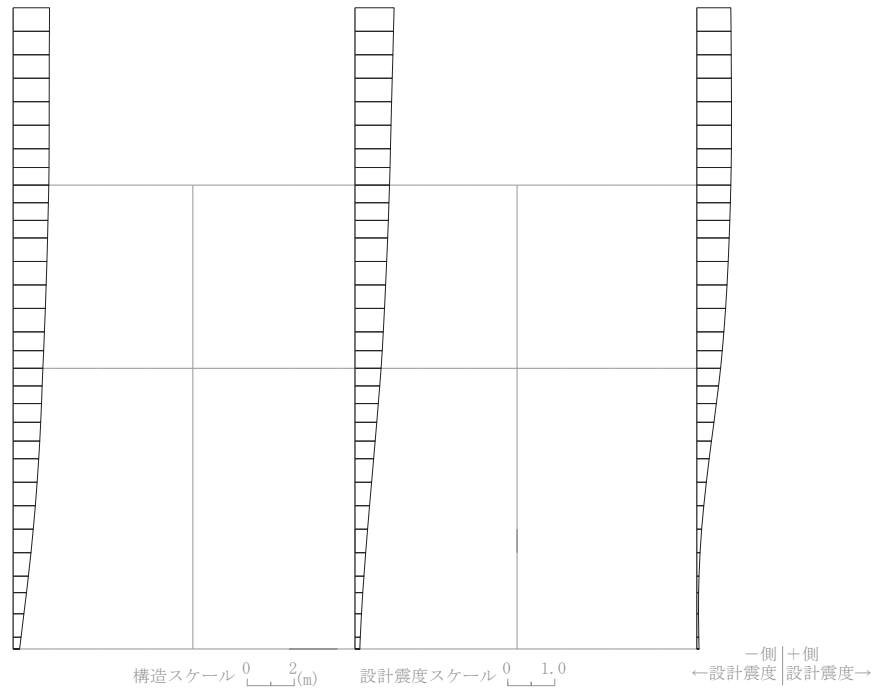


せん断応力

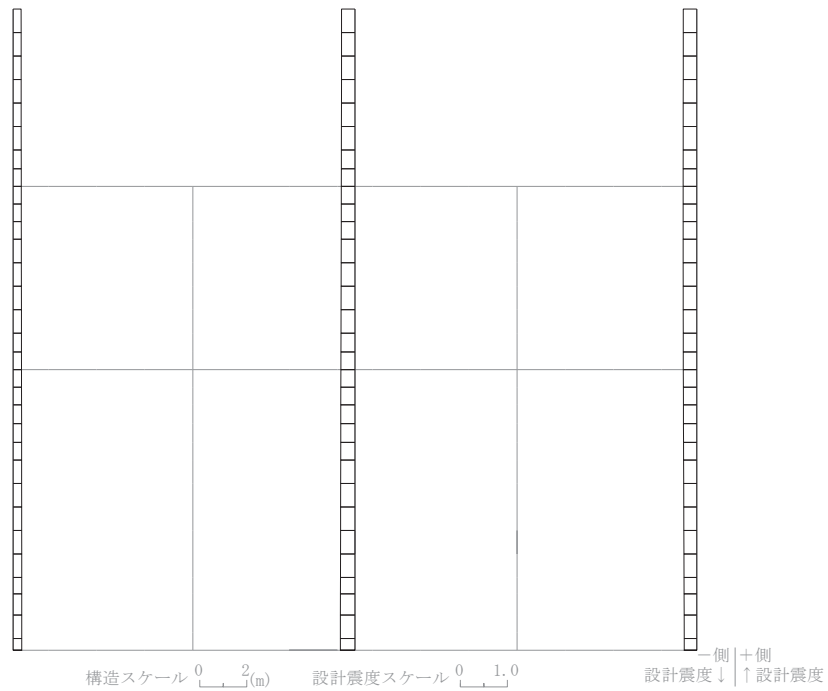
図中の矢印は荷重の作用方向を示す

図3-12(1) 作用荷重分布図 (直応力及びせん断応力)

(解析ケース④, S<sub>s</sub>-N1 (++) , A-A断面, 南北 (スクリーンエリア))



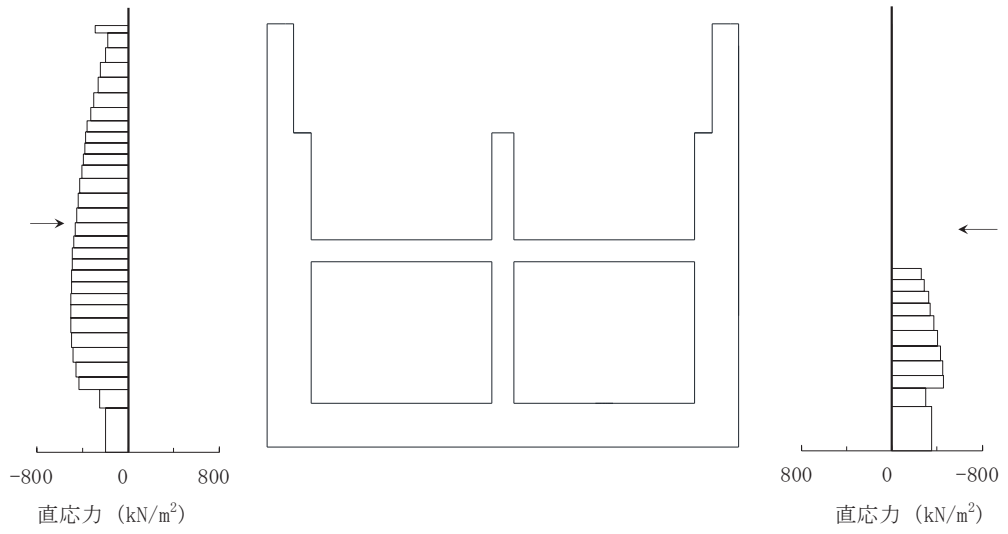
水平震度



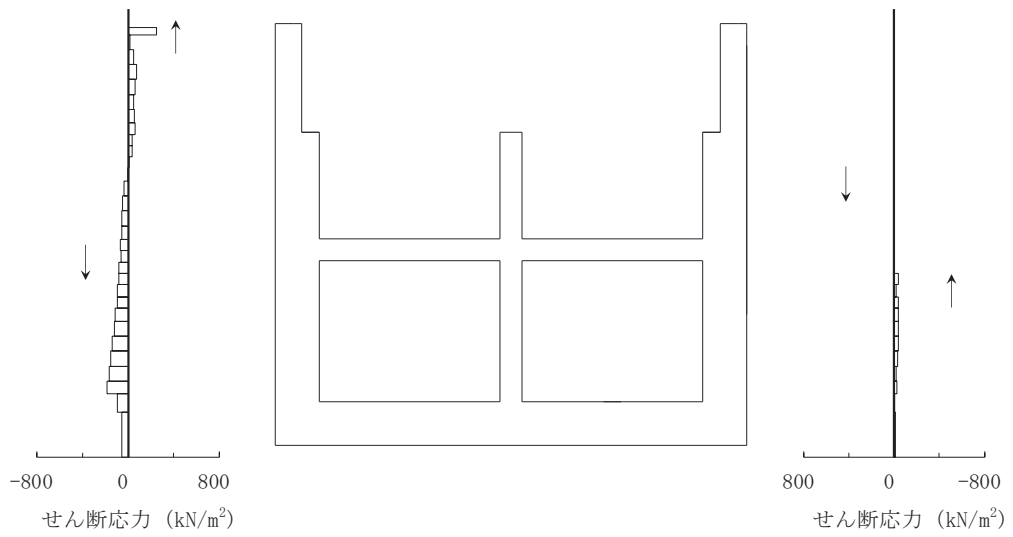
鉛直震度

図 3-12(2) 作用荷重分布図 (設計震度分布)

(解析ケース④, S<sub>s</sub>-N1 (++) , A-A 断面, 南北 (スクリーンエリア))



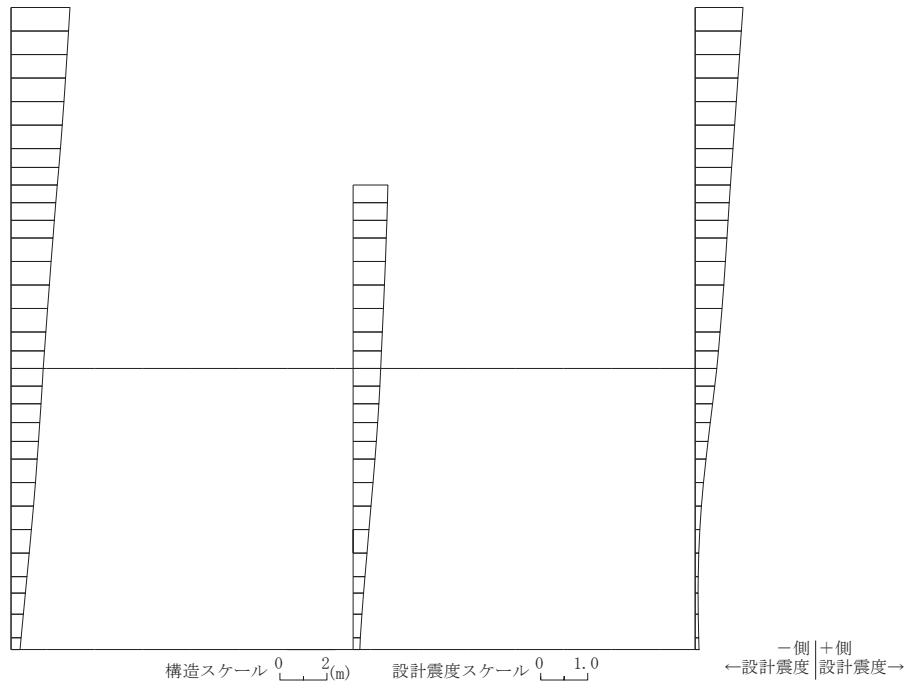
直応力



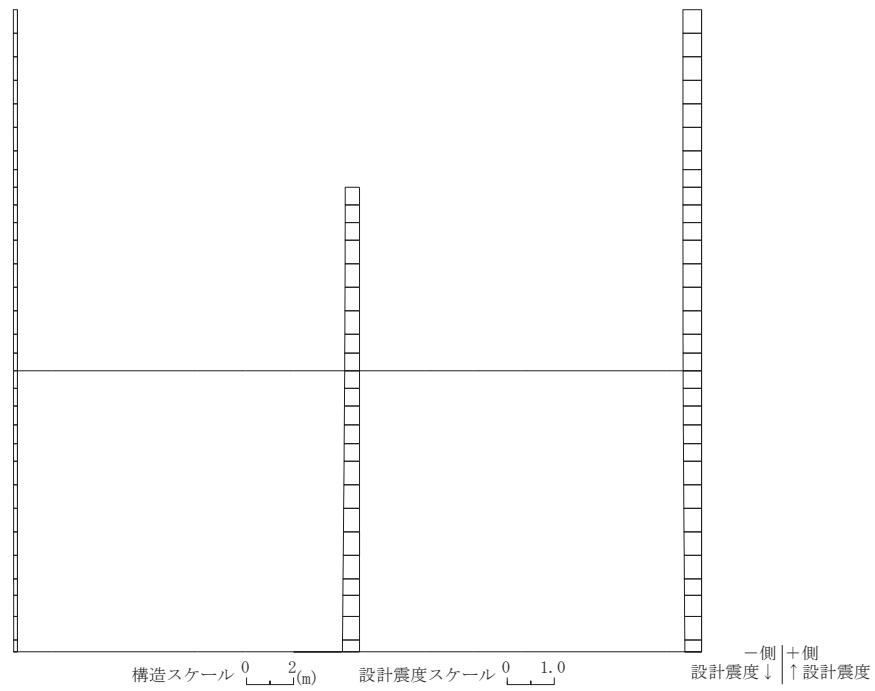
せん断応力

図中の矢印は荷重の作用方向を示す

図 3-13(1) 作用荷重分布図 (直応力及びせん断応力)  
(解析ケース④, S s - N 1 (++) , B-B 断面, 南北 (循環水ポンプエリア))



水平震度



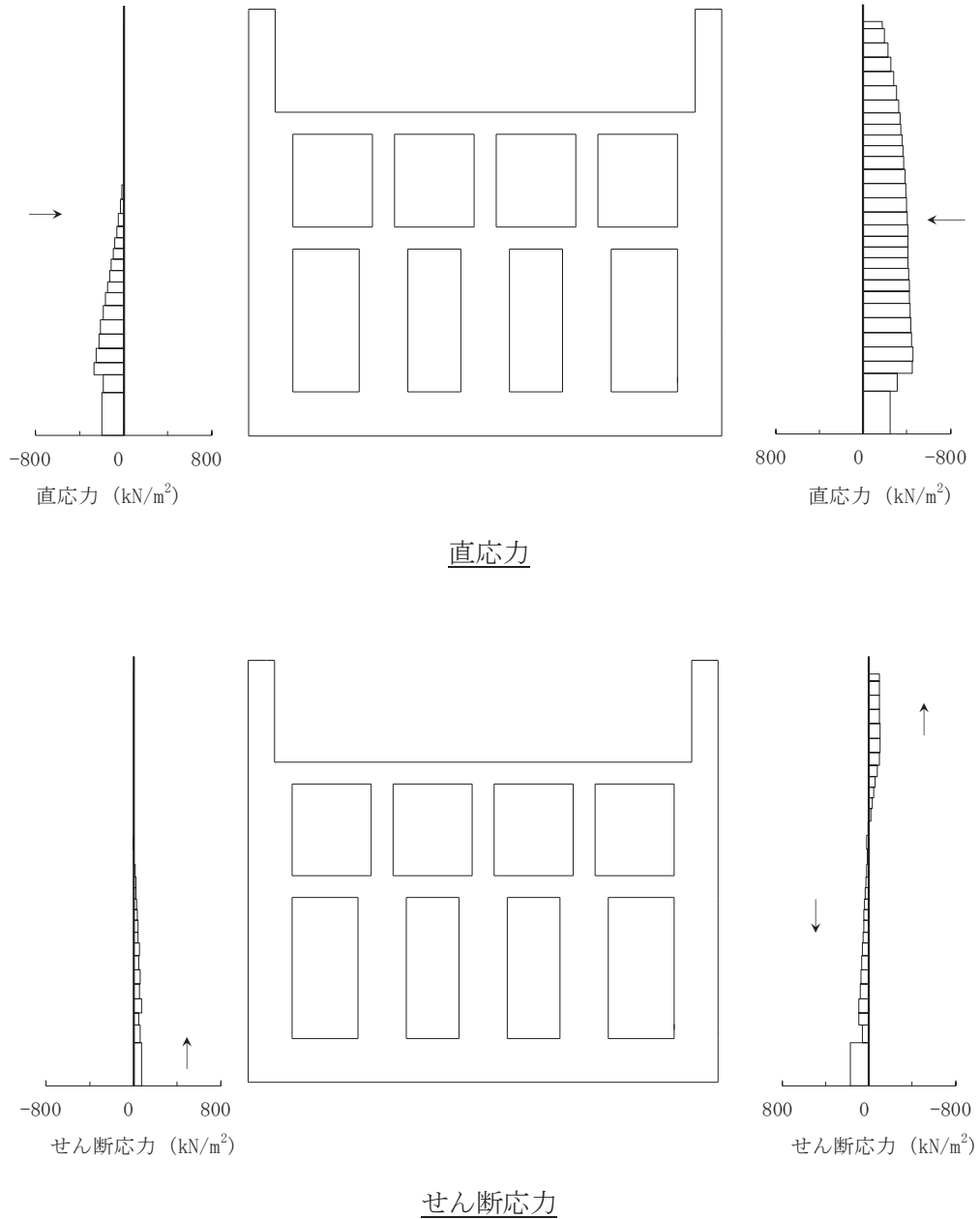
鉛直震度

図 3-13(2) 作用荷重分布図 (設計震度分布)

(解析ケース④, S s - N 1 (++) , B-B 断面, 南北 (循環水ポンプエリア))

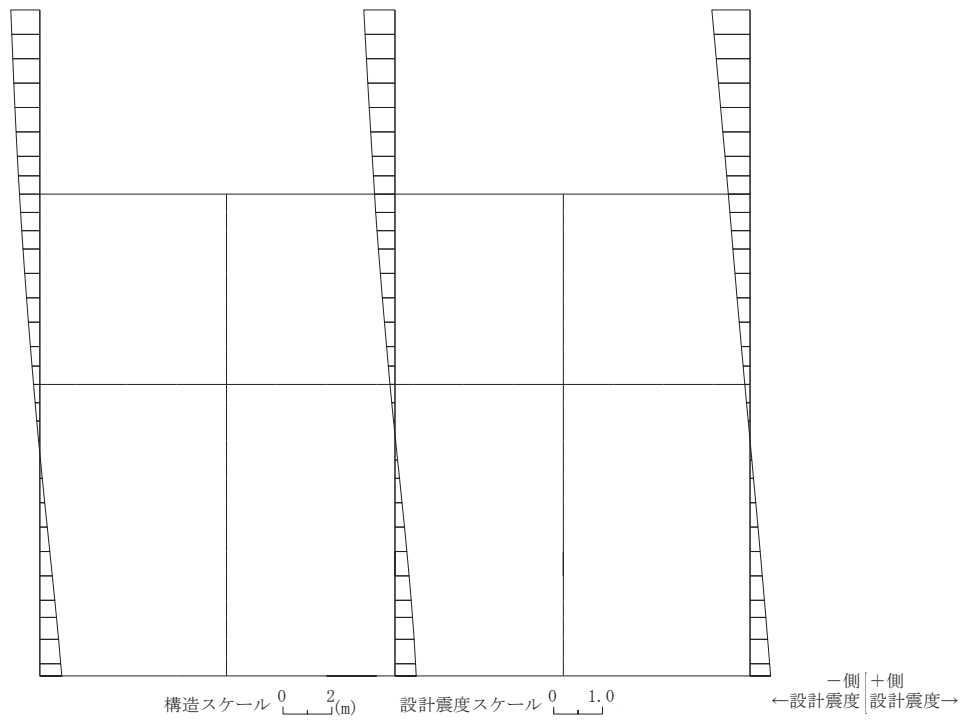
b. 有効応力解析による地震時荷重

曲げ・軸力系の破壊に対する照査及びせん断破壊に対する照査のうち、有効応力解析による地震時荷重を用いた三次元構造解析の結果において照査値が最大となる作用荷重分布図を図3-14及び図3-15に示す。

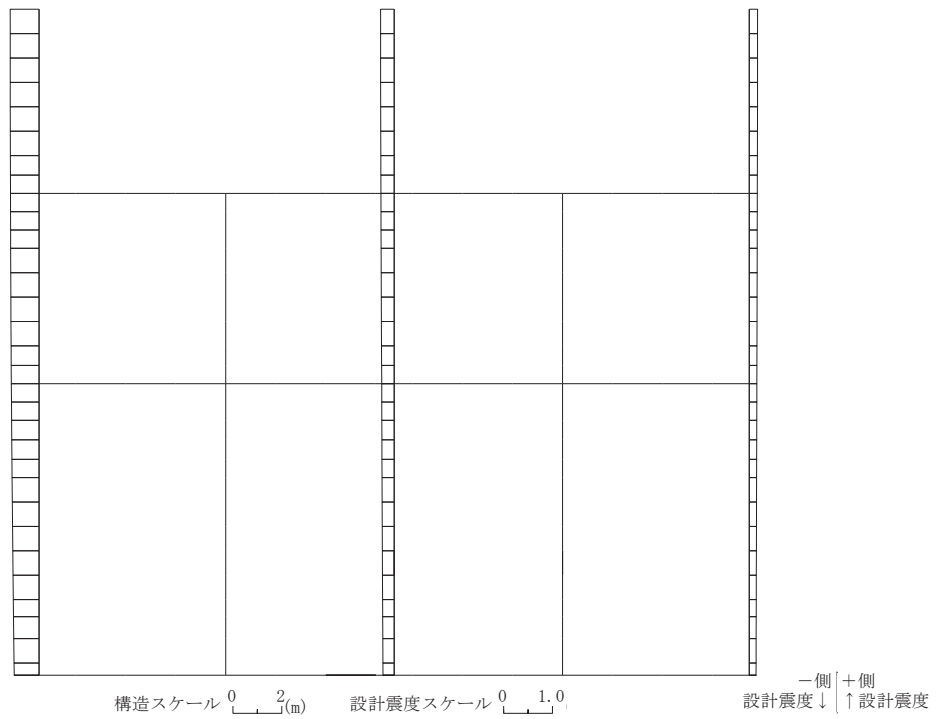


図中の矢印は荷重の作用方向を示す

図3-14(1) 作用荷重分布図 (直応力及びせん断応力)  
 (解析ケース⑥, S<sub>s</sub>-D2 (++) , A-A断面, 南北 (スクリーンエリア))



水平震度

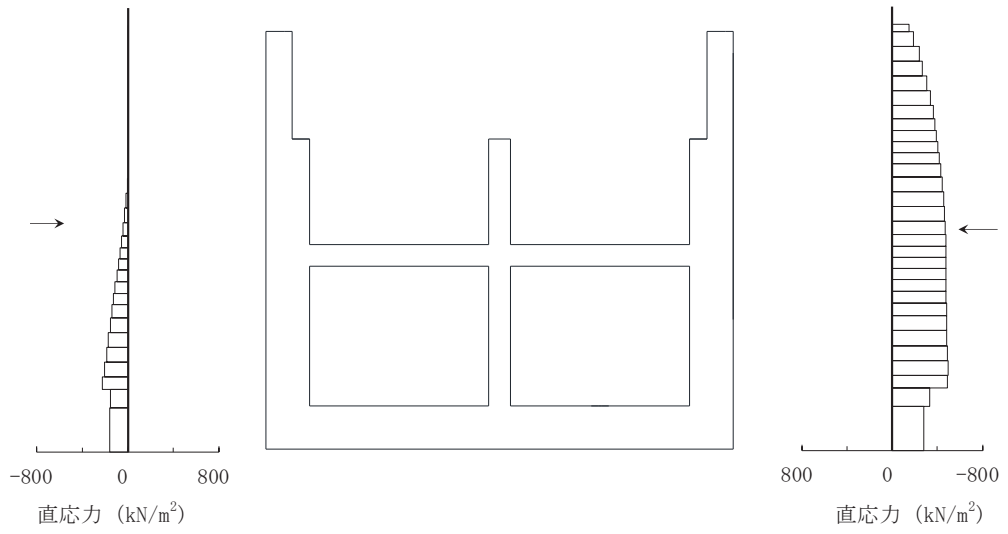


鉛直震度

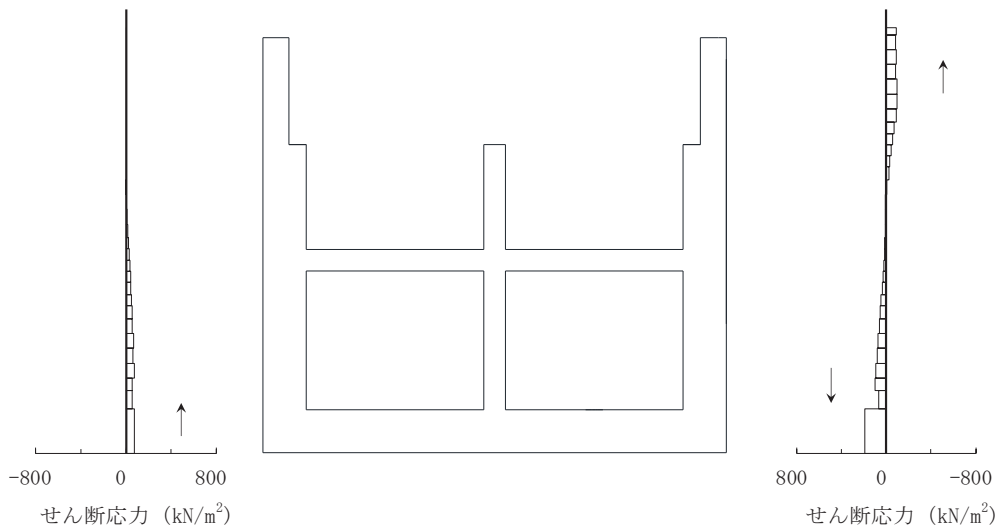
図 3-14(2) 作用荷重分布図 (設計震度分布)

(解析ケース⑥, S s - D 2 (++) , A-A 断面, 南北 (スクリーンエリア))





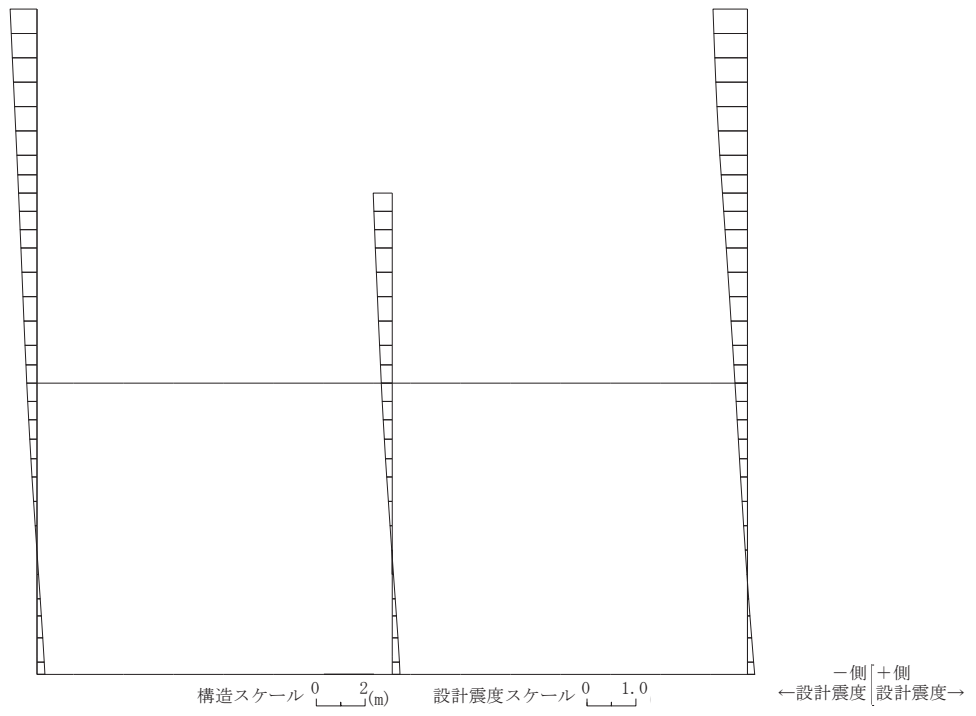
直応力



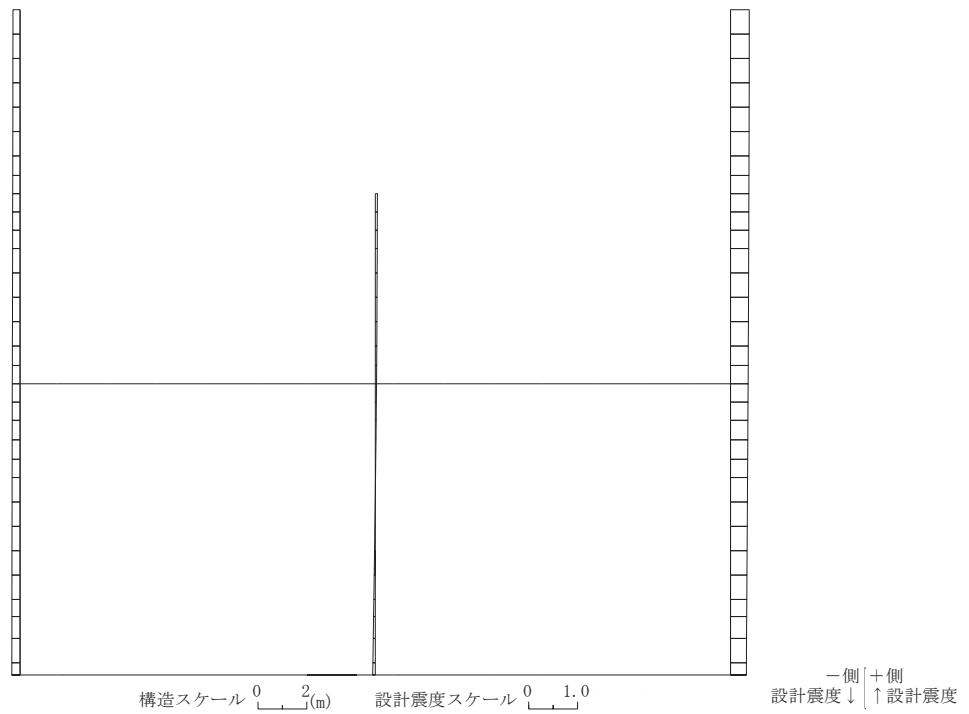
せん断応力

図中の矢印は荷重の作用方向を示す

図 3-15(1) 作用荷重分布図 (直応力及びせん断応力)  
(解析ケース⑥, S s - D 2 (++) , B-B 断面, 南北 (循環水ポンプエリア))



水平震度



鉛直震度

図3-15(2) 作用荷重分布図 (設計震度分布)

(解析ケース⑥, S s - D 2 (++) , B-B断面, 南北 (循環水ポンプエリア))

(4) 入力荷重

三次元構造解析の入力荷重は、設計値及び添付書類「VI-2-2-9 第3号機海水ポンプ室の地震応答計算書」より得られた地震応答解析に基づく「(2) 照査時刻」で選定した照査時刻における応答値を用いて算定する。地震時荷重は地震応答解析から抽出した荷重を各エリア奥行方向に一様に載荷する。入力荷重の一覧を表3-8に示す。

表3-8 三次元構造解析における入力荷重

区分	種別	考慮する荷重
常時荷重	固定荷重	躯体自重, 機器・配管荷重
	積載荷重	躯体に作用する積載荷重
	常時土圧	躯体側面に作用する常時土圧
	内水圧	躯体に作用する静水圧
	外水圧	躯体に作用する静水圧
地震時荷重	慣性力	躯体に作用する慣性力
	機器反力	機器・配管反力
	動水圧 (内水)	躯体に作用する動水圧*
	地震時土圧	躯体側面に作用する地震時土圧
	地震時水圧	躯体側面に作用する地震時水圧

注記\* : 動水圧は、地震応答解析から抽出した側壁及び導流壁の応答加速度に基づき算定する。

3.4.2 基礎地盤の支持性能評価

基礎地盤の支持性能評価においては、構造部材を支持する基礎地盤に発生する接地圧が許容限界を下回ることを確認する。

4. 構造部材の地震時応答

三次元構造解析に基づく、各構造部材の地震時応答結果を示す。各部材位置を図4-1に、各部材の要素座標系を図4-2及び図4-3に、ソリッド要素における各要素の断面力の方向を図4-4に示す。

圧縮縁ひずみの算出には解析コード「StrainCom3 Ver. 2021.01.26」を、主筋ひずみの算定には解析コード「Com3FldModRun Ver. 2021.01.06」を、断面力の算出には解析コード「Com3EvalSh Ver. 2021.01.27」を用いる。解析コードの検証及び妥当性確認の概要については、添付書類「VI-5 計算機プログラム（解析コード）の概要」に示す。

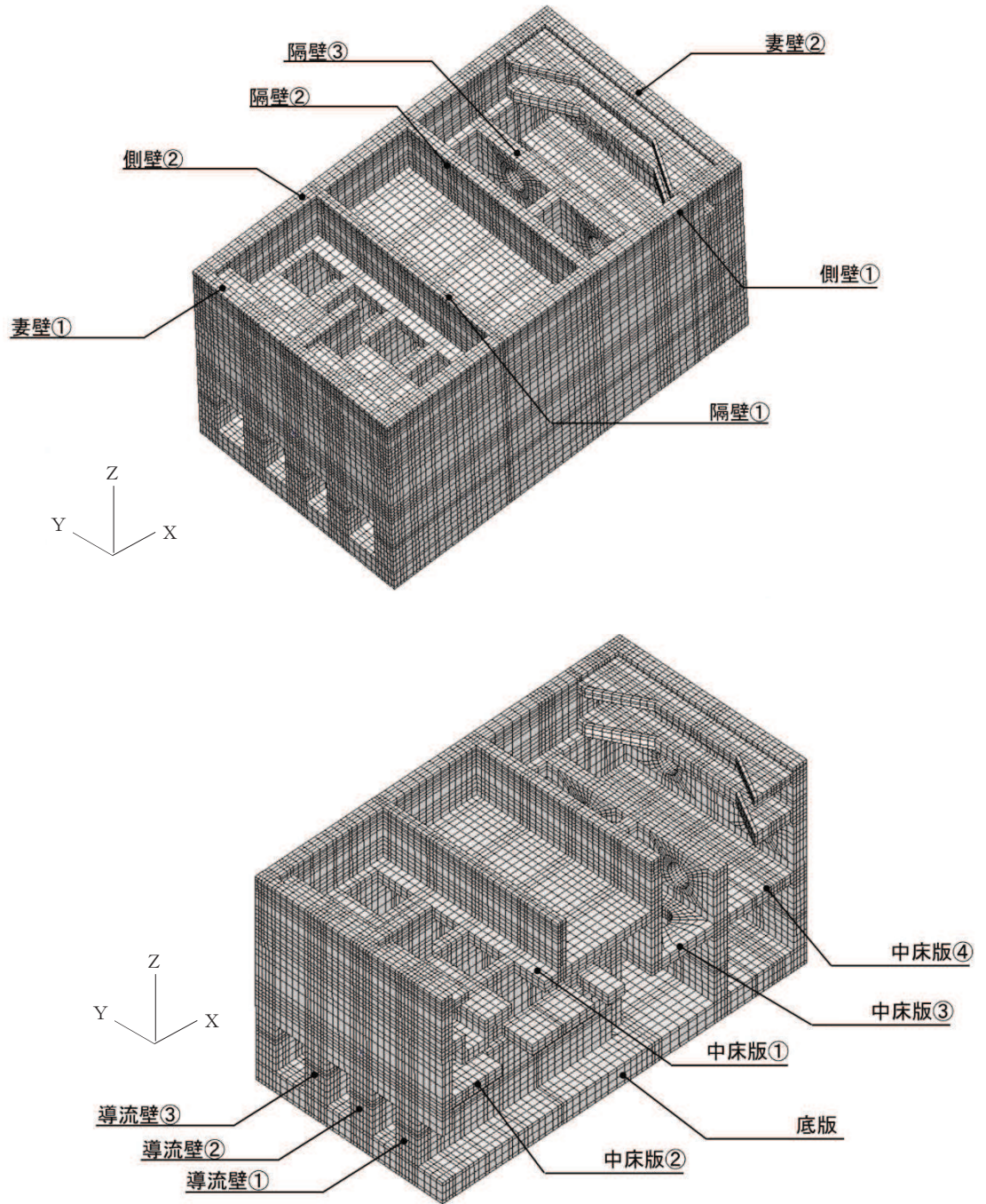
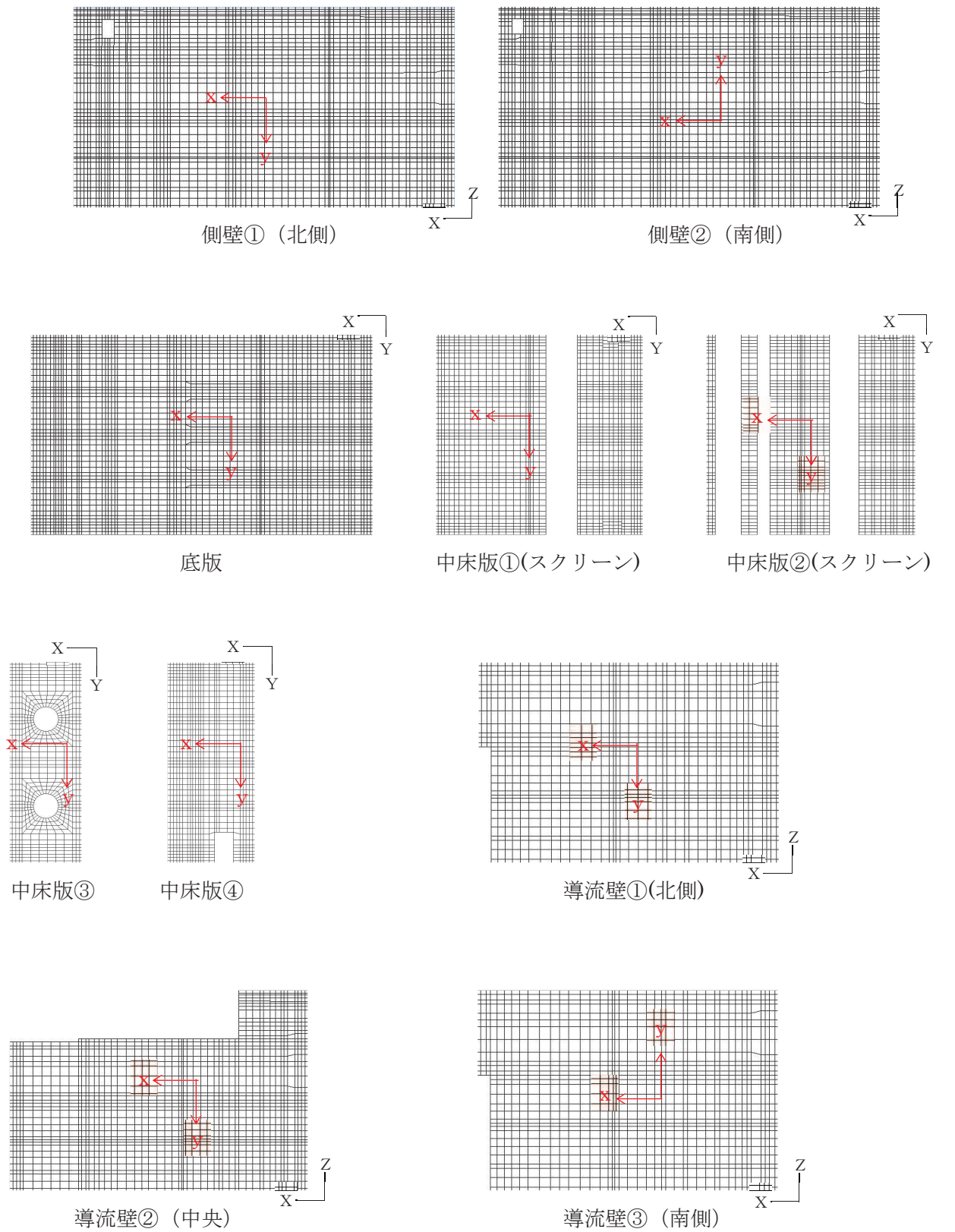


図4-1 各部材位置



黒：全体座標系を示す  
赤：要素座標系を示す

図 4-2 各部材の要素座標系 (1/2)

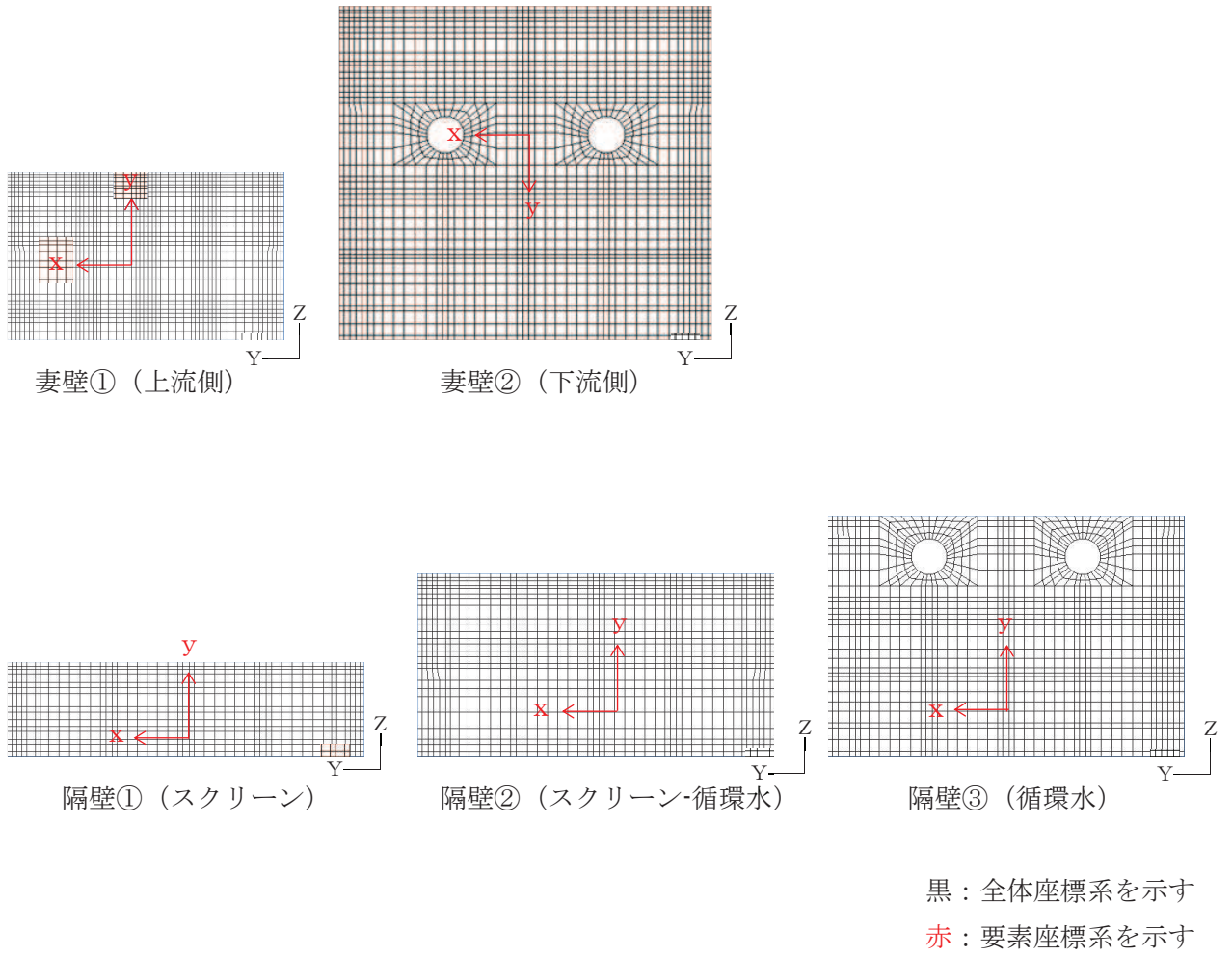
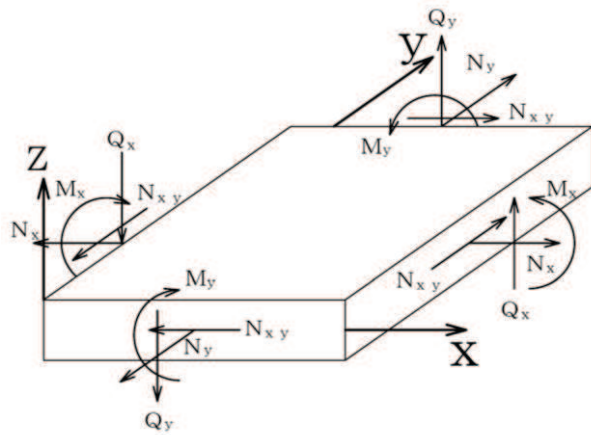


図 4-3 各部材の要素座標系 (2/2)



$M_x, M_y$  : 曲げモーメント  
 $Q_x, Q_y$  : せん断力  
 $N_x, N_y$  : 軸力  
 $N_{x y}$  : 面内せん断力

図 4-4 ソリッド要素における断面力の方向

#### 4.1 全応力解析による荷重に対する断面力分布

全応力解析による地震時荷重を用いた三次元構造解析結果における曲げ・軸力系の破壊に対する照査のうち、各部材のコンクリートの圧縮縁ひずみ、コンクリートの圧縮ひずみ及び主筋のひずみに対して最大照査値となる評価時刻でのひずみ分布を図 4-5～図 4-7 に、せん断破壊に対して最大照査値となる評価時刻での断面力分布を図 4-8～図 4-13 に示す。

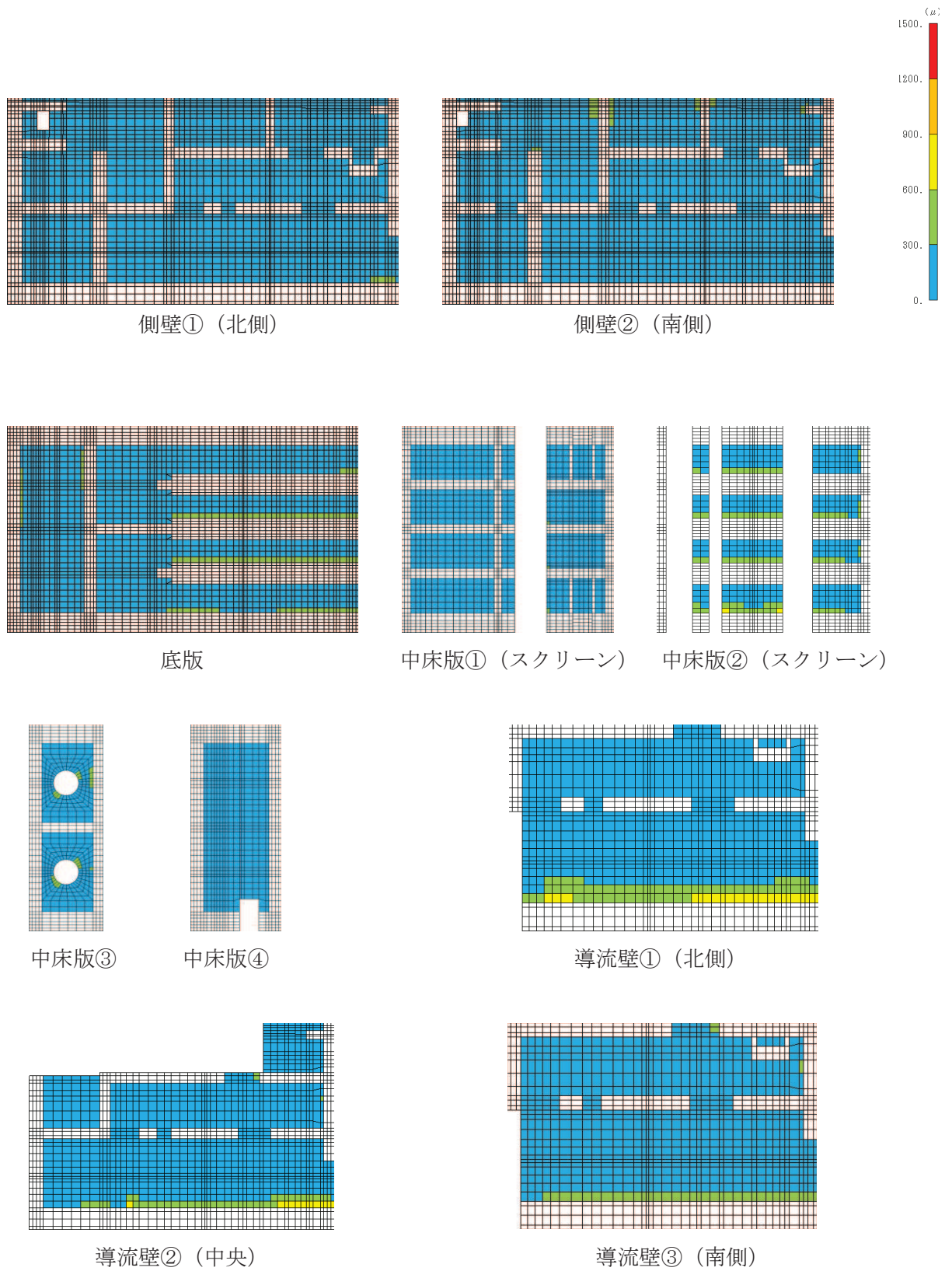


図 4-5(1) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮縁ひずみ)  
 (妻壁①, 解析ケース②, S s - N 1 (++) )



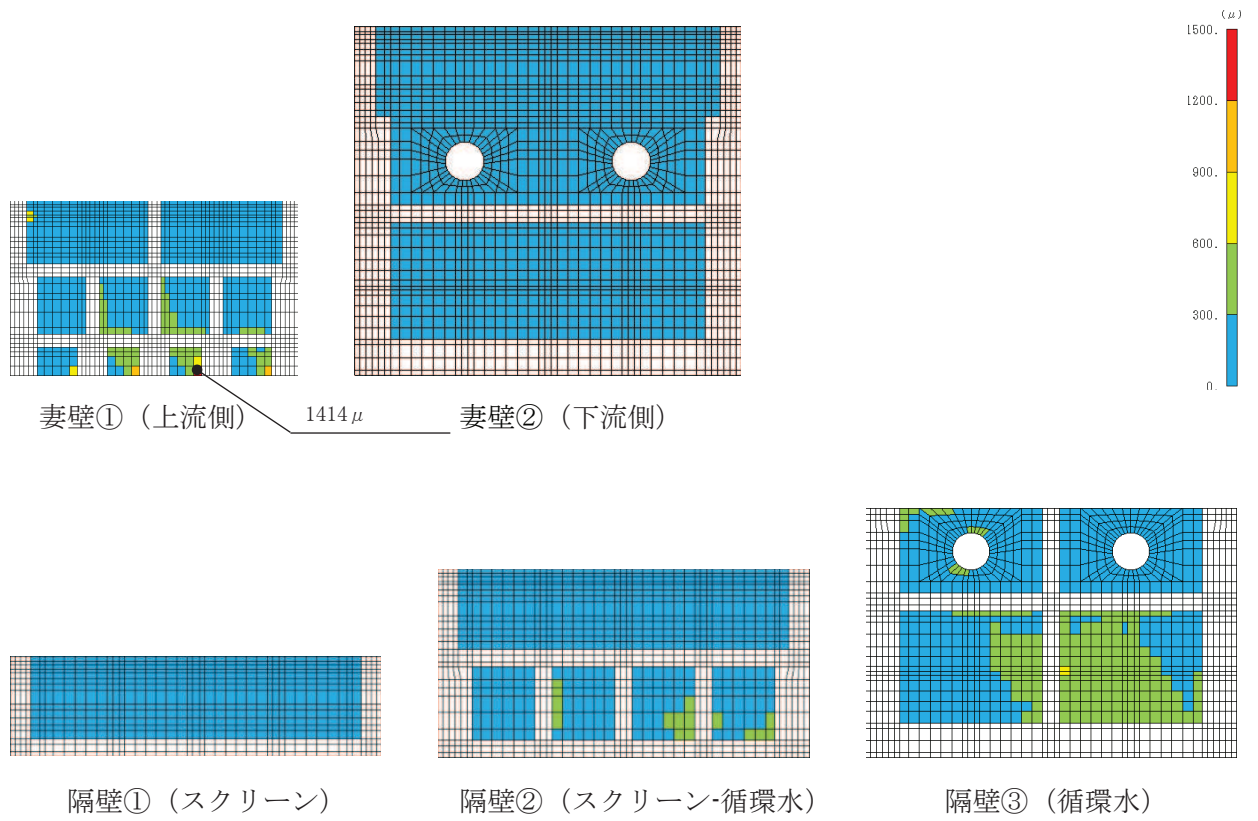


図 4-5(2) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮縁ひずみ)  
 (妻壁①, 解析ケース②, S s - N 1 (++) )

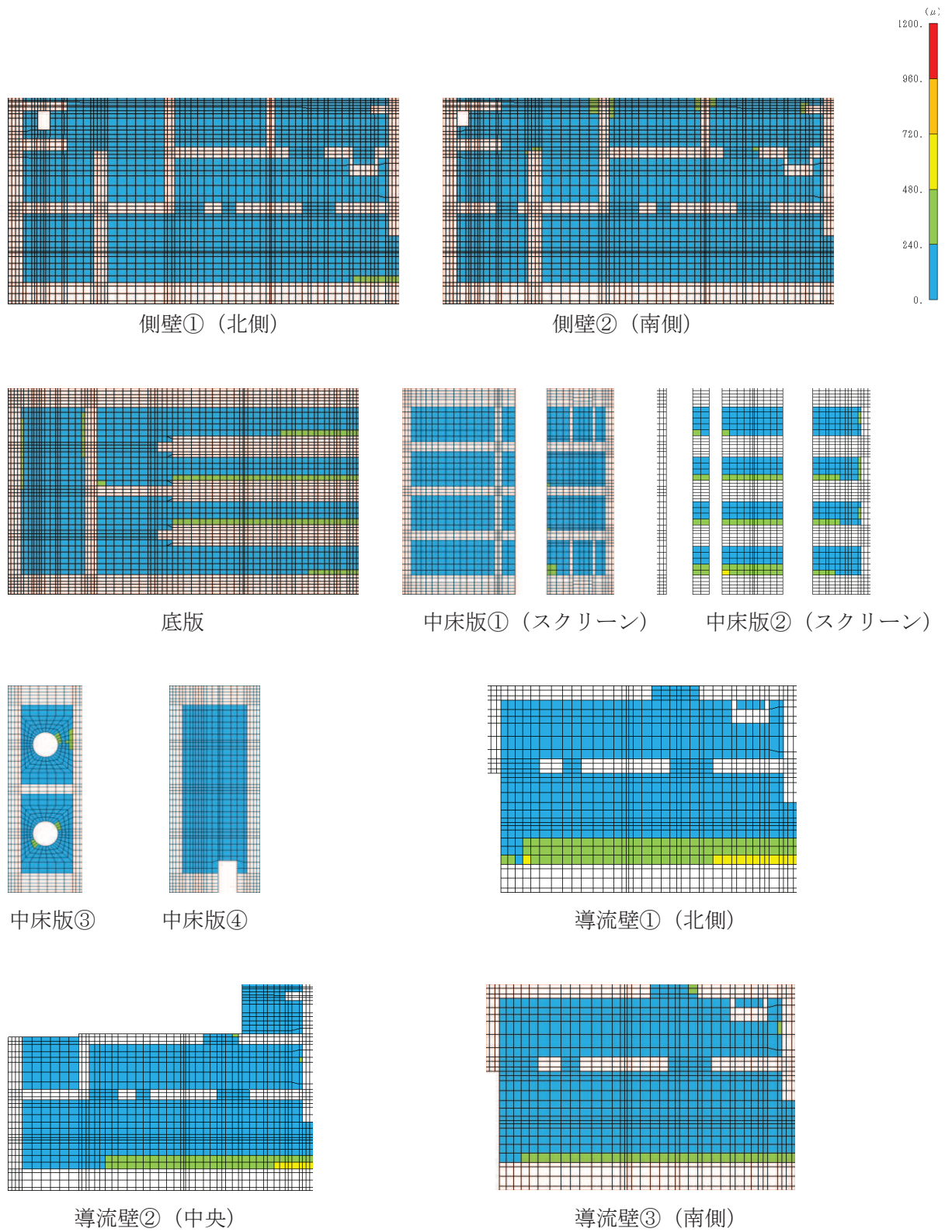


図 4-6(1) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮ひずみ)  
 (隔壁③, 解析ケース②, S s - N 1 (++) )

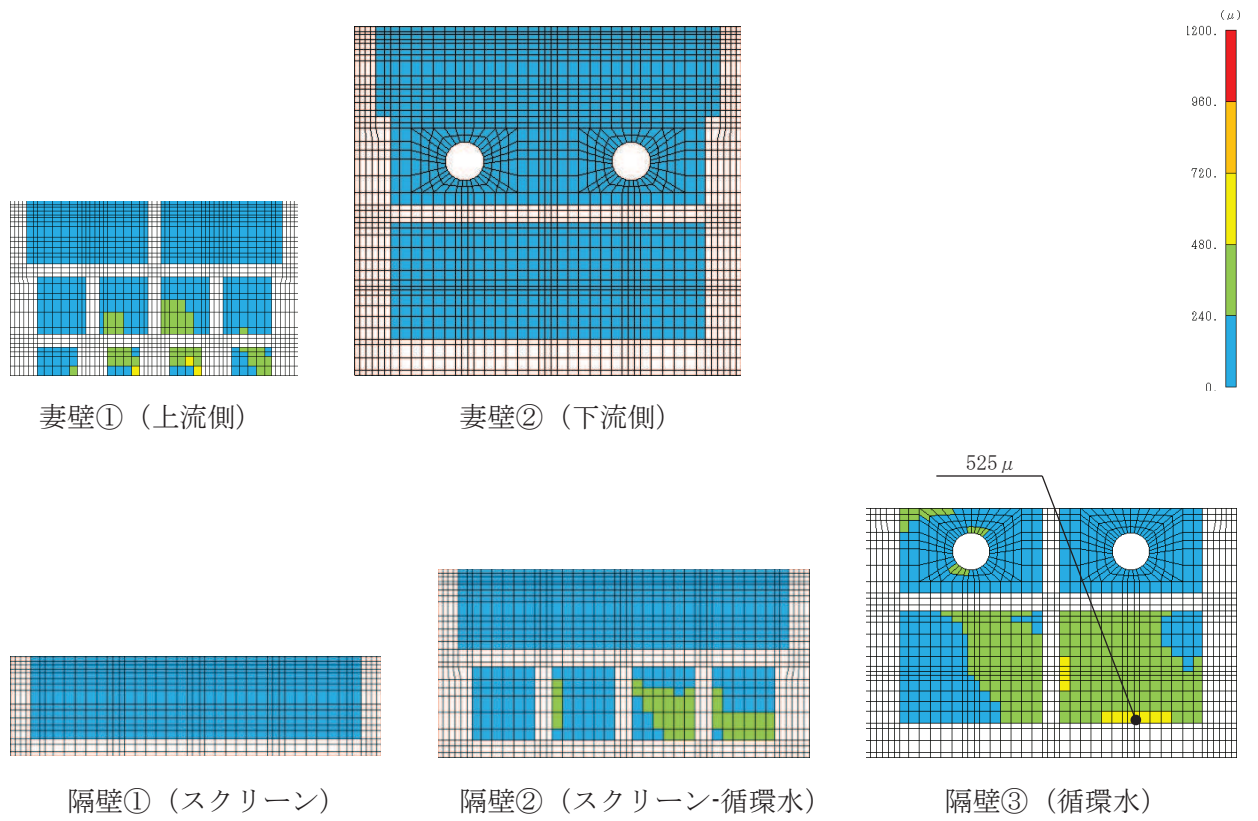


図 4-6(2) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮ひずみ)  
 (隔壁③, 解析ケース②, S s - N 1 (++) )

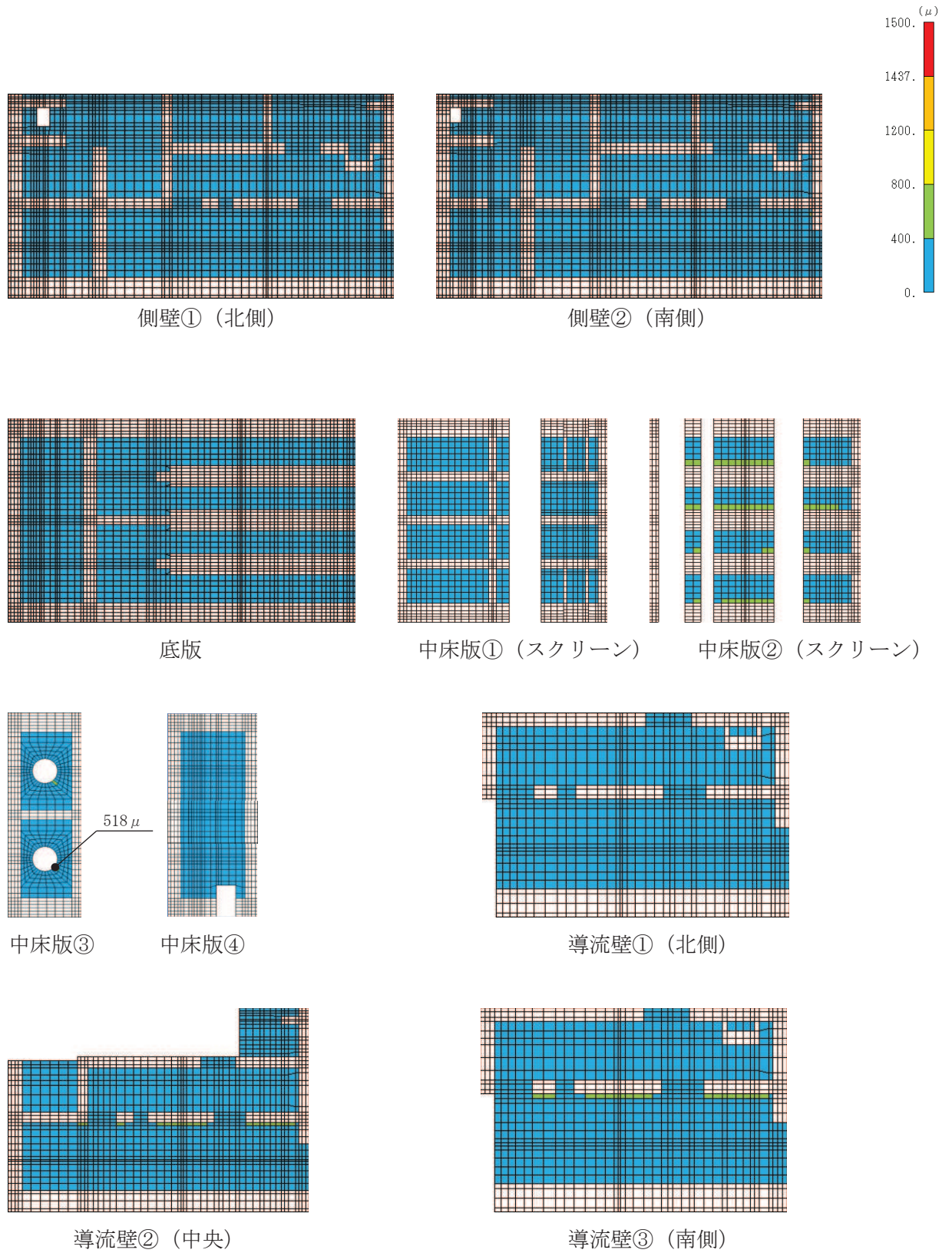


図 4-7(1) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
(鉄筋) (中床版③, 解析ケース①, S s - D 2 (++) )

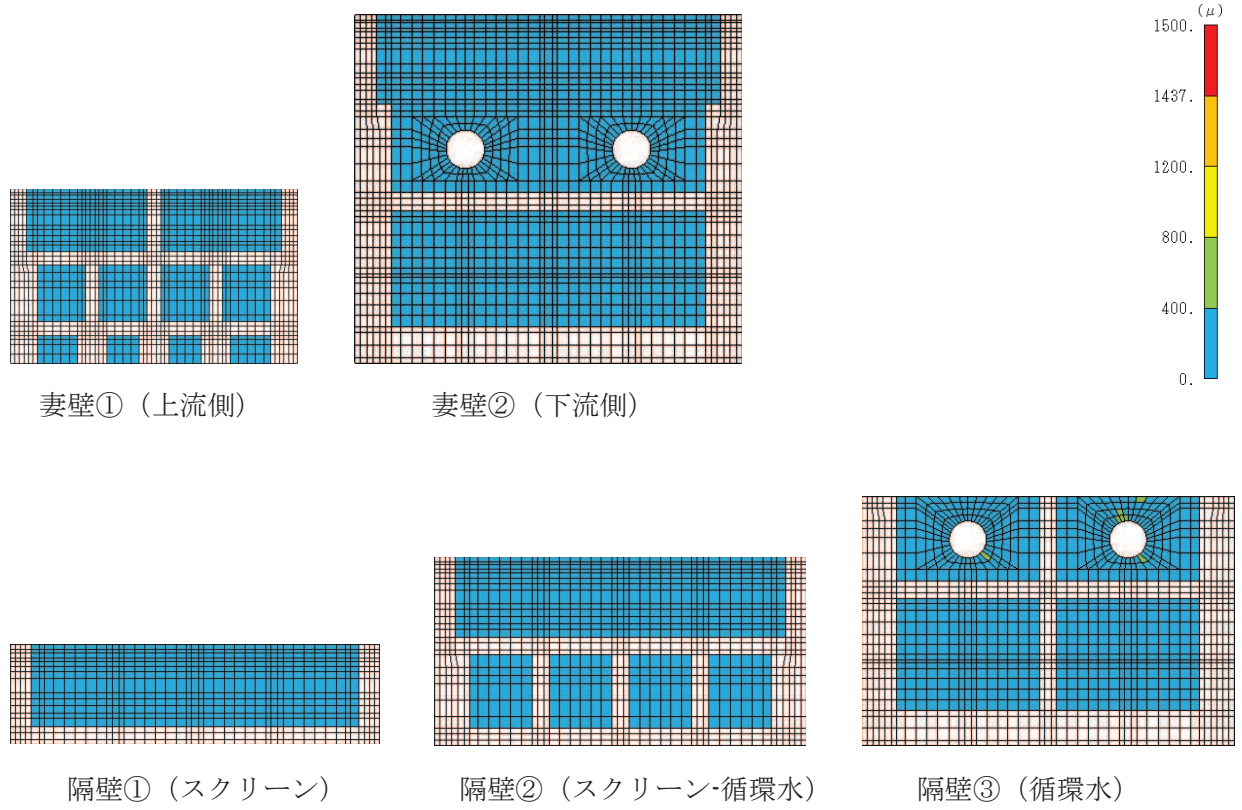


図 4-7(2) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (鉄筋) (中床版③, 解析ケース①, S<sub>s</sub>-D 2 (++)

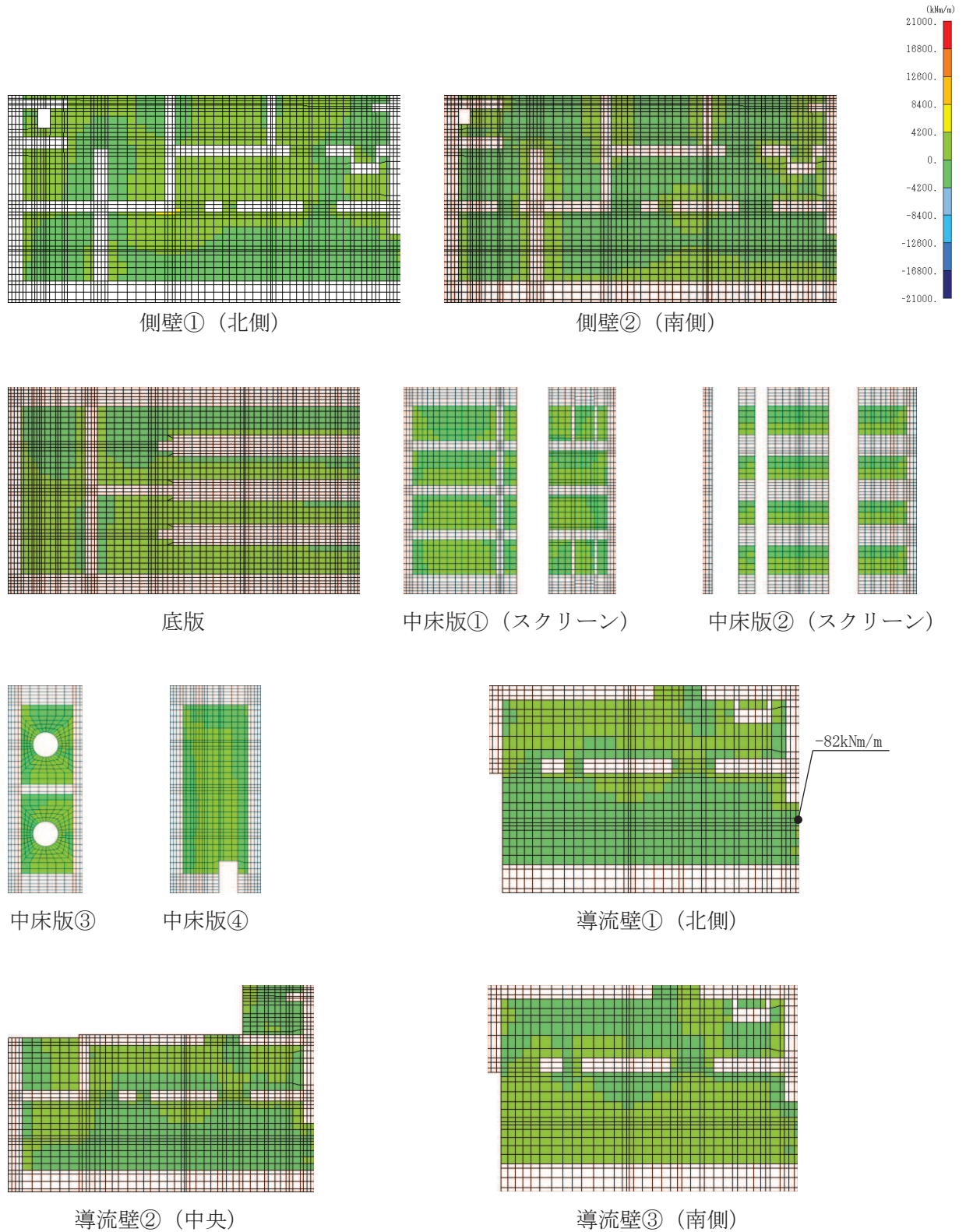


図 4-8(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_x$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++) )

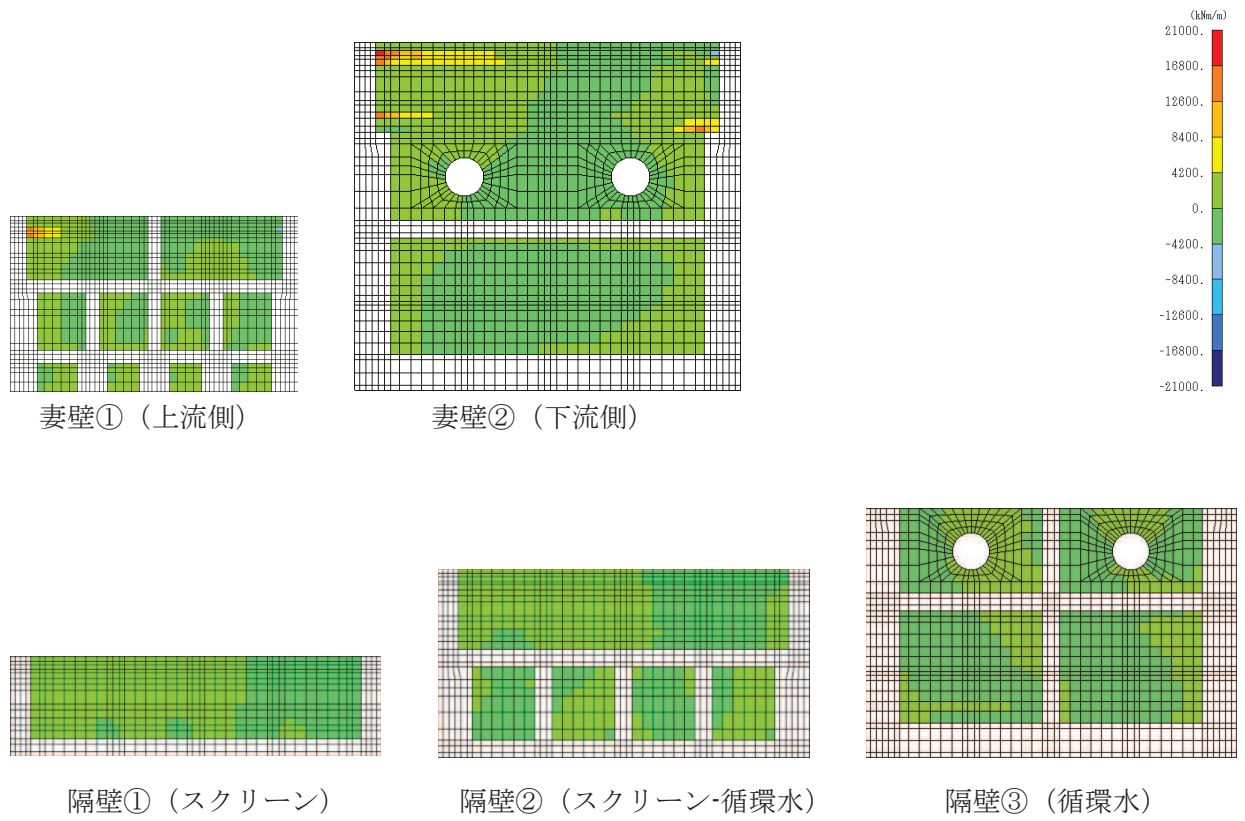


図 4-8(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_x$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N 1$  (++) )

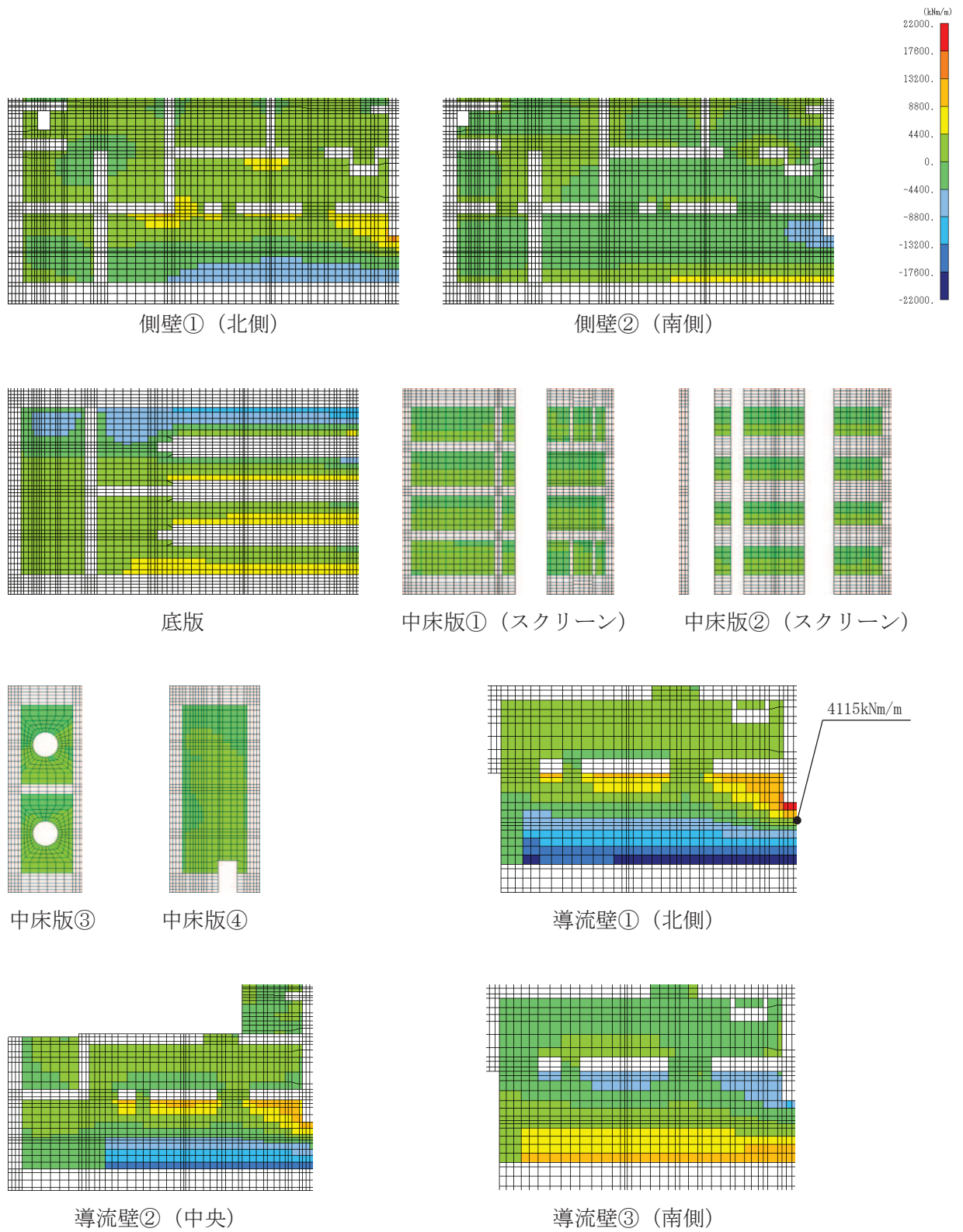


図 4-9(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_y$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++)



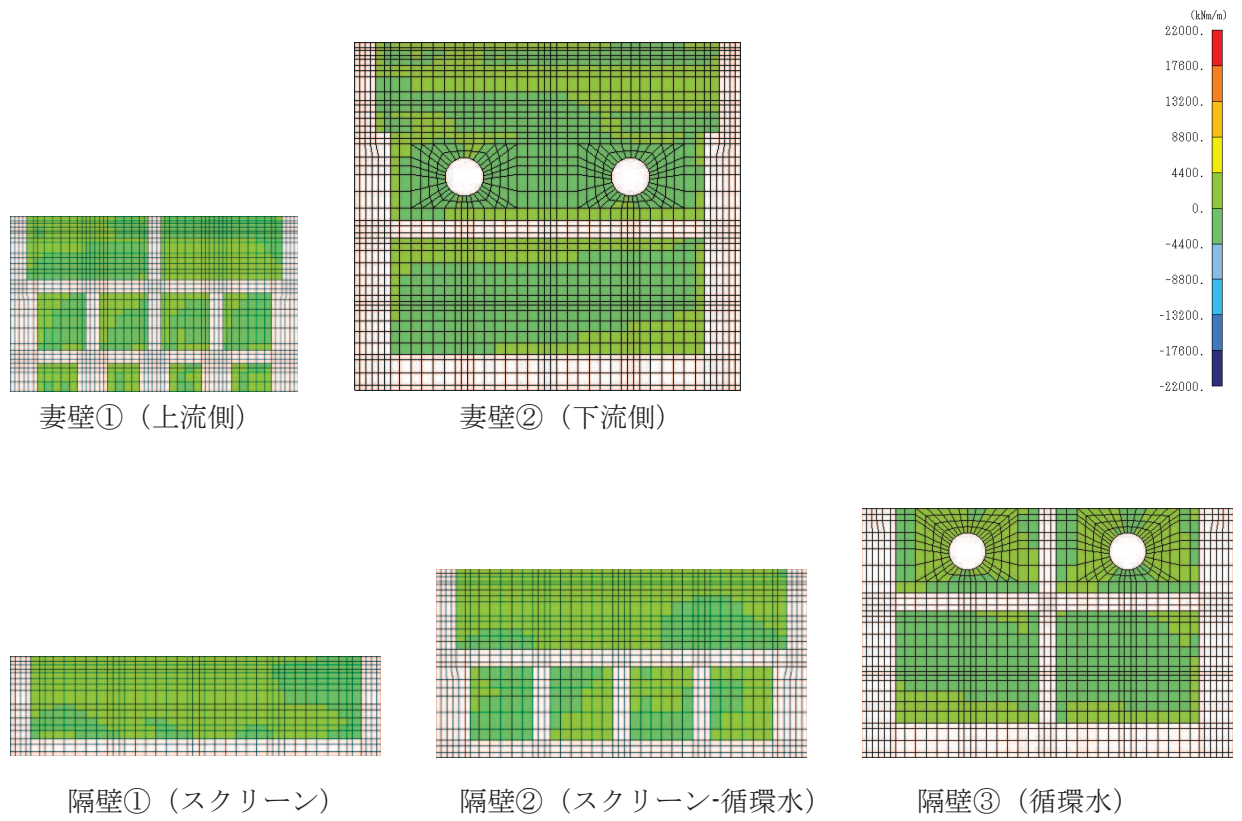


図 4-9(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_y$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++) )

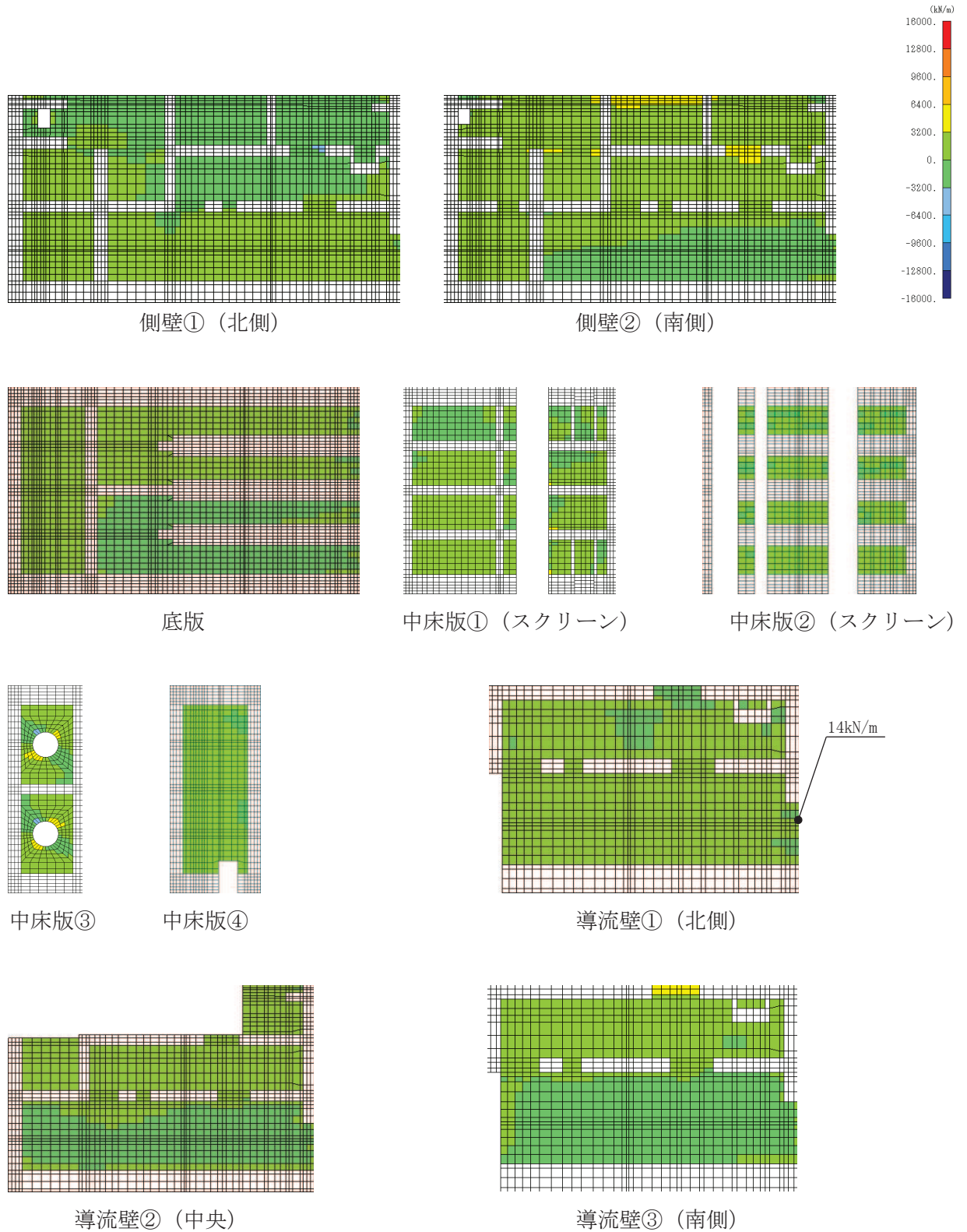


図 4-10(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_x$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1 (+ +)$ )

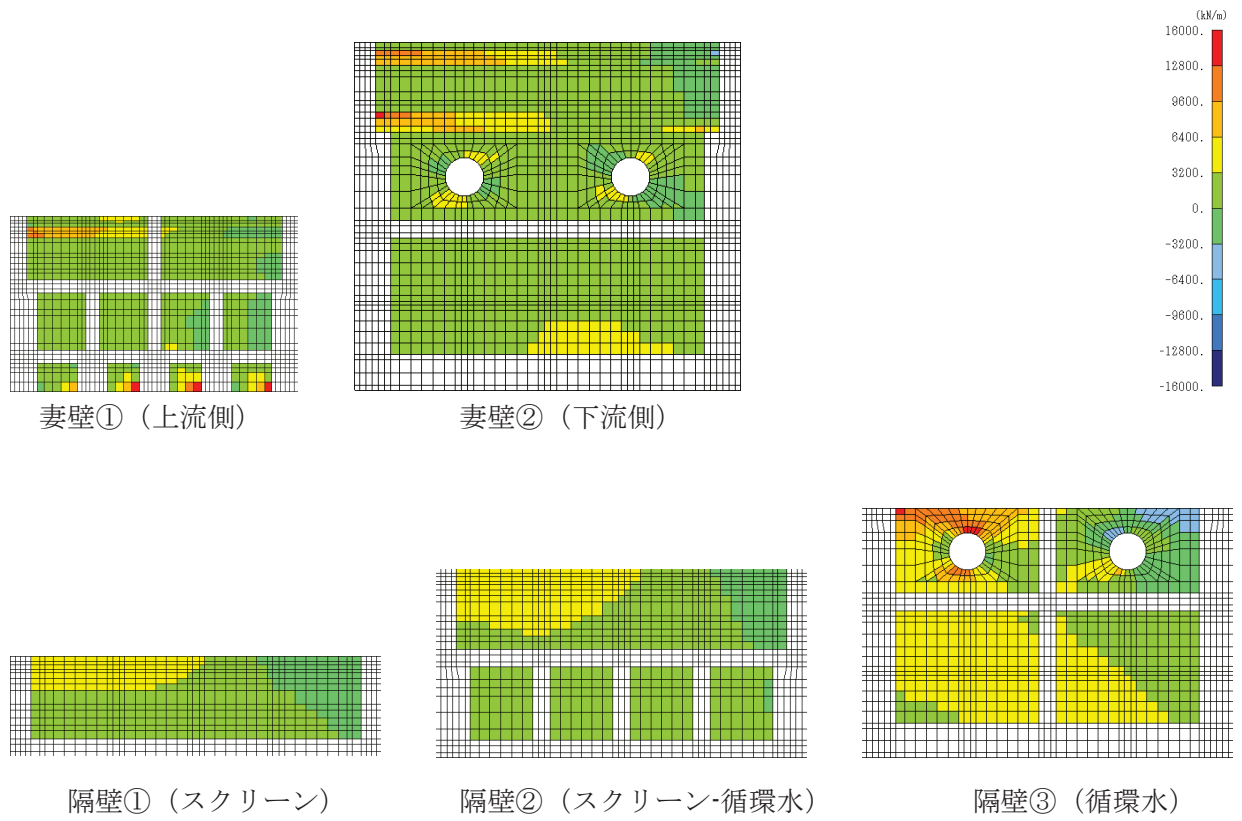


図 4-10(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_x$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N_1$  (++) )

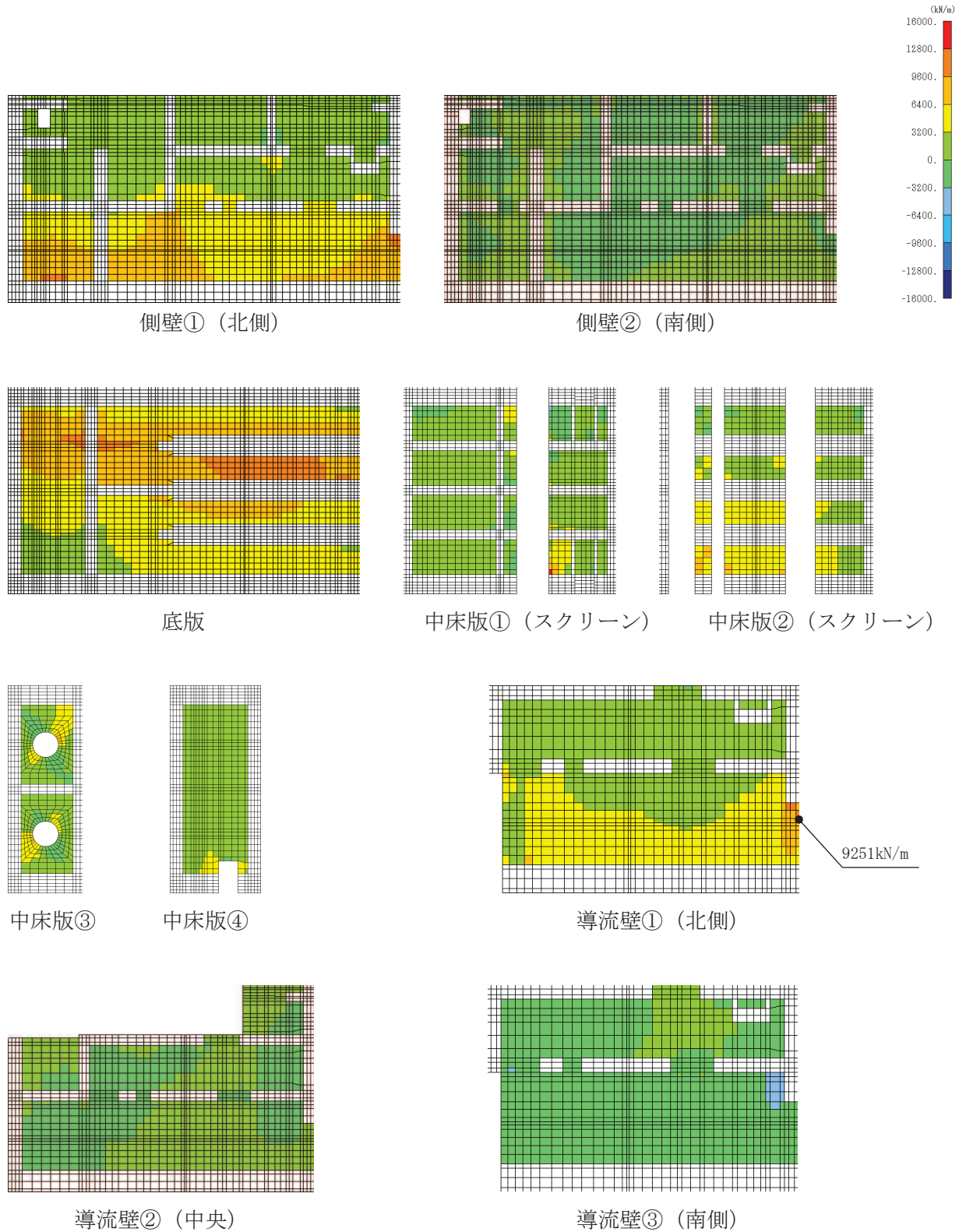


図 4-11(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_y$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++) )

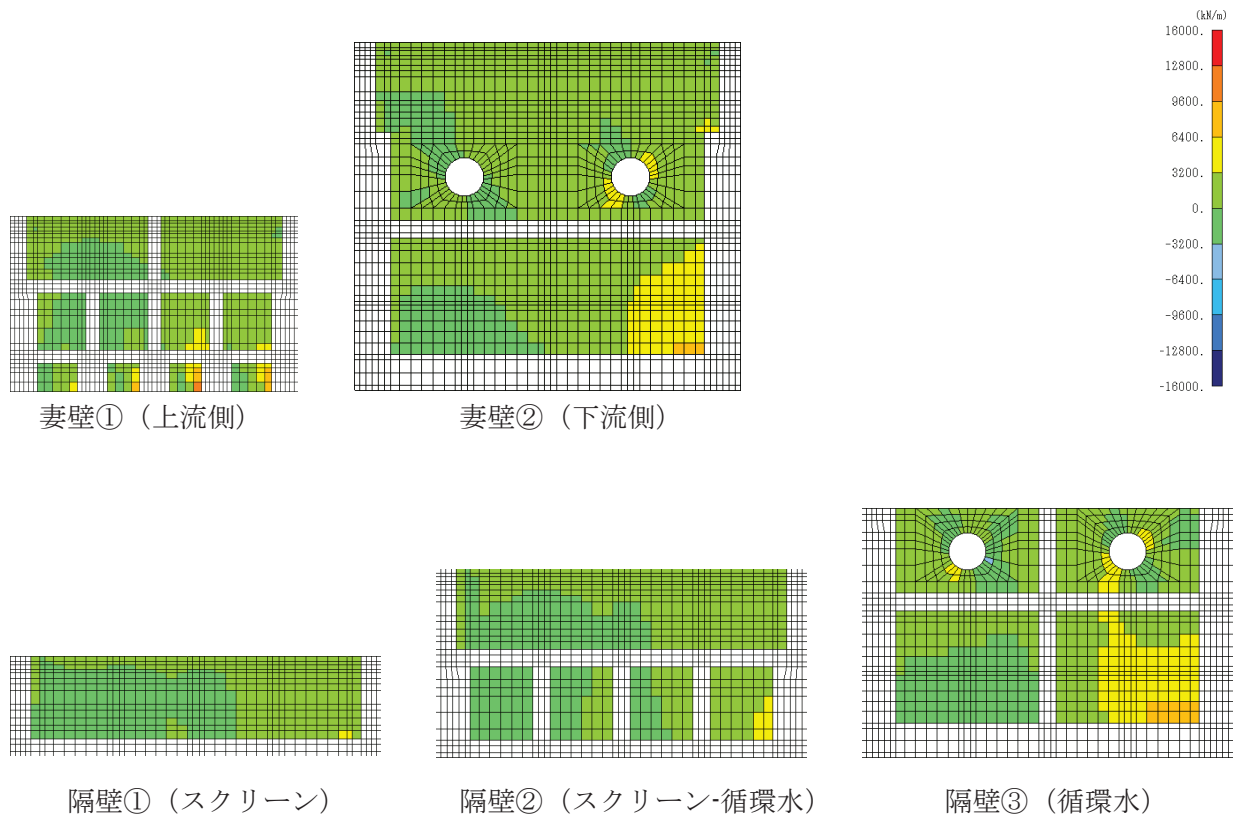


図 4-11(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_y$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++) )

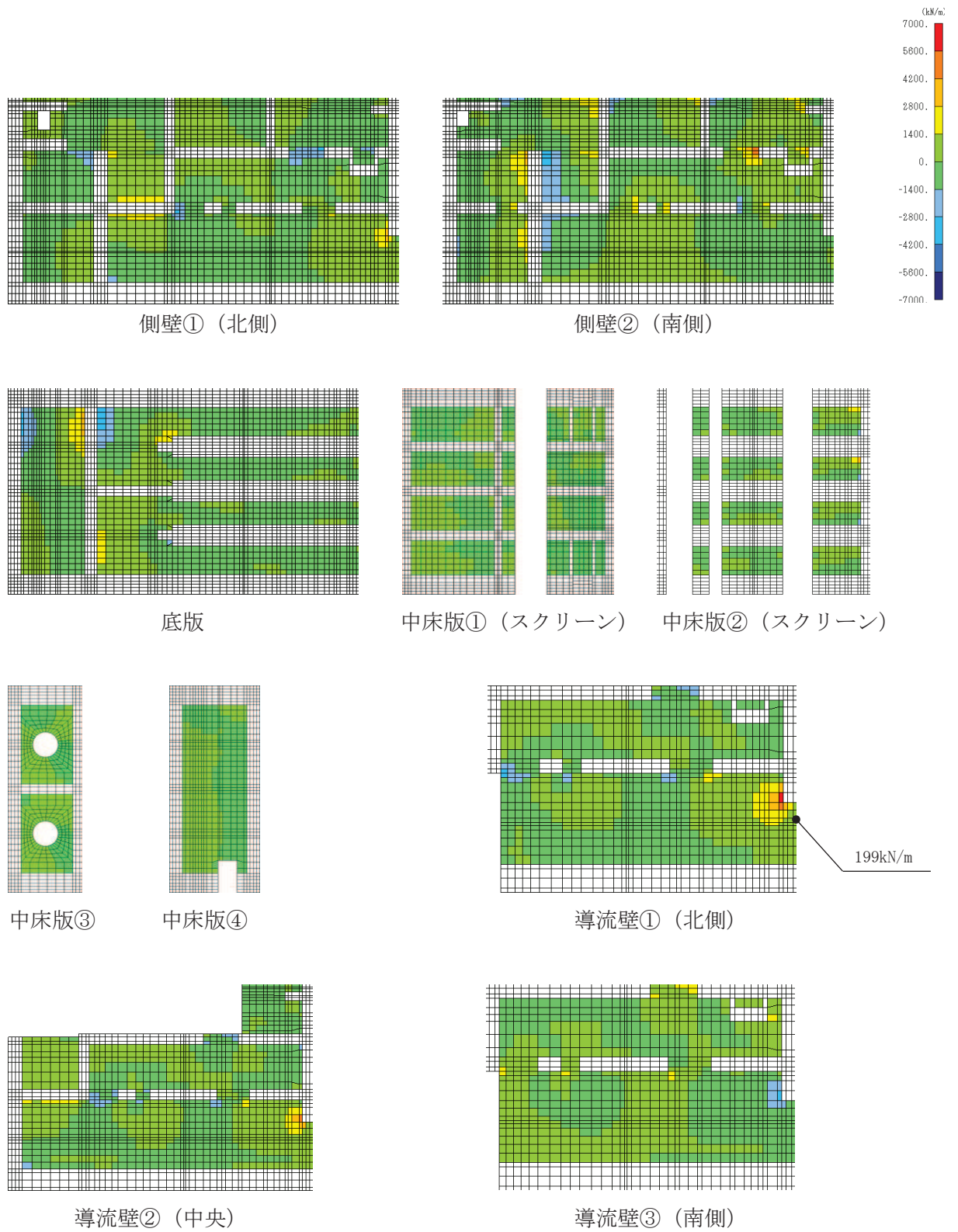


図 4-12(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(せん断力 (kN/m) :  $Q_x$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N 1$  (++) )

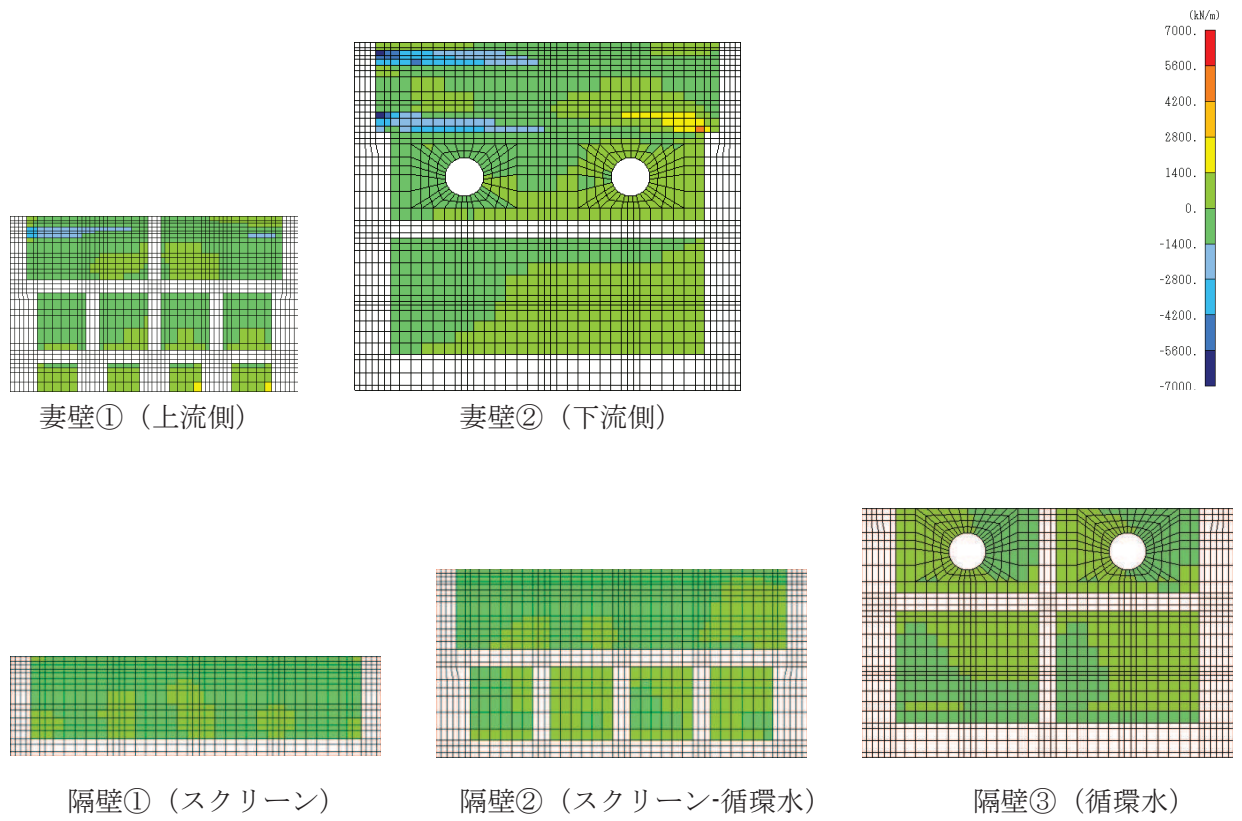


図 4-12(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(せん断力 (kN/m) :  $Q_x$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++))

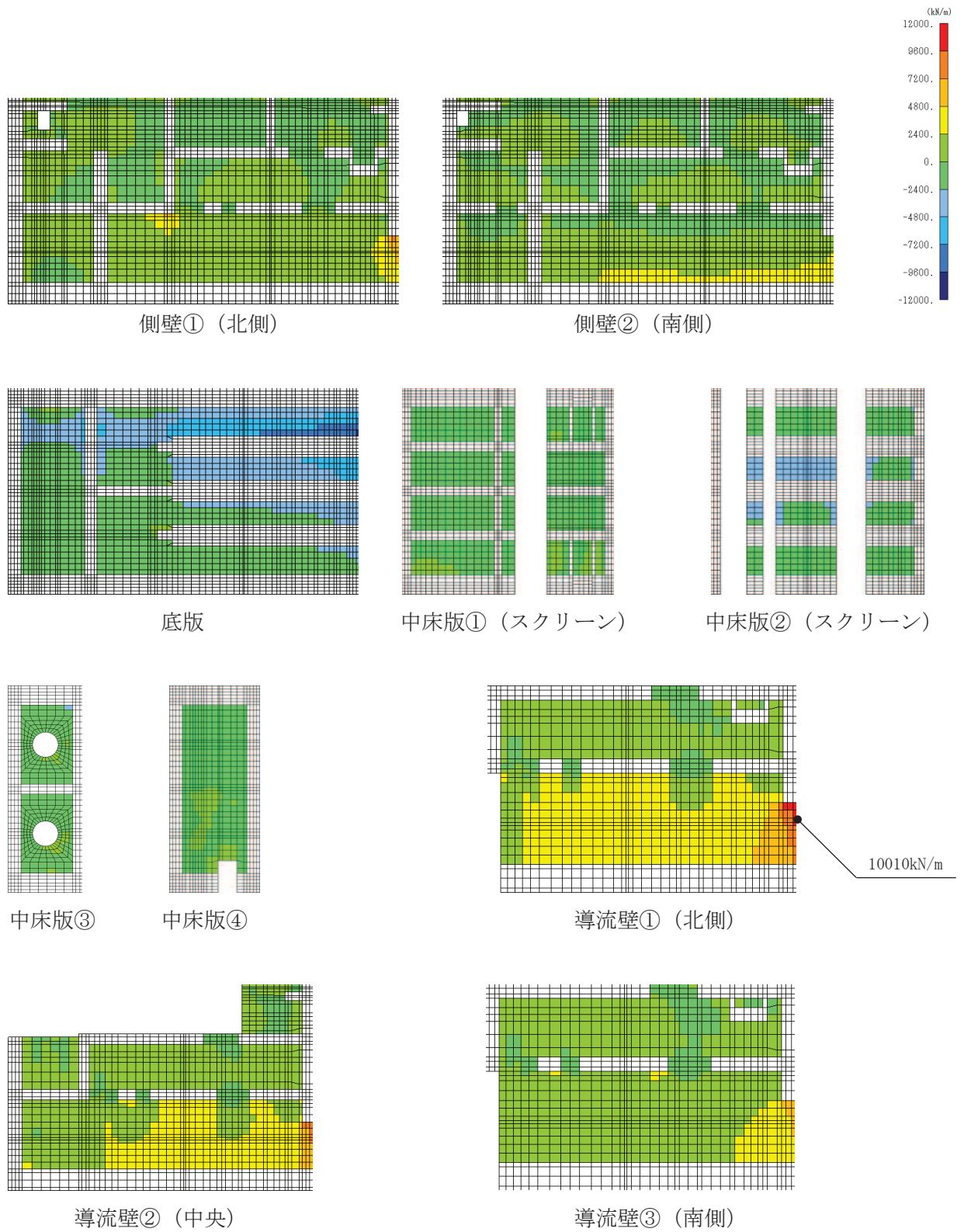


図 4-13(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (せん断力 (kN/m) :  $Q_y$ )  
 (導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N1$  (++) )



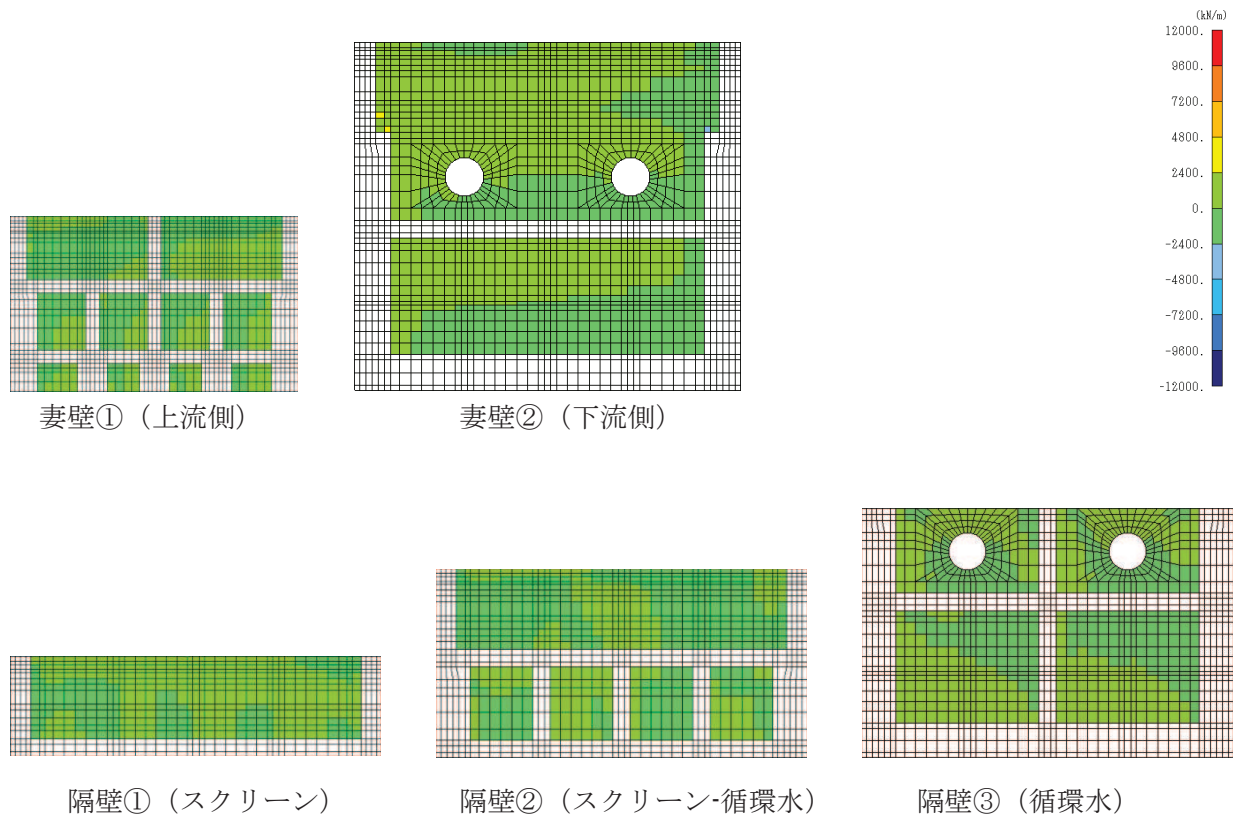


図 4-13(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(せん断力 (kN/m) :  $Q_y$ )

(導流壁①, 解析ケース④,  $S_s - N 1$  (++) )

#### 4.2 有効応力解析による荷重に対する断面力分布

有効応力解析による地震時荷重を用いた三次元構造解析結果における曲げ・軸力系の破壊に対する照査のうち、各部材のコンクリートの圧縮縁ひずみ、コンクリートの圧縮ひずみ及び主筋のひずみに対して最大照査値となる評価時刻でのひずみ分布を図 4-14～図 4-16 に、せん断破壊に対して最大照査値となる評価時刻での断面力分布を図 4-17～図 4-22 に示す。

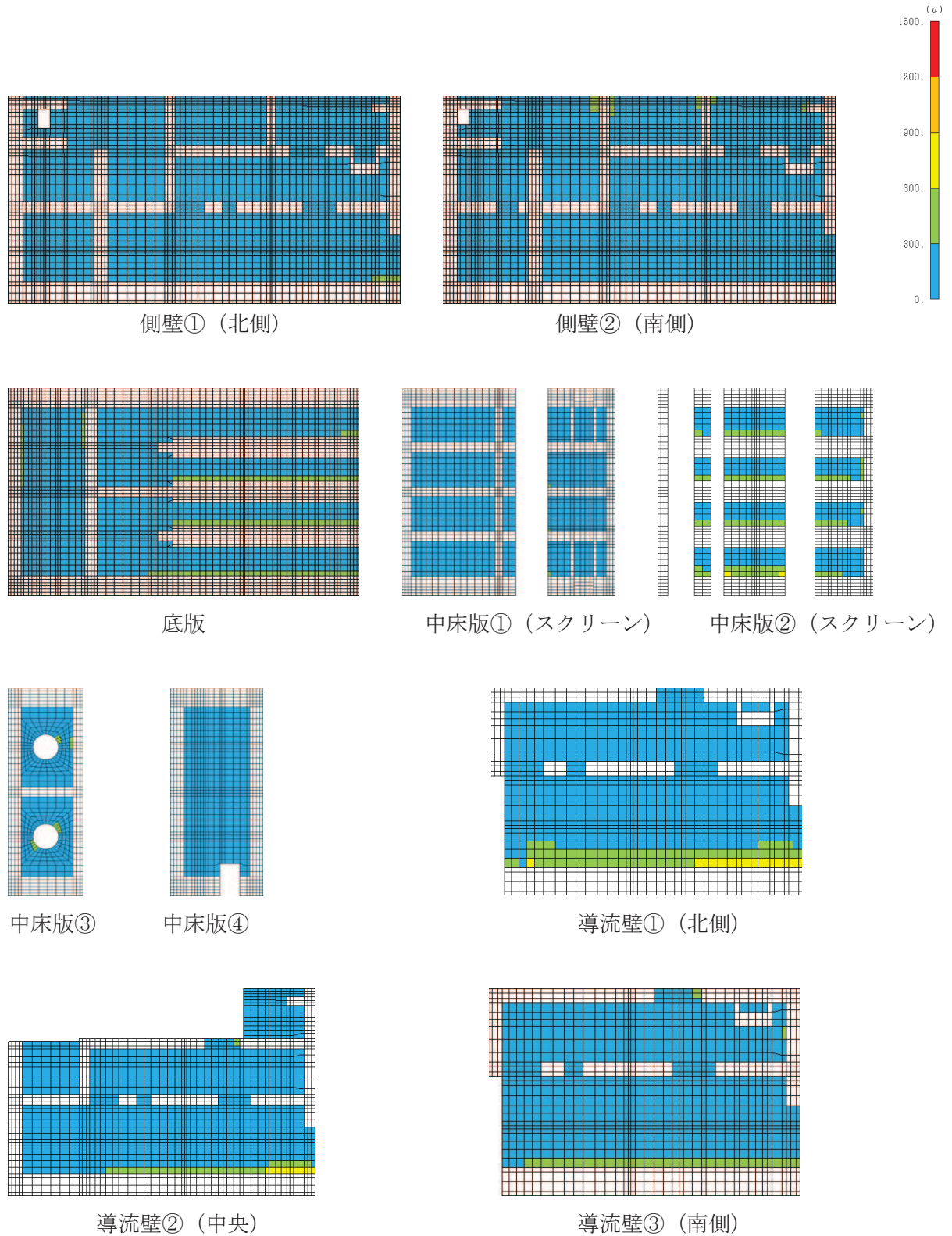


図 4-14(1) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮縁ひずみ)  
 (妻壁①, 解析ケース⑥, S s - D 1 (-+))

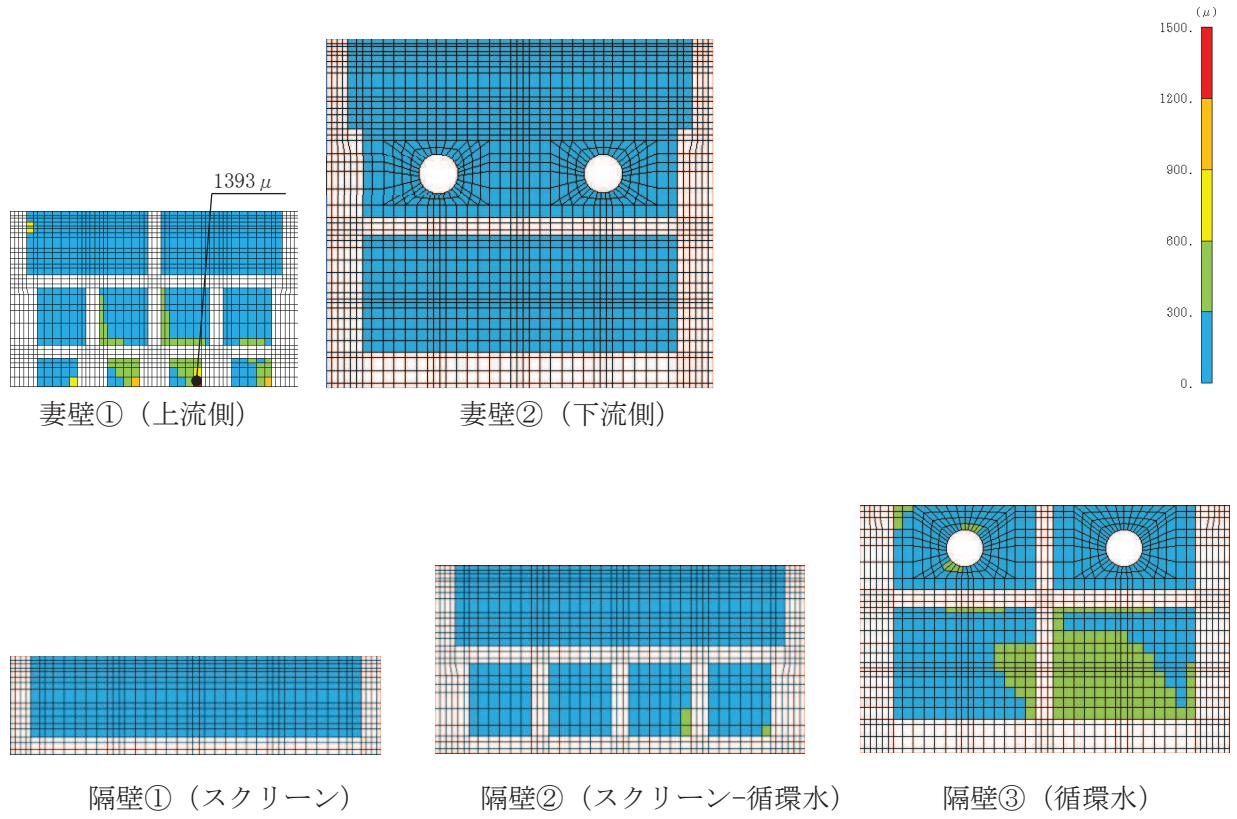


図 4-14(2) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮縁ひずみ)  
 (妻壁①, 解析ケース⑥, S s - D 1 (-+))

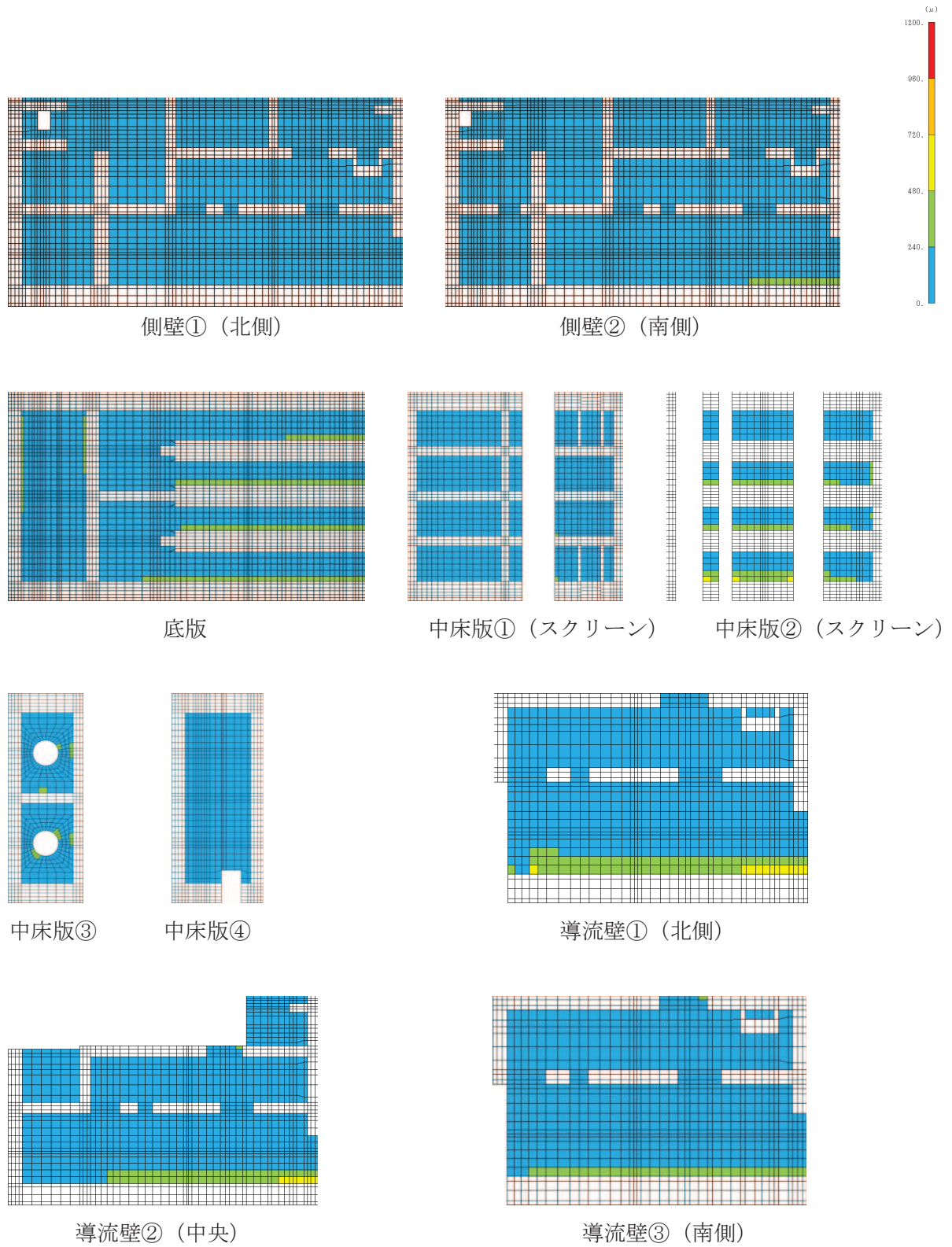


図 4-15(1) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮ひずみ)  
 (隔壁③, 解析ケース⑥, S s - N 1 (++) )

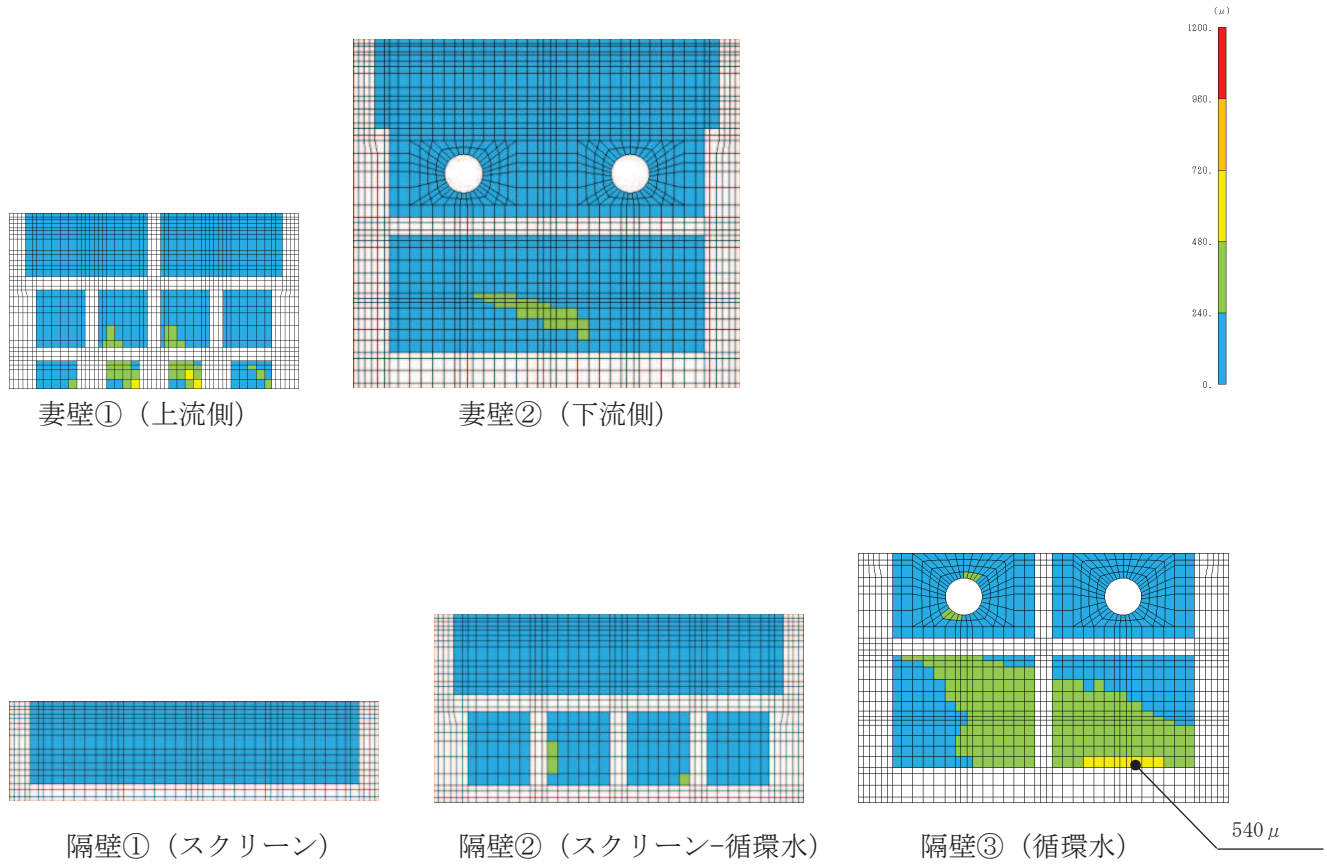


図 4-15(2) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (コンクリートの圧縮ひずみ)  
 (隔壁③, 解析ケース⑥, S s - N 1 (++) )

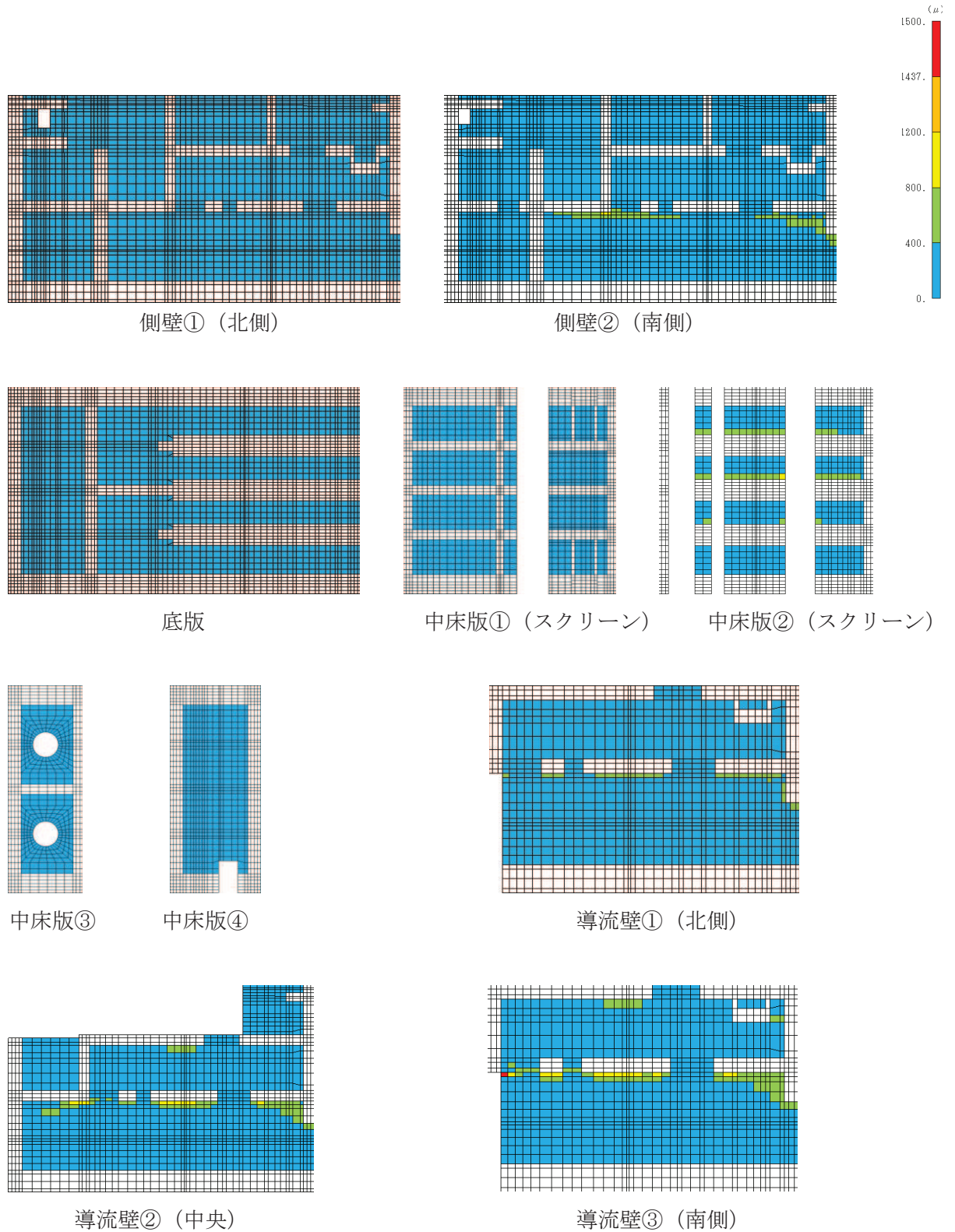


図 4-16(1) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
(鉄筋) (隔壁③, 解析ケース⑥, S<sub>s</sub>-N1 (++)

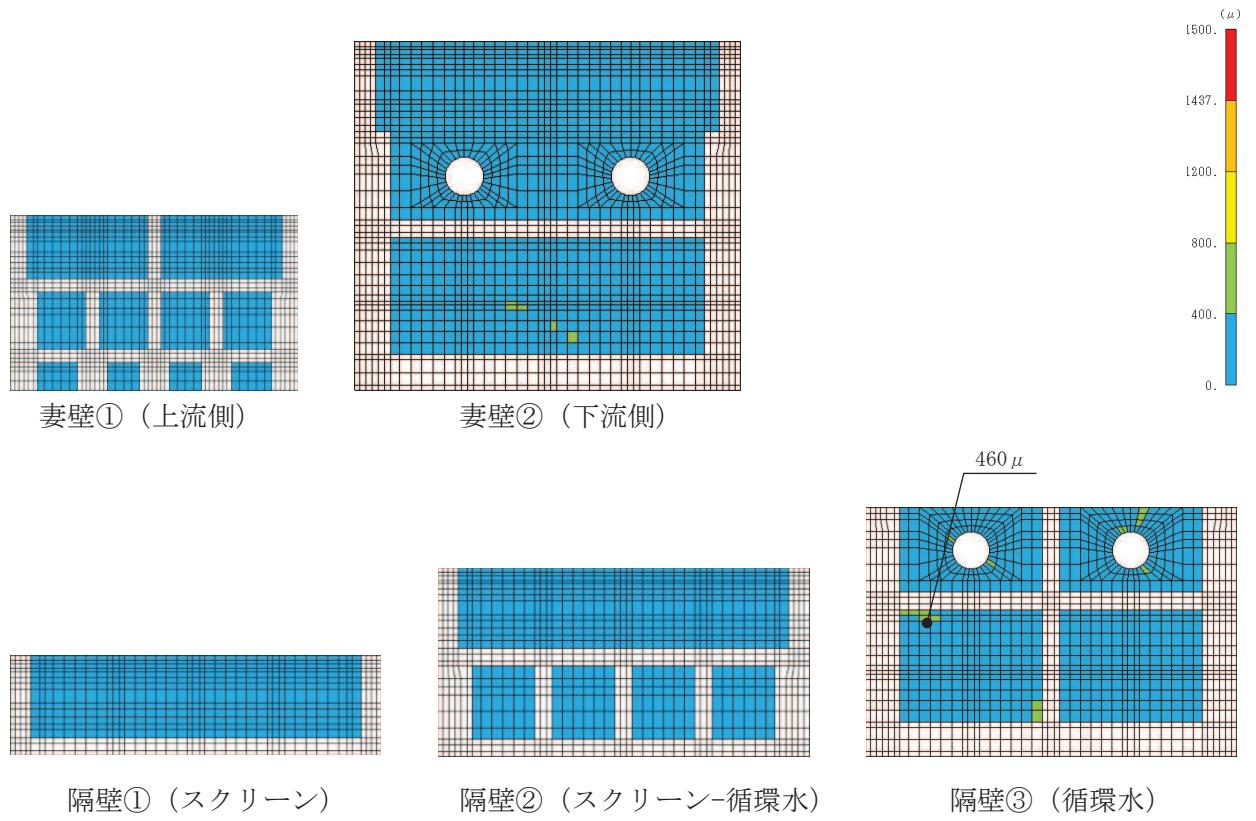


図 4-16(2) 曲げ・軸力系の破壊に対する照査値最大時のひずみ分布図  
 (鉄筋) (隔壁③, 解析ケース⑥, S<sub>s</sub>-N1 (++)



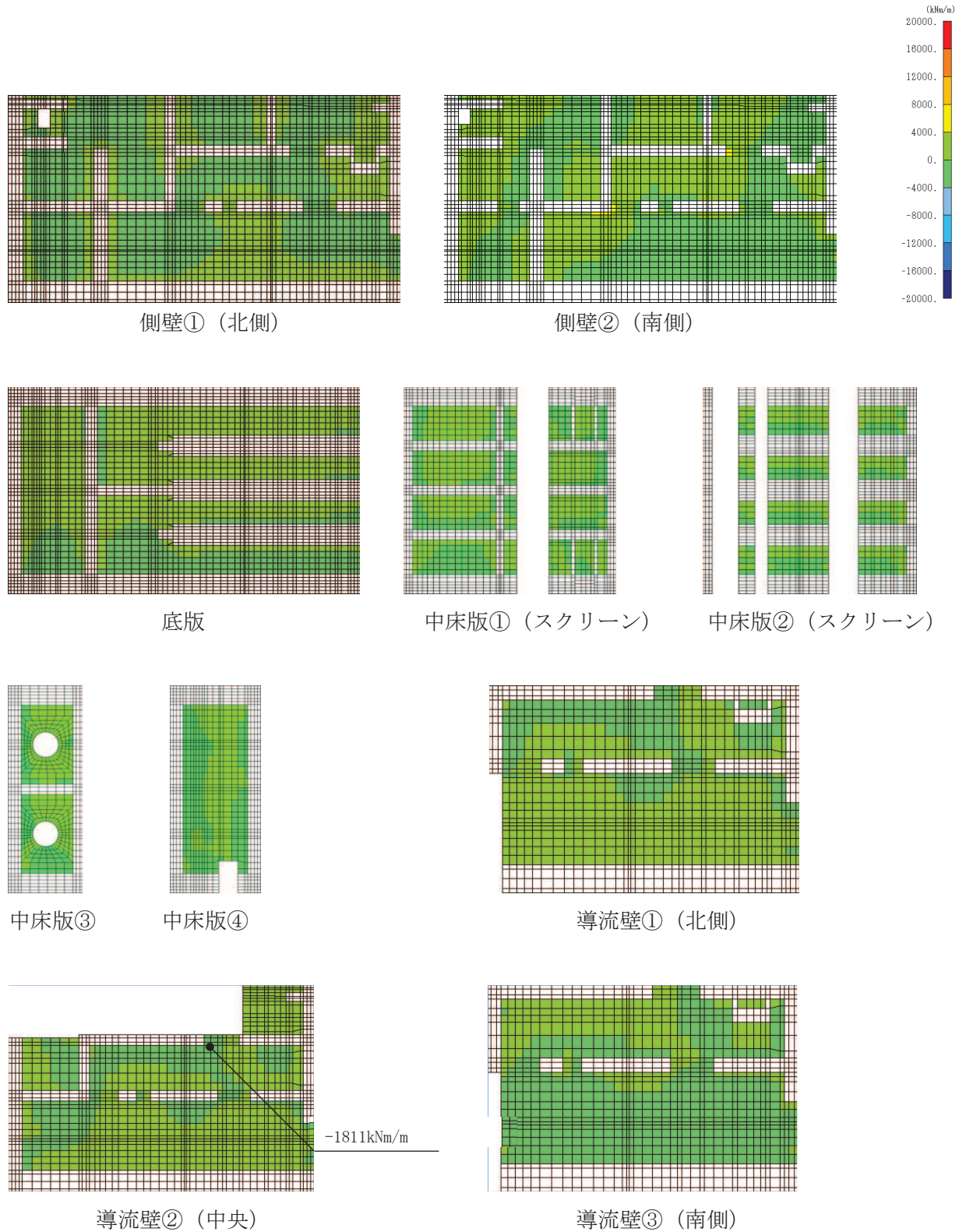


図 4-17(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_x$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )

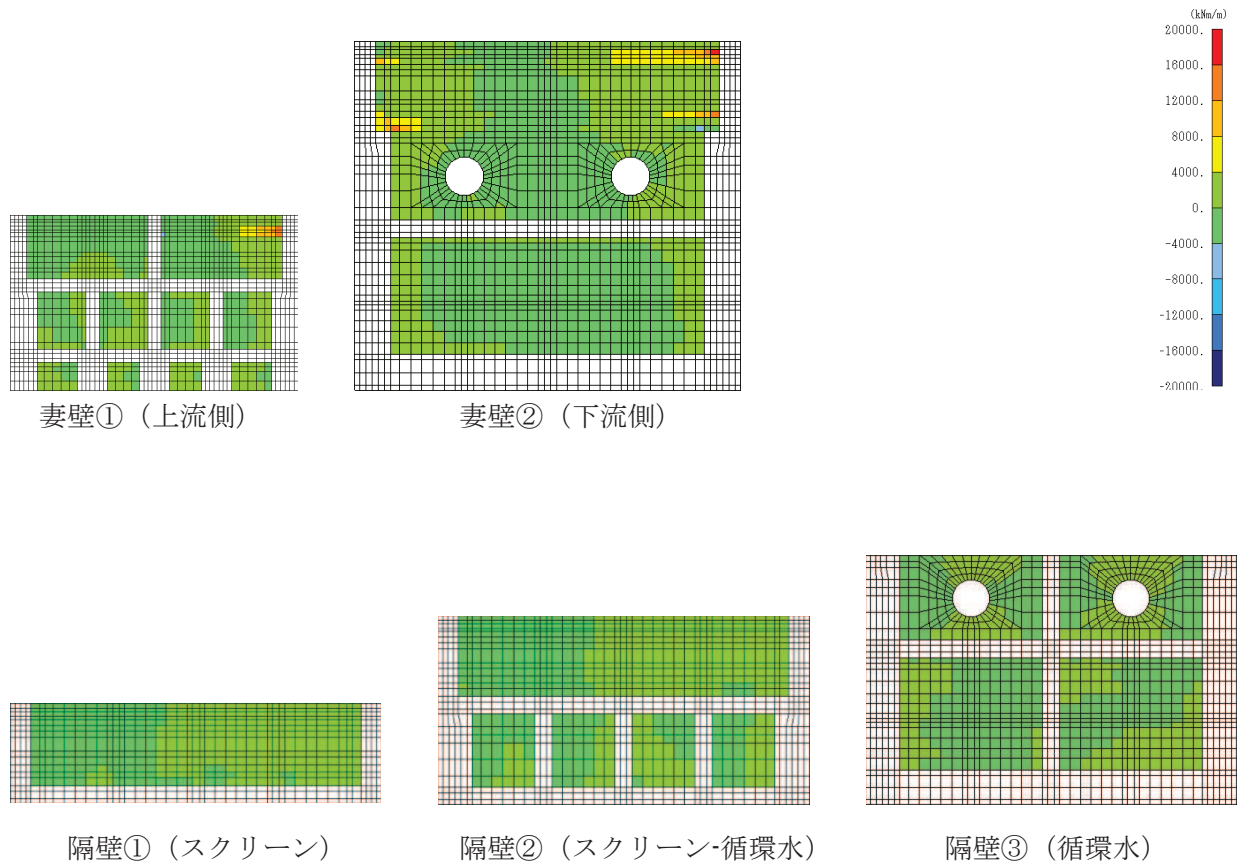


図 4-17(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_x$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )

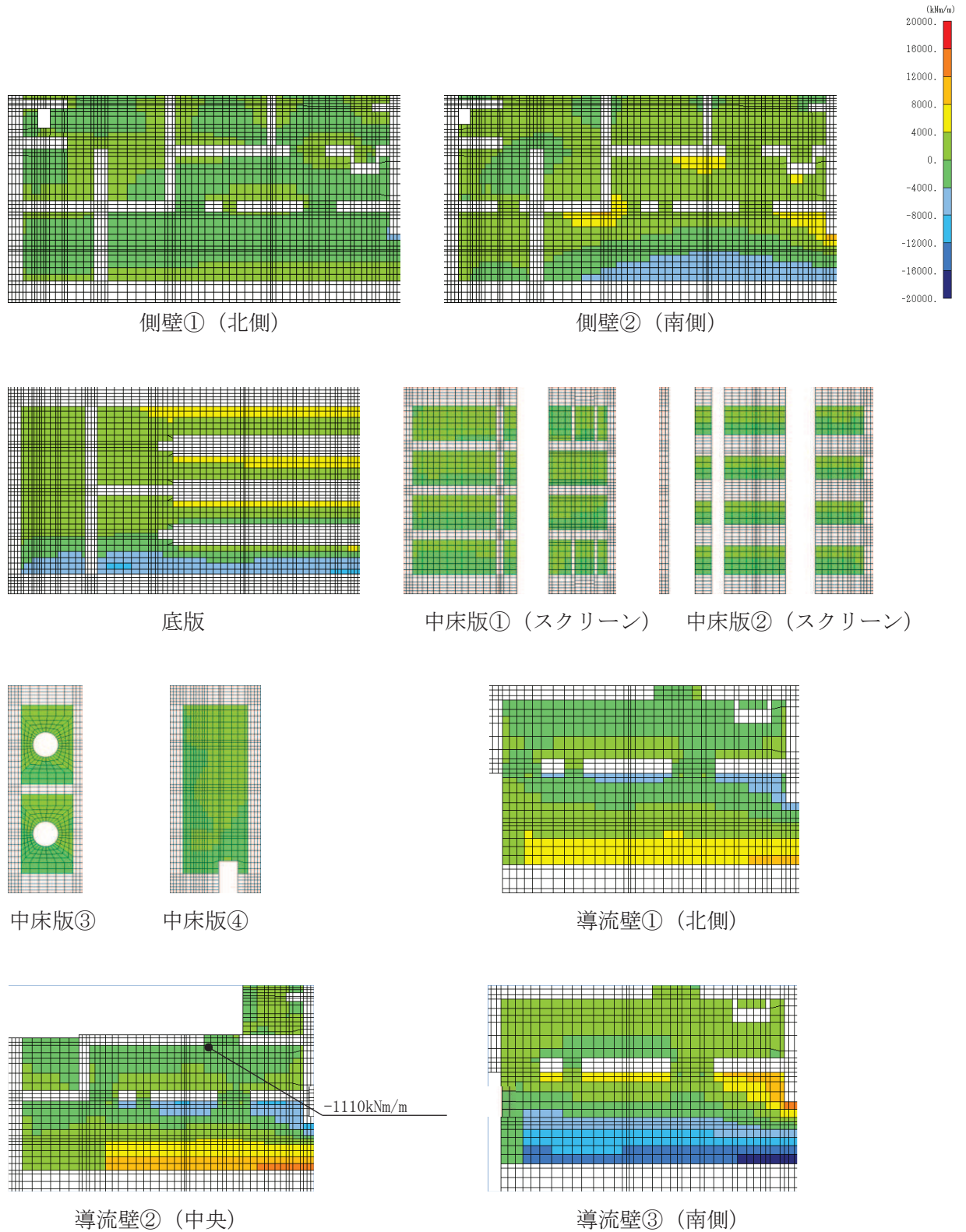


図 4-18(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_y$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )

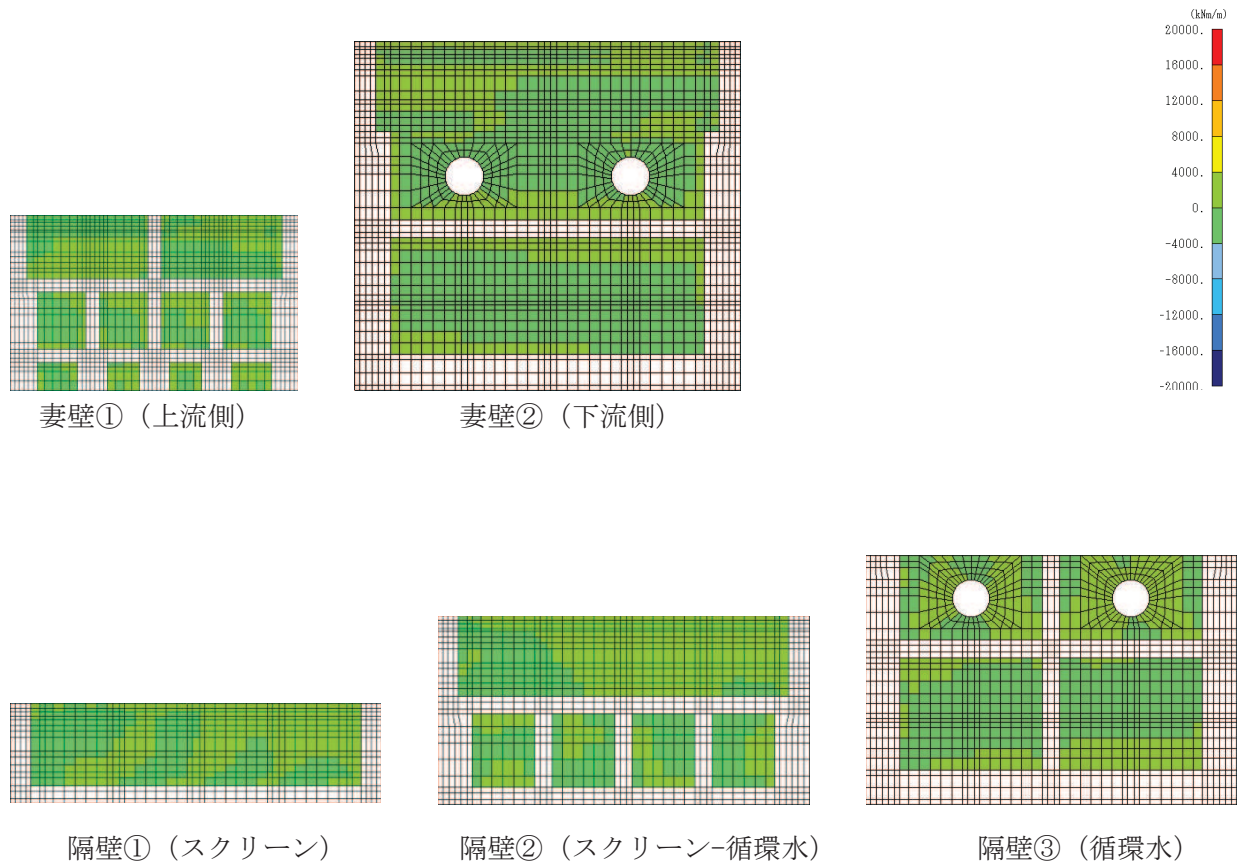


図 4-18(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (曲げモーメント (kN・m/m) :  $M_y$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )

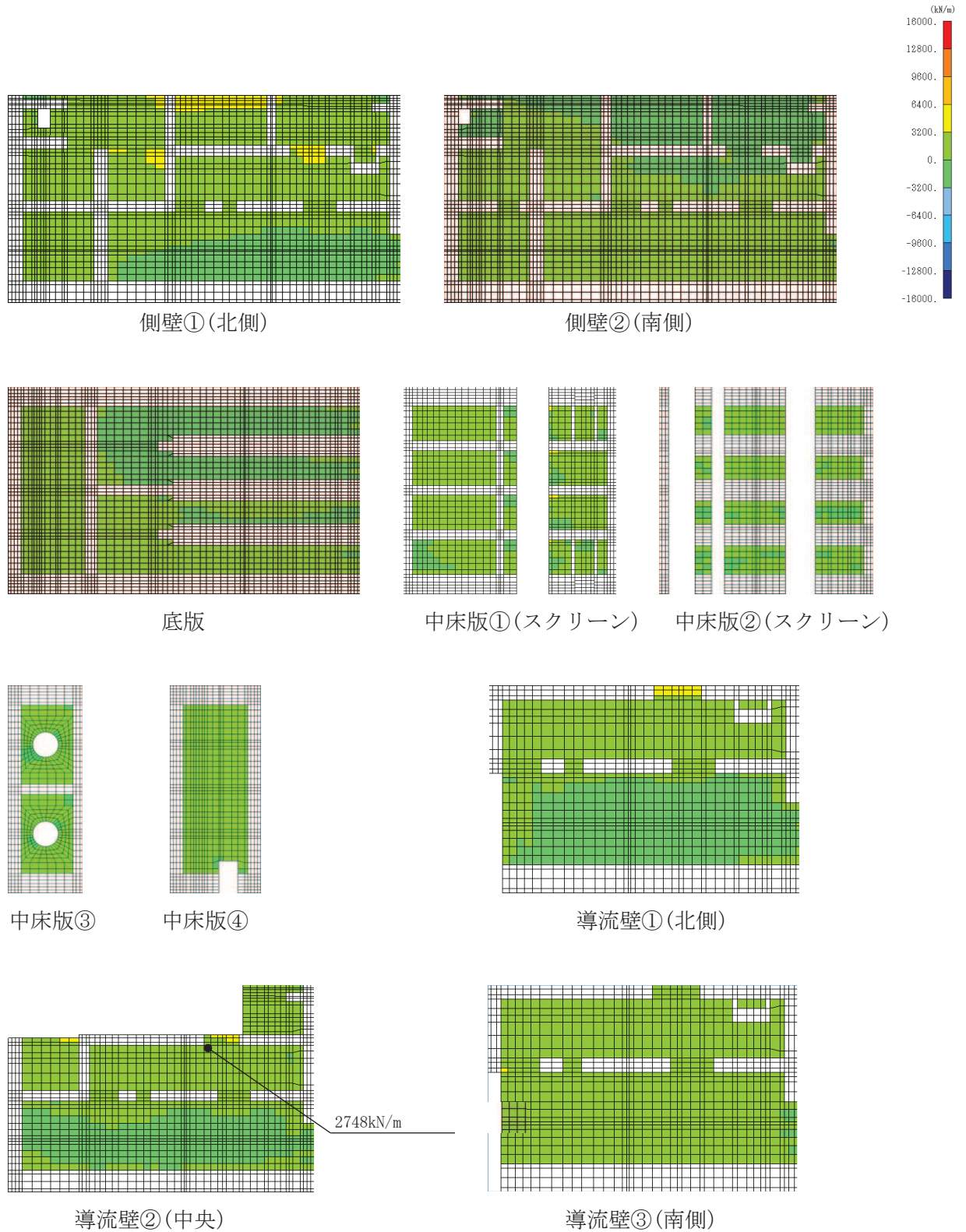


図 4-19(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_x$ )

(導流壁②, 解析ケース⑥,  $S_s - D 2 (+ +)$ )

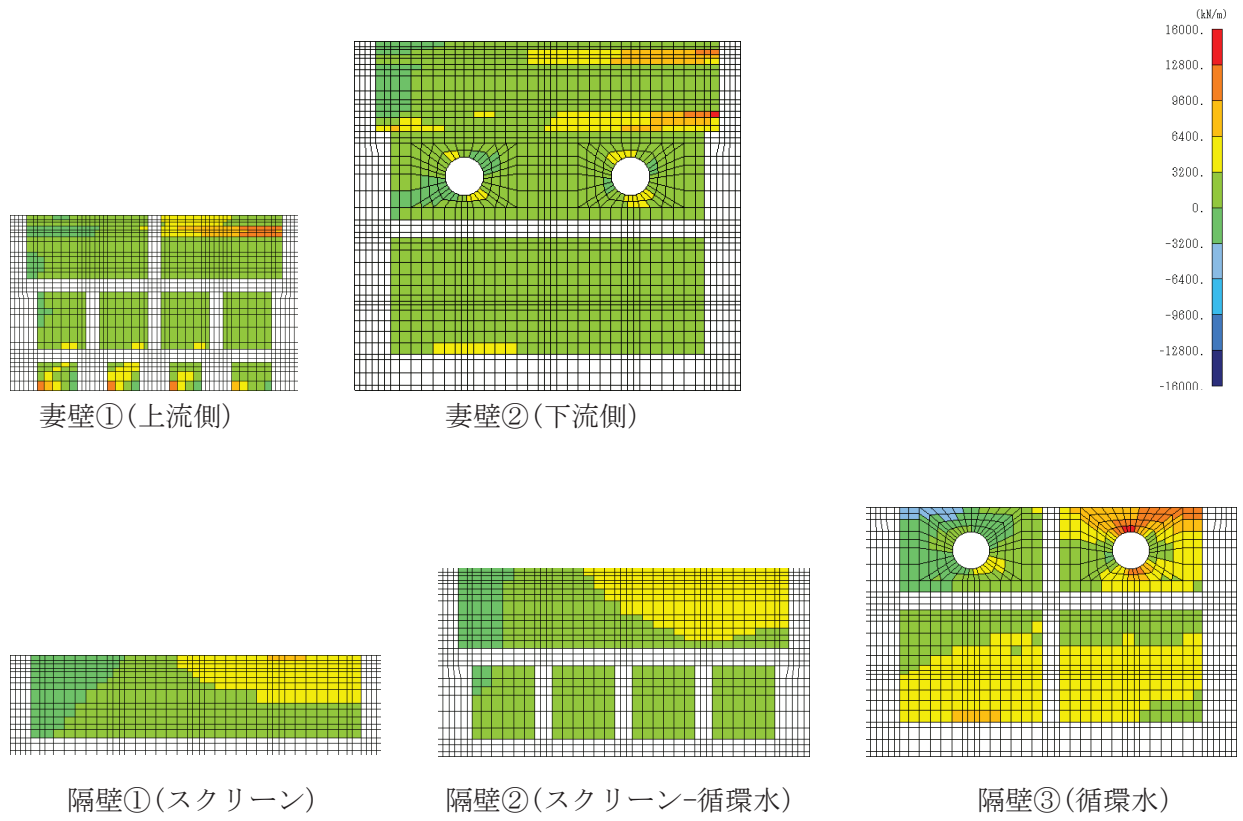


図 4-19(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_x$ )

(導流壁②, 解析ケース⑥,  $S_s - D 2 (+ +)$ )

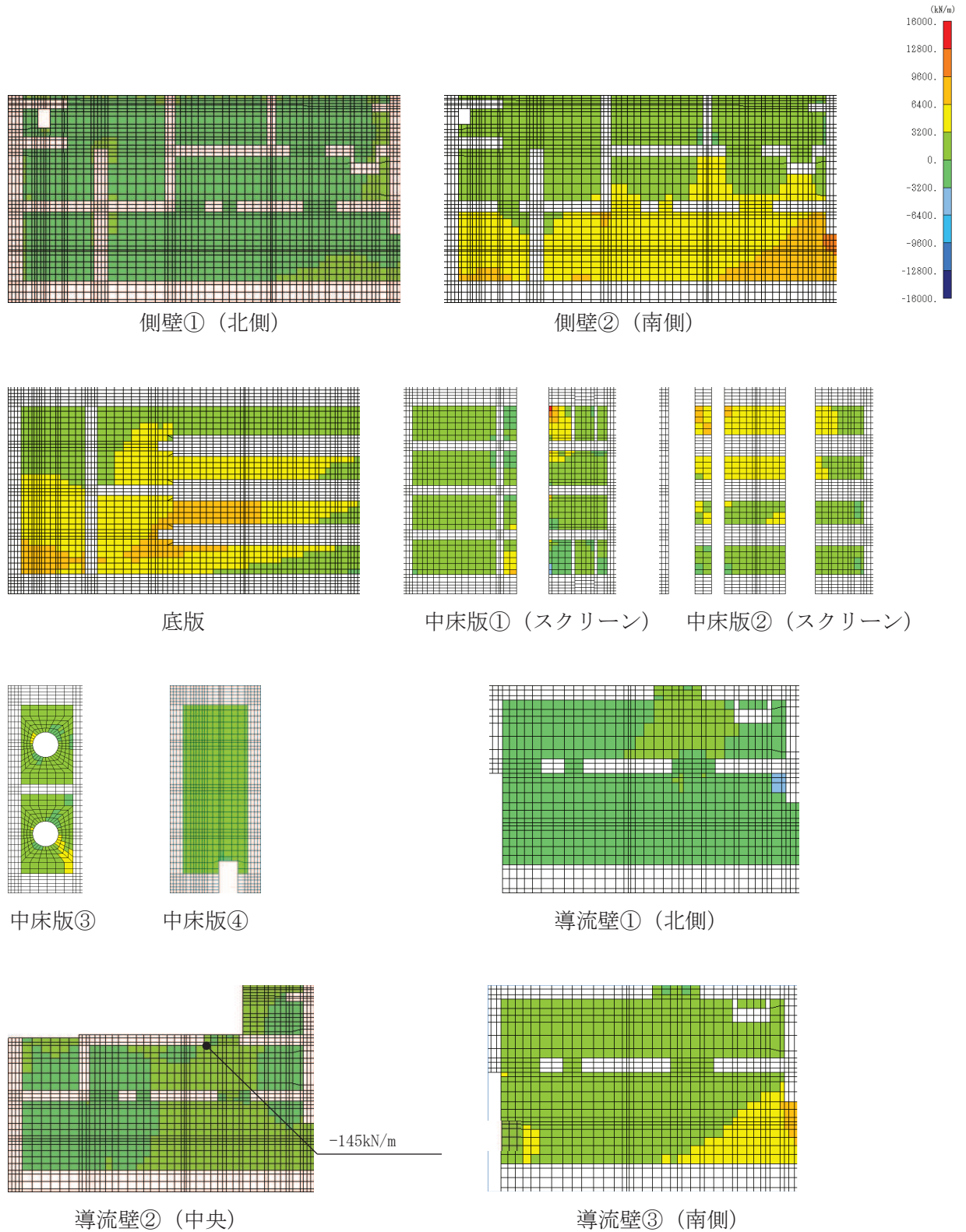


図 4-20(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_y$ )

(導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )

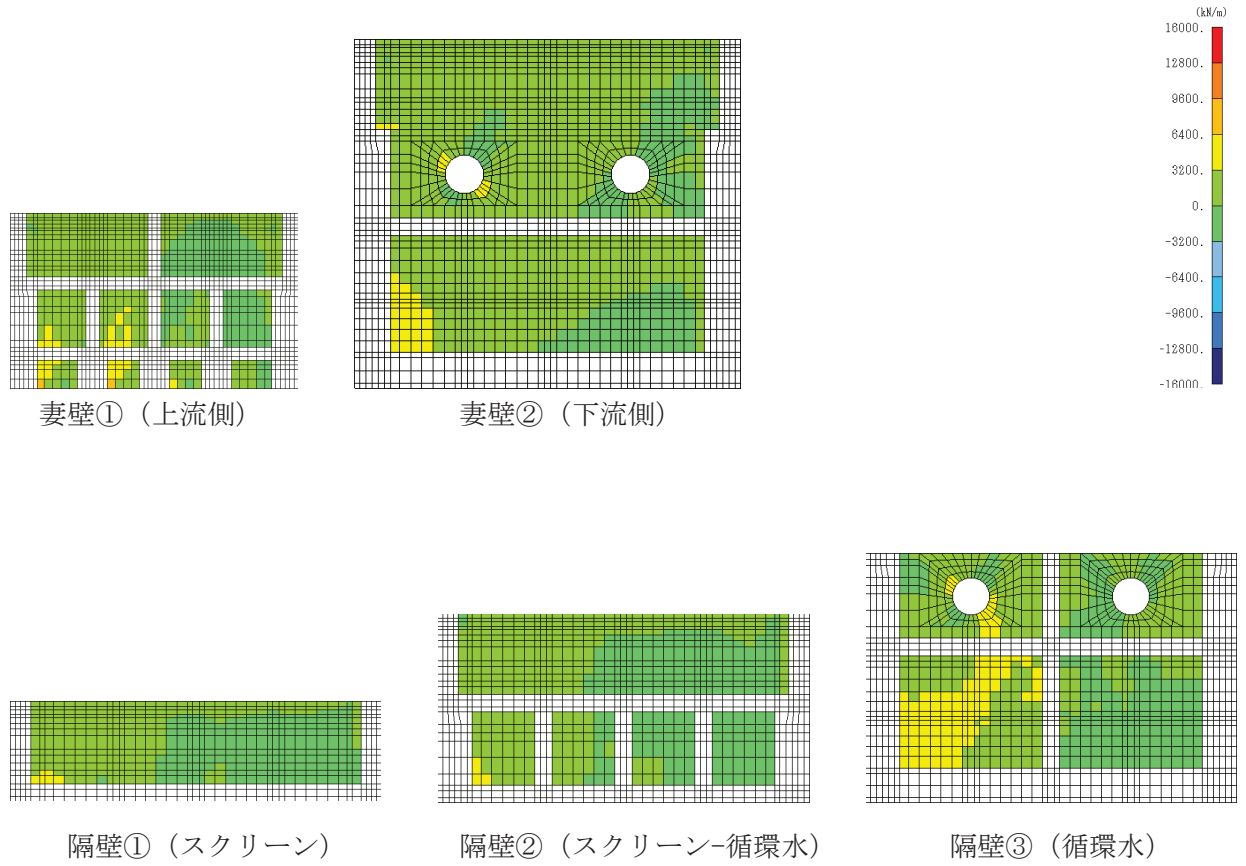


図 4-20(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(軸力 (kN/m) :  $N_y$ )

(導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )



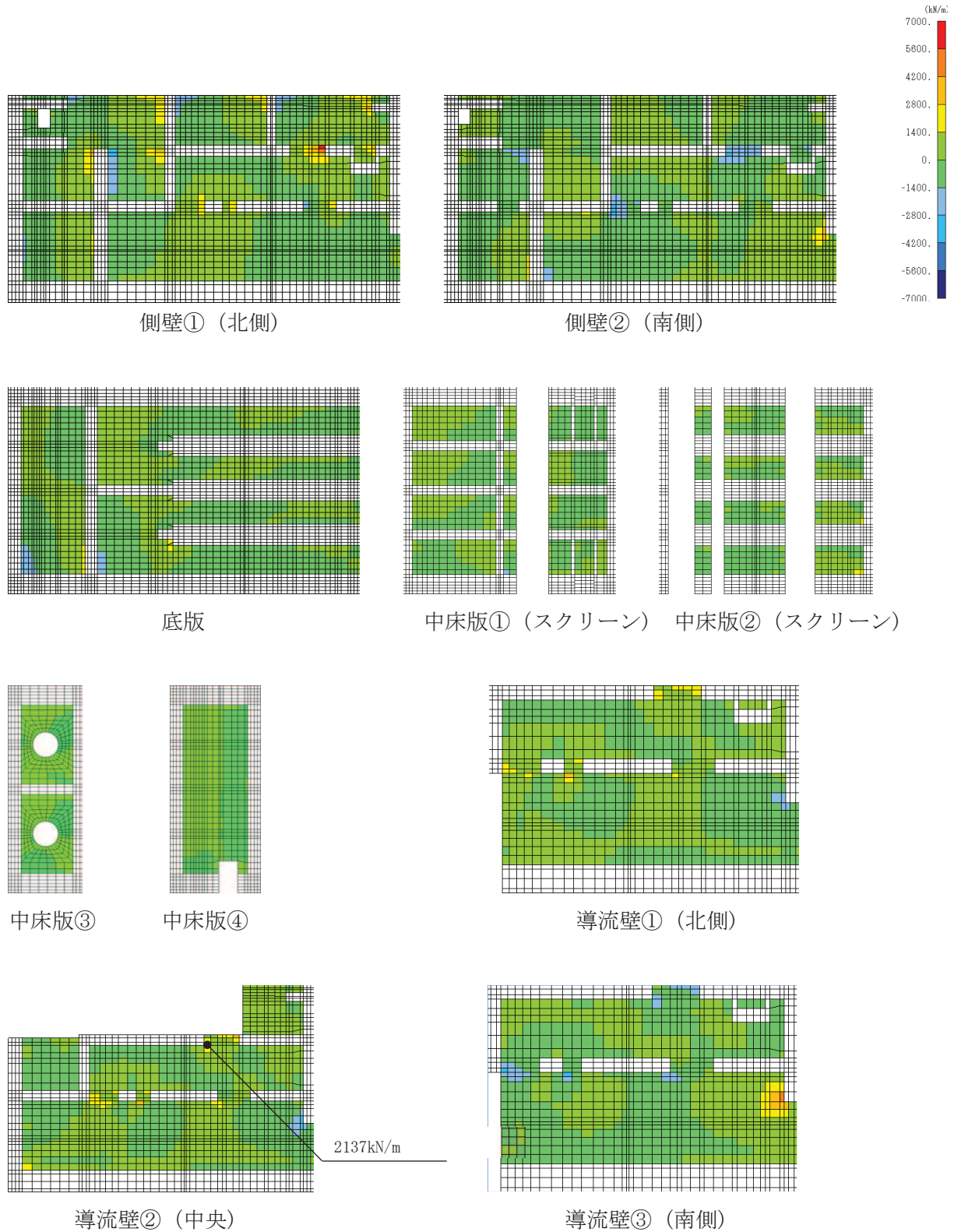


図 4-21(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (せん断力 (kN/m) :  $Q_x$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥,  $S_s - D 2 (+ +)$ )

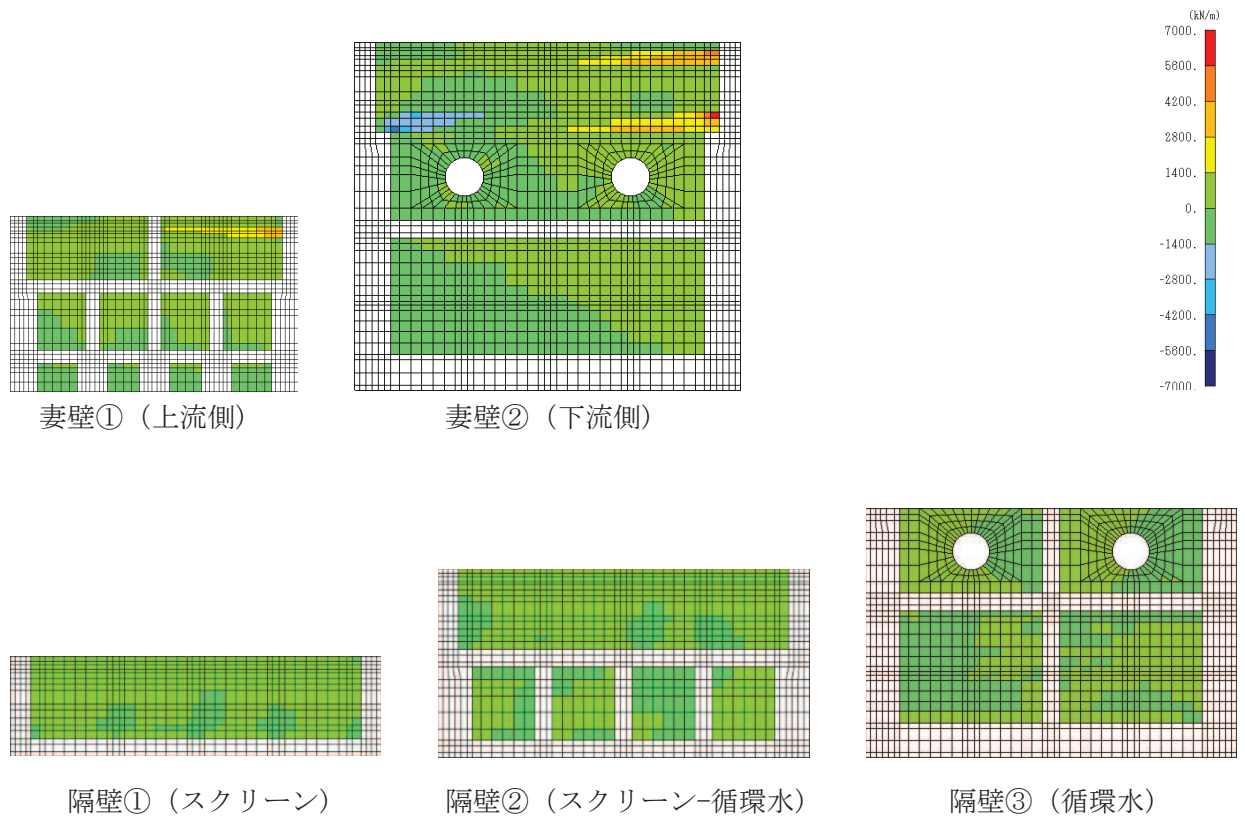


図 4-21(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図

(せん断力 (kN/m) :  $Q_x$ )

(導流壁②, 解析ケース⑥,  $S_s - D 2$  (++)

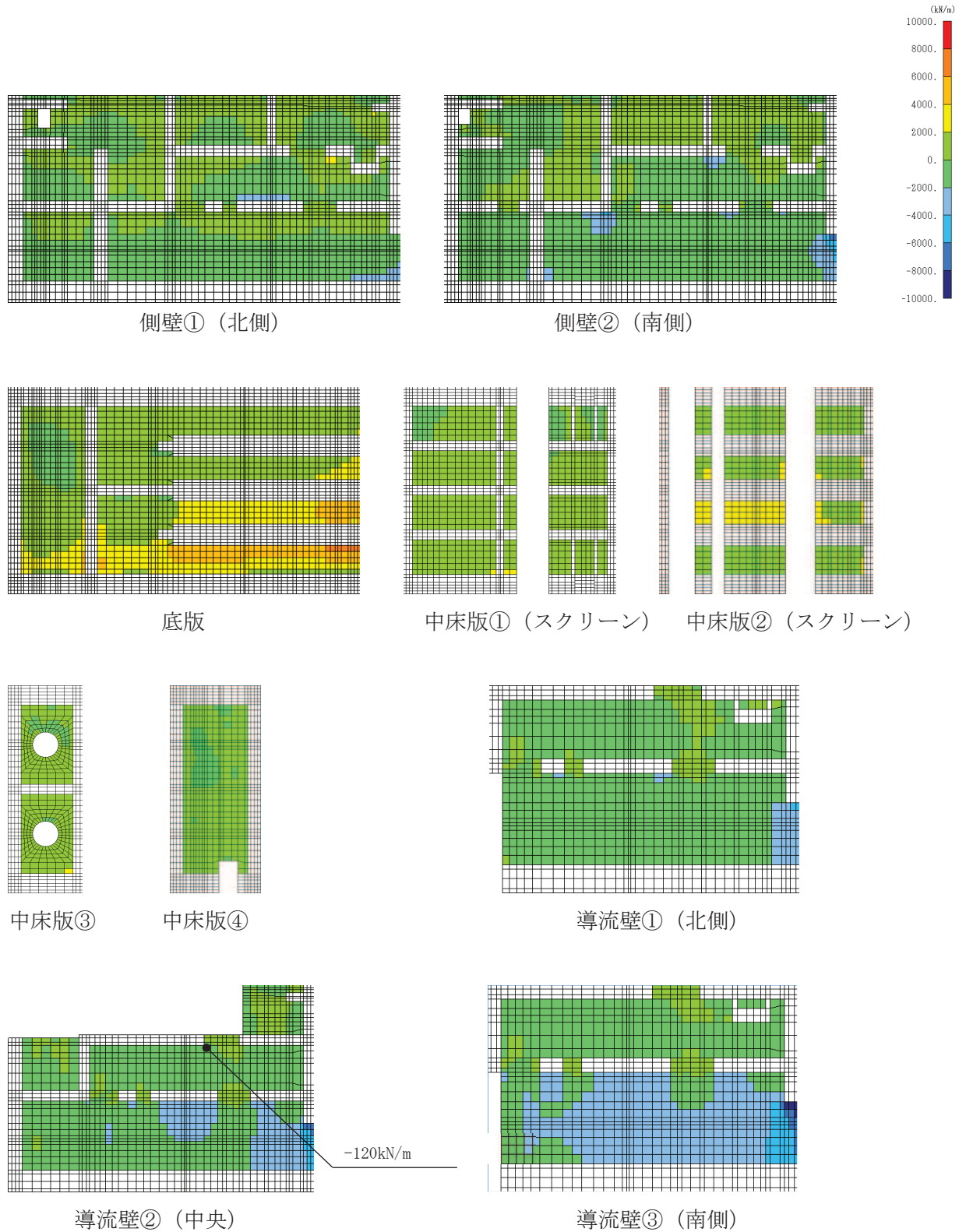


図 4-22(1) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (せん断力 (kN/m) :  $Q_y$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥,  $S_s-D2(++)$ )

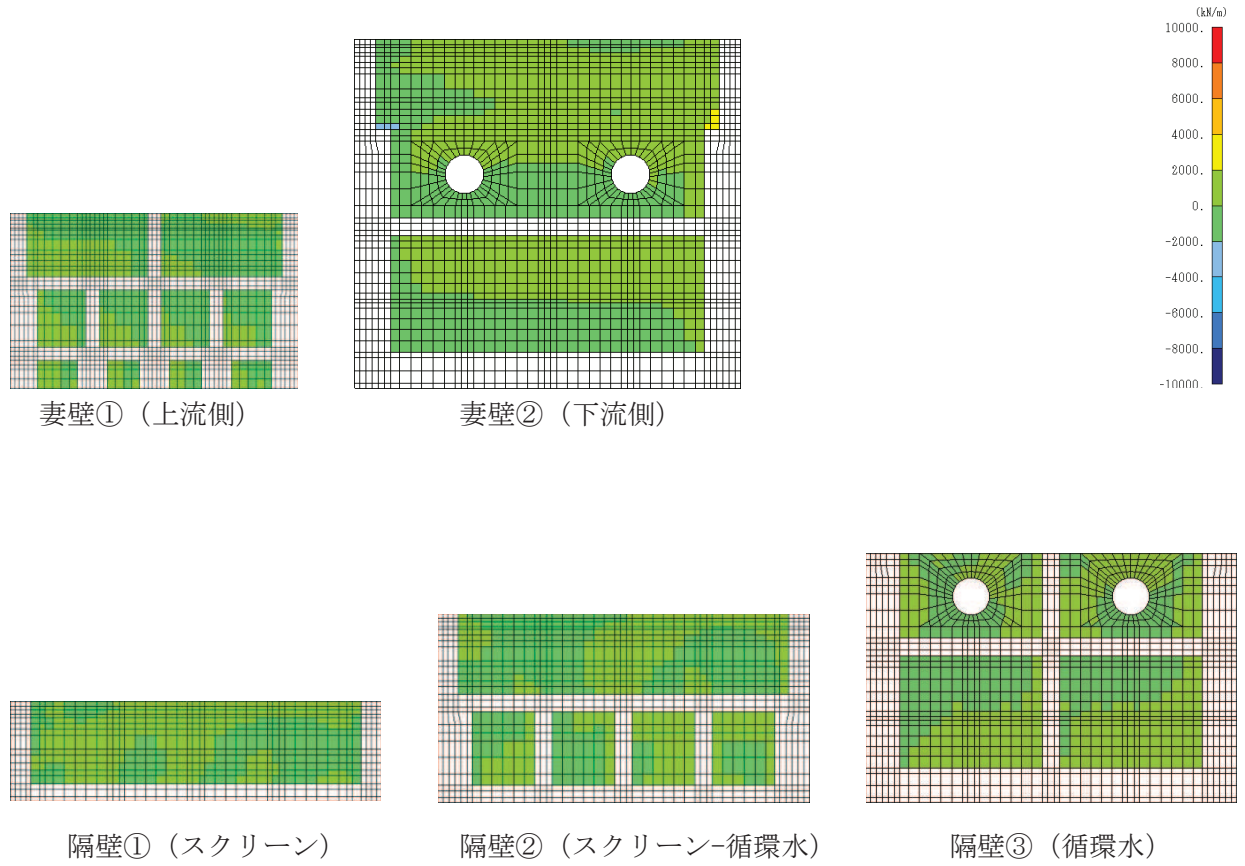
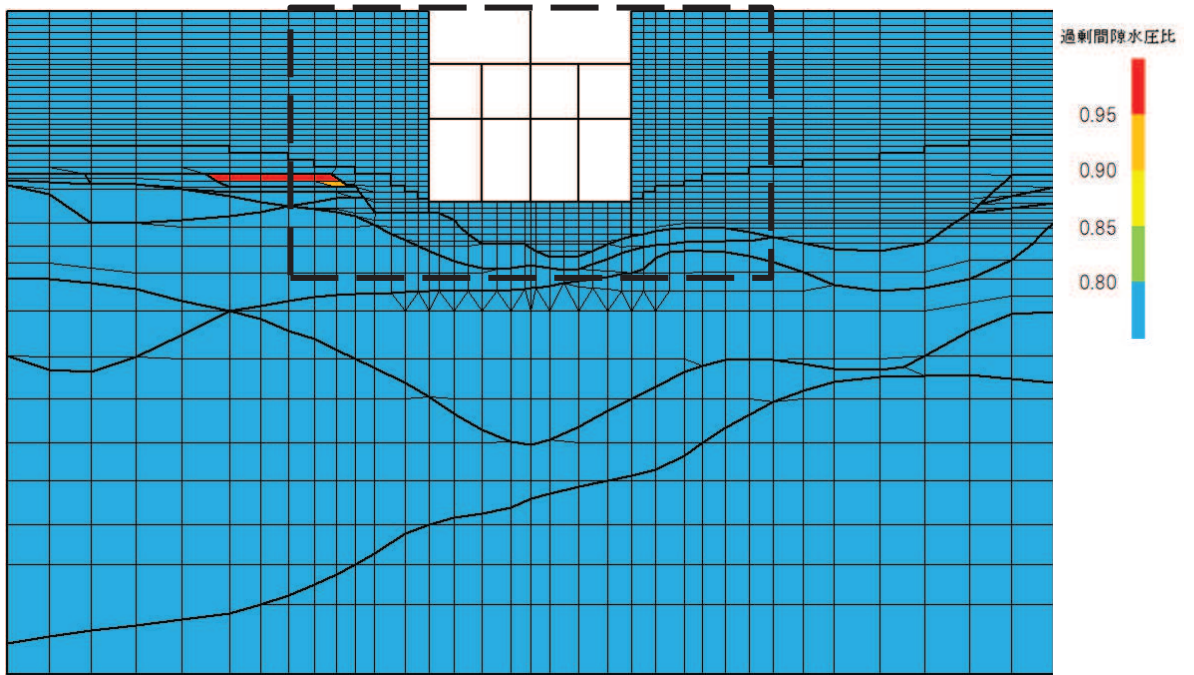


図 4-22(2) せん断破壊に対する照査値最大時の断面力分布図  
 (せん断力 (kN/m) :  $Q_y$ )  
 (導流壁②, 解析ケース⑥, S s - D 2 (++) )

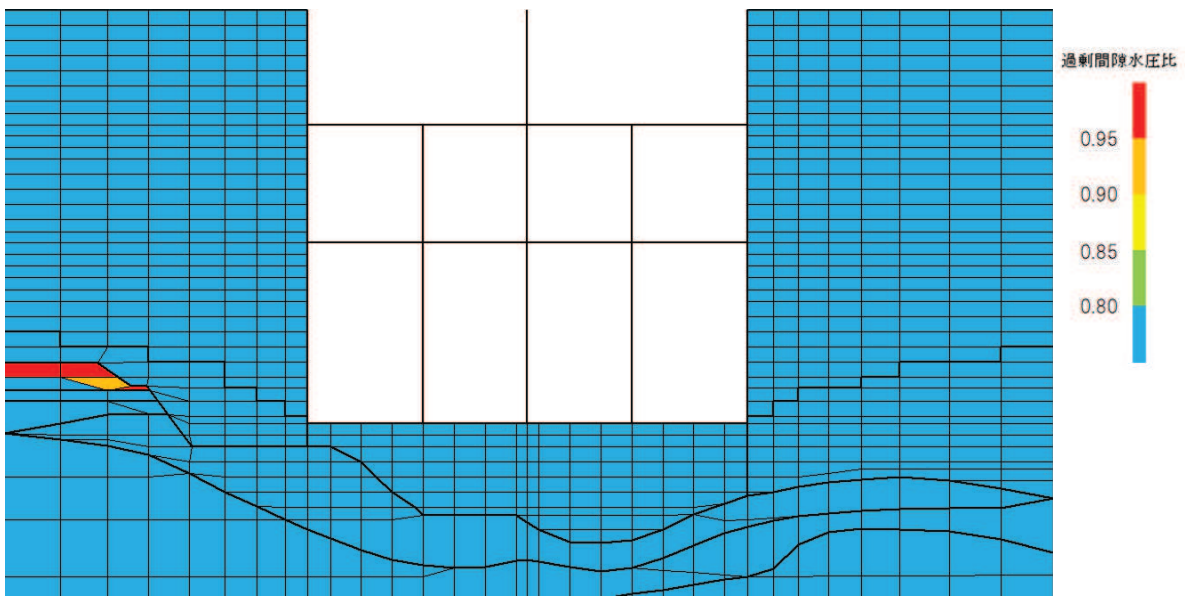
#### 4.3 過剰間隙水圧比分布

曲げ・軸力系の破壊に対する照査及びせん断破壊に対する照査で最大照査値を示すケースについて、地盤に発生した過剰間隙水圧比分布を確認する。

過剰間隙水圧比分布図を図 4-23～図 4-26 に示す。

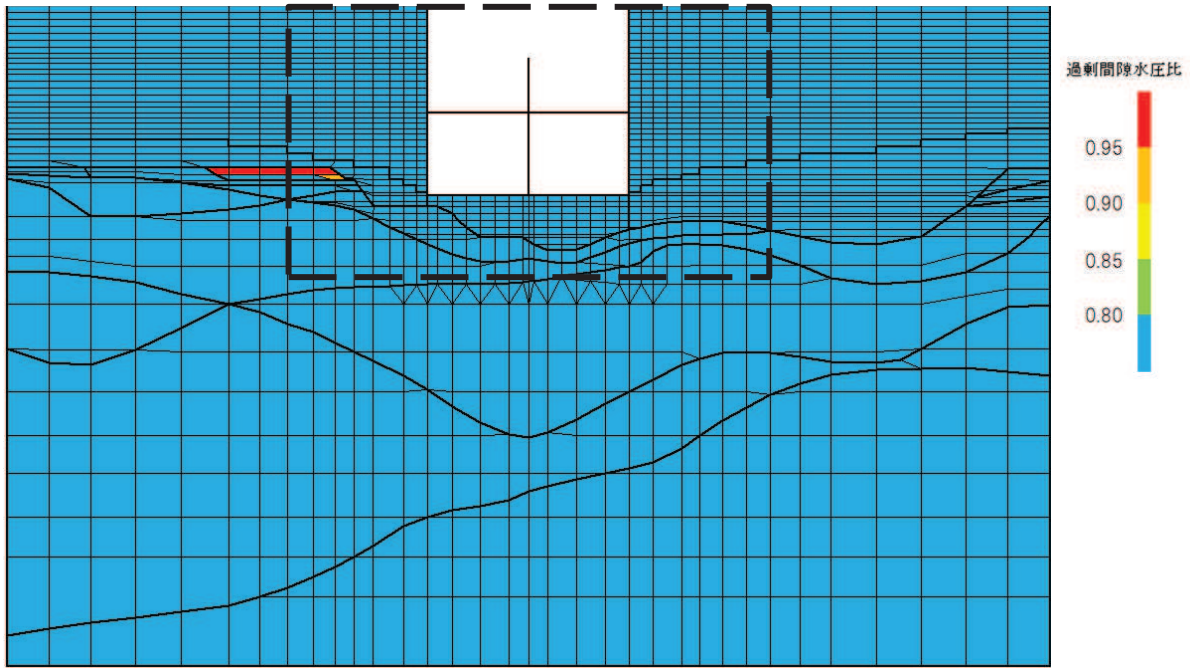


(a) 全体図

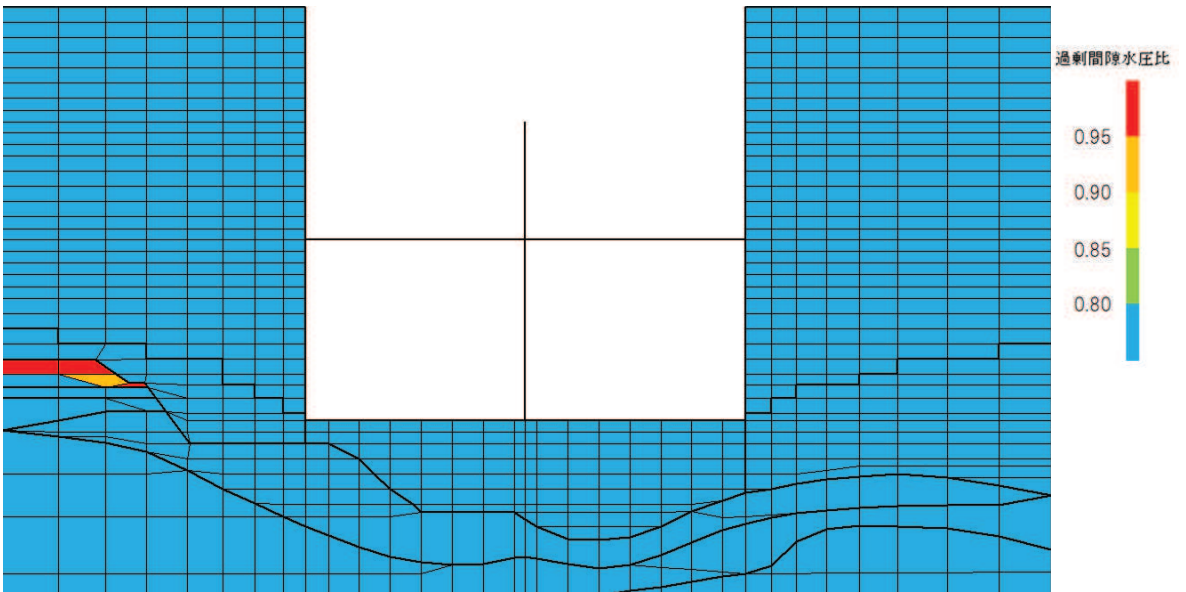


(b) 構造物周辺拡大図

図 4-23 スクリーンエリアの最大過剰間隙水圧比分布図 (曲げ・軸力系の破壊)  
(解析ケース⑥, 地震動  $S_s - N1$  (++) )

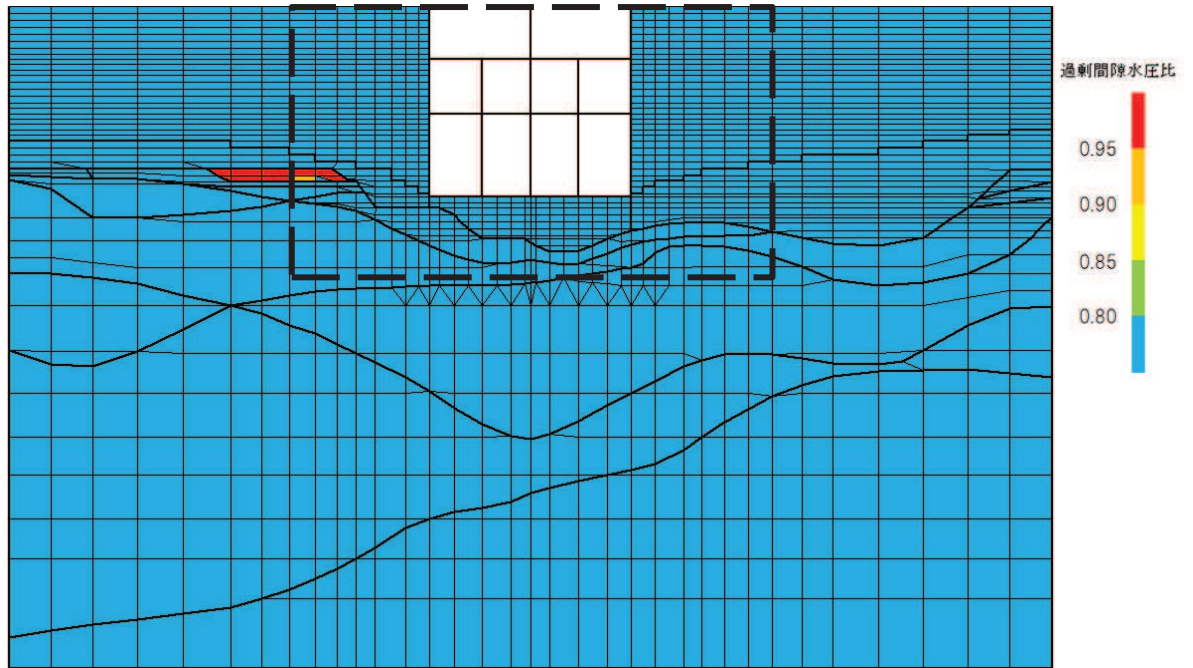


(a) 全体図

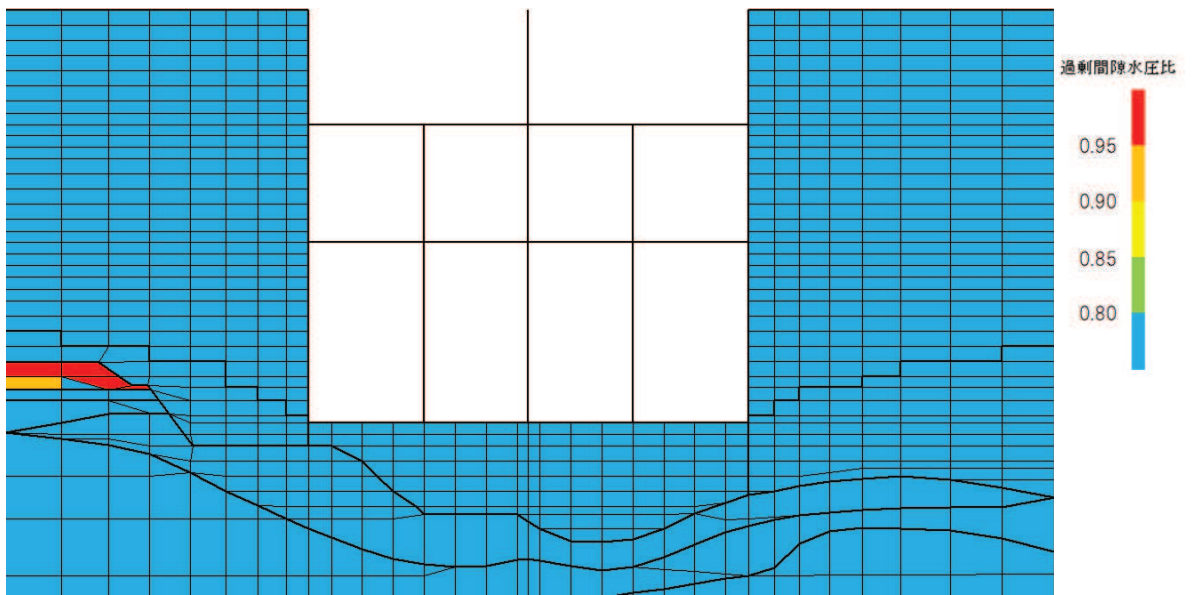


(b) 構造物周辺拡大図

図4-24 循環水ポンプエリアの最大過剰間隙水圧比分布図（曲げ・軸力系の破壊）  
 （解析ケース⑥，地震動 $S_s - N1$ （++））



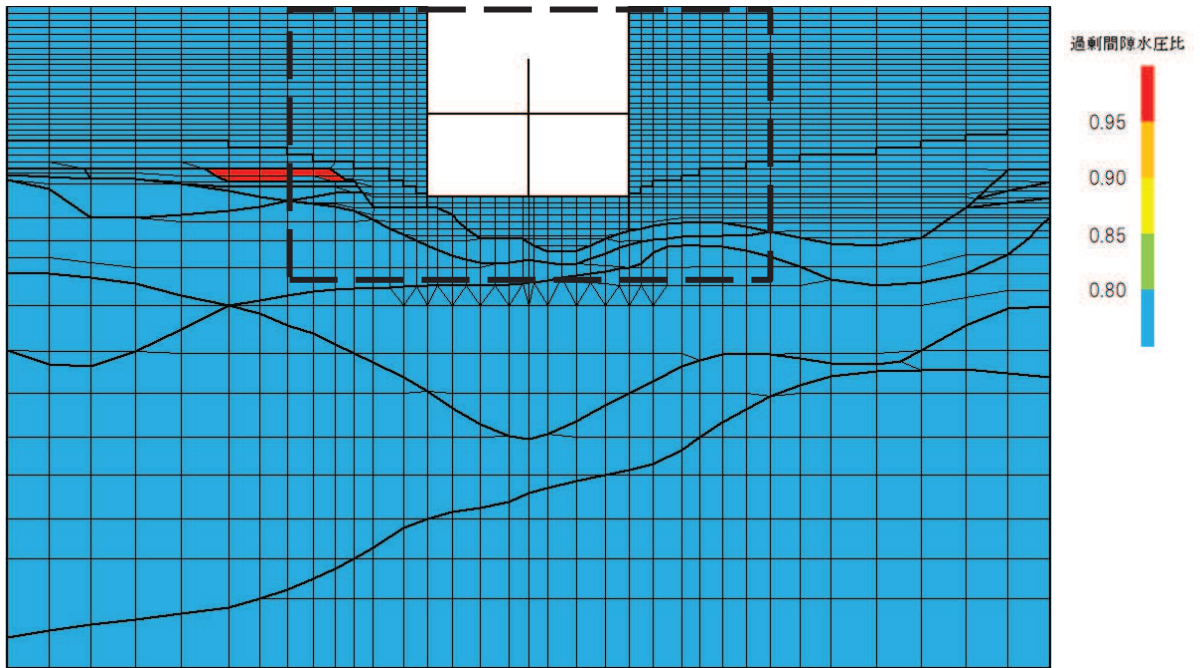
(a) 全体図



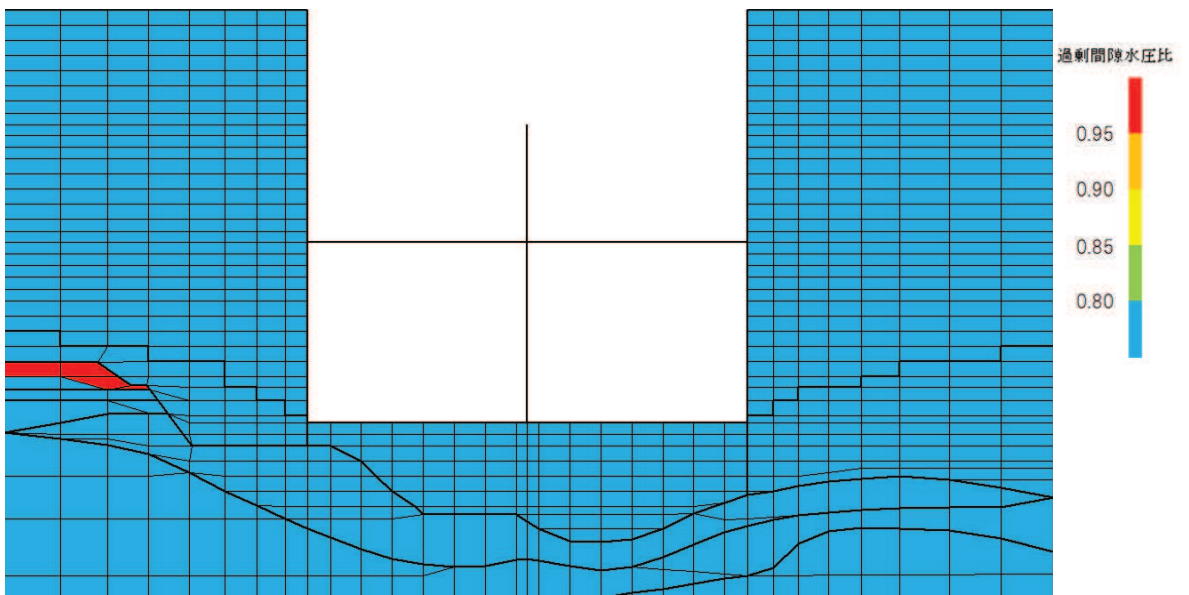
(b) 構造物周辺拡大図

図 4-25 スクリーンエリアの最大過剰間隙水圧比分布図 (せん断破壊)  
(解析ケース⑥, 地震動  $S_s - D 2 (+ +)$ )





(a) 全体図



(b) 構造物周辺拡大図

図 4-26 循環水ポンプエリアの最大過剰間隙水圧比分布図（せん断破壊）  
 （解析ケース⑥，地震動  $S_s - D 2$ （++））

5. 耐震評価結果

第3号機海水ポンプ室は、基準地震動  $S_s$  による耐震評価として、全応力解析及び有効応力解析から算定した地震時荷重を用いた三次元構造解析により構造部材の曲げ・軸力系の破壊、せん断破壊及び基礎地盤の支持性能に対する評価を実施した。

構造部材の健全性評価については、鉄筋及びコンクリートのひずみ、せん断力、壁部材の面内せん断変形に伴う面内せん断ひずみが要求機能に応じた許容限界を下回ることを確認した。

基礎地盤の支持性能評価については、基礎地盤に発生する応力（接地圧）が極限支持力に基づく許容限界を下回ること、MMR（既設）に発生する応力（接地圧）が支圧強度を下回ることを確認した。

5.1 全応力解析による荷重に対する耐震評価結果

5.1.1 構造部材の健全性に対する評価結果

鉄筋コンクリート部材の曲げ・軸力系の破壊に対する最大照査値を表5-1に、せん断破壊に対する各評価位置での最大照査値を表5-2に、各壁部材の面内せん断に対する照査値を表5-3に示す。

第3号機海水ポンプ室の照査用ひずみ（コンクリートの圧縮縁ひずみ）、照査用せん断力及び壁部材の照査用面内せん断ひずみが、構造部材の健全性に対する許容限界を下回ることを確認した。

表5-1 曲げ・軸力系の破壊に対する照査（コンクリートの圧縮縁ひずみ）

評価位置*1		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*2 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	2	③	$S_s - N1 (-+)$	$639 \mu$	$10000 \mu$	0.07
中床版	12	②	$S_s - N1 (++)$	$1070 \mu$	$10000 \mu$	0.11
側壁	43	①	$S_s - N1 (-+)$	$873 \mu$	$10000 \mu$	0.09
隔壁	113	②	$S_s - N1 (++)$	$725 \mu$	$10000 \mu$	0.08
導流壁	62	②	$S_s - N1 (++)$	$1298 \mu$	$10000 \mu$	0.13
妻壁	77	②	$S_s - N1 (++)$	$1697 \mu$	$10000 \mu$	0.17

注記\*1：評価位置は図5-1～図5-3に示す。

\*2：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-2 せん断破壊に対する照査

評価位置*1		解析 ケース	地震動	照査用 せん断力*2 $V_d$ (kN/m)	せん断 耐力 $V_{y d}$ (kN/m)	照査値 $V_d / V_{y d}$
底版	1	④	S s - N 1 (++)	8322	10702	0.78
中床版	12	④	S s - N 1 (++)	3143	4001	0.79
側壁	53	④	S s - N 1 (++)	6966	8426	0.83
隔壁	104	②	S s - N 1 (++)	1300	1958	0.67
導流壁	62	④	S s - N 1 (++)	10511	12418	0.85
妻壁	71	②	S s - N 1 (++)	3312	4855	0.69

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：照査用せん断力＝発生せん断力×構造解析係数  $\gamma_a$

【側壁・隔壁】

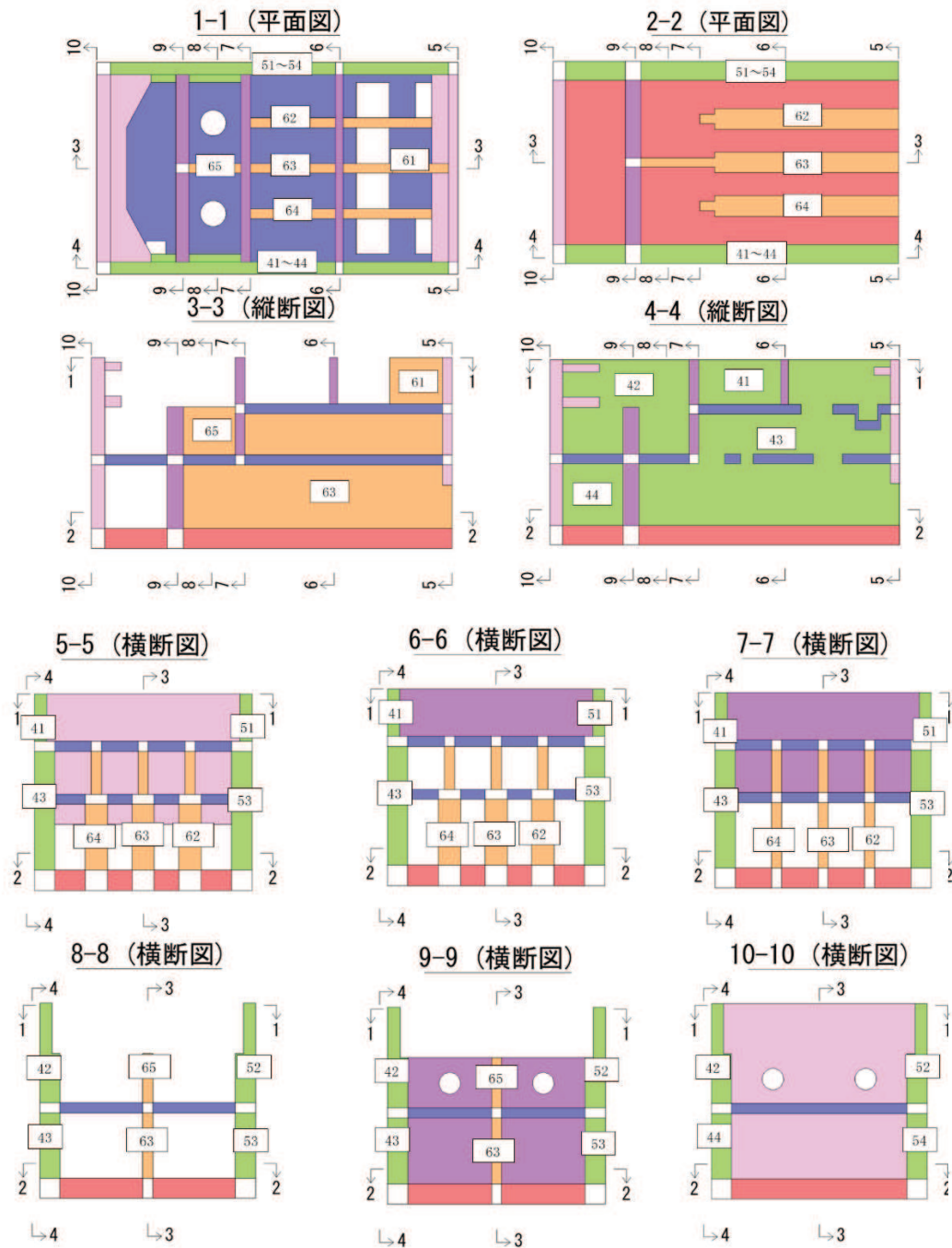


図 5-1 評価位置図（曲げ・軸力系の破壊及びせん断破壊）（1/3）

【底版・中床版】

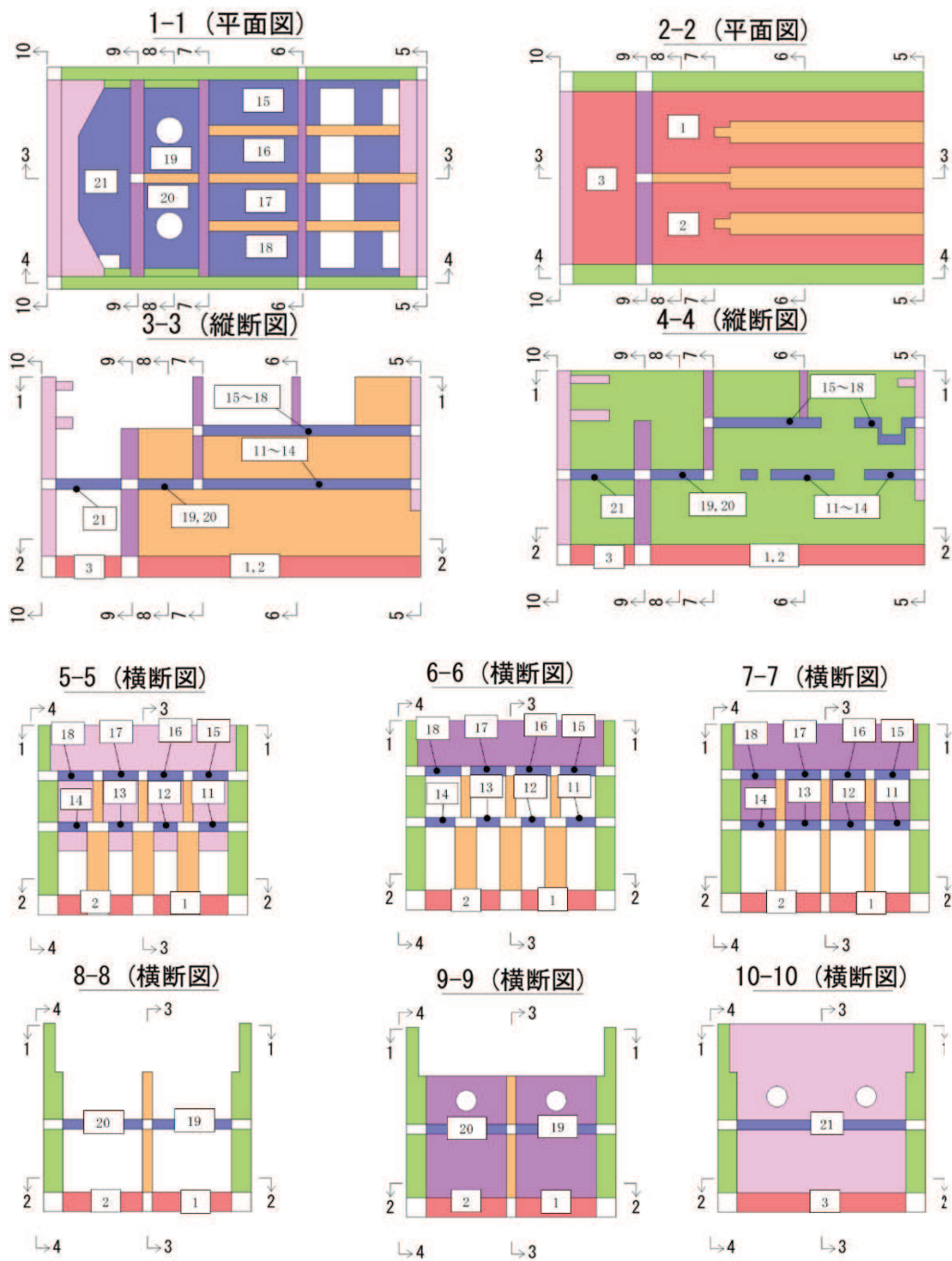


図 5-2 評価位置図（曲げ・軸力系の破壊及びせん断破壊）（2/3）

【妻壁・隔壁】

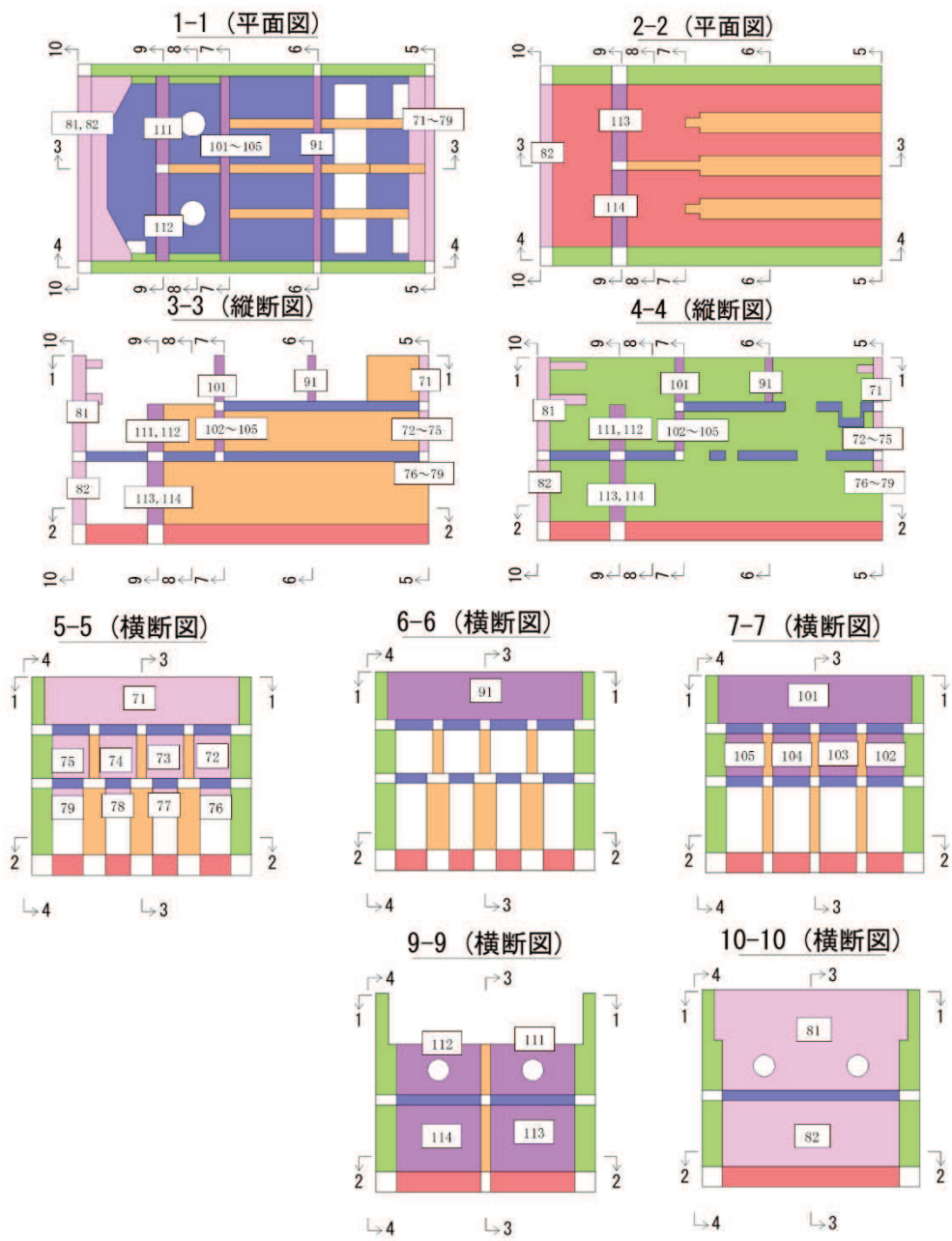


図 5-3 評価位置図（曲げ・軸力系の破壊及びせん断破壊）（3/3）

表 5-3 壁部材の面内せん断に対する照査

評価位置*1		解析 ケース	地震動	照査用 面内せん断ひずみ*2 $\gamma_d$	限界 せん断ひずみ $\gamma_R$	照査値 $\gamma_d / \gamma_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	110	②	S s - N 1 (++)	514 $\mu$	2000 $\mu$	0.26
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	70	②	S s - N 1 (++)	377 $\mu$	2000 $\mu$	0.19

注記\*1：評価位置は図 5-4 に示す。

\*2：照査用面内せん断ひずみ＝発生する面内せん断ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

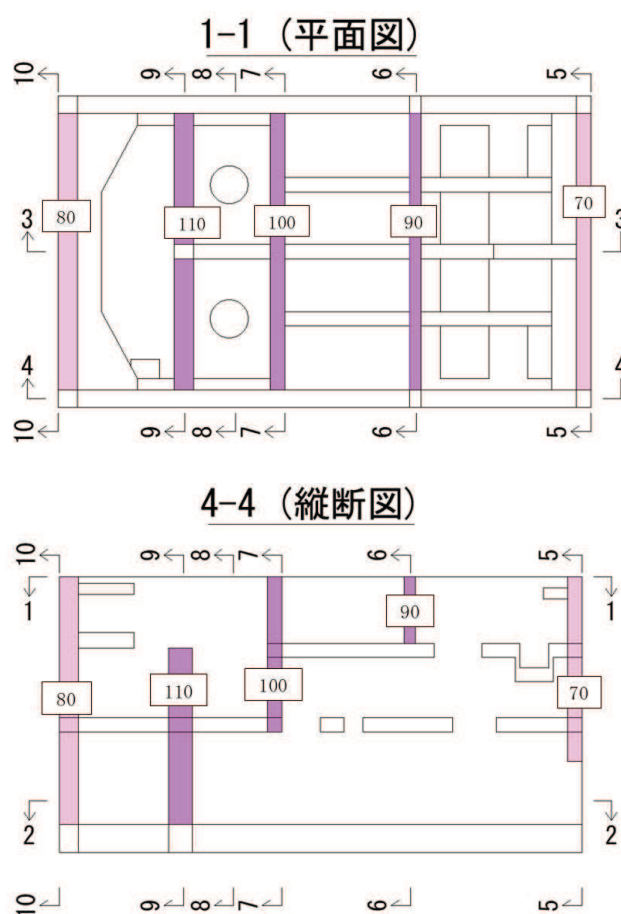


図 5-4 評価位置図 (壁部材の面内せん断)

5.1.2 各要求機能に対する評価結果

(1) 止水機能

鉄筋コンクリート部材の曲げ・軸力系の破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-4 及び表 5-5 に、せん断破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-6 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の照査用ひずみ(コンクリートの圧縮ひずみ及び主筋ひずみ)が、止水機能に対する許容限界を下回ることを確認した。

表 5-4 曲げ・軸力系の破壊に対する照査 (コンクリートの圧縮ひずみ)

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	-	-	-	-	-	-
中床版	20	①	S s - N 1 (-+)	515 $\mu$	2000 $\mu$	0.26
側壁	-	-	-	-	-	-
隔壁	113	②	S s - N 1 (++)	630 $\mu$	2000 $\mu$	0.32
導流壁	-	-	-	-	-	-
妻壁	-	-	-	-	-	-

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：止水機能が要求される部材の範囲は図 5-5 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-5 曲げ・軸力系の破壊に対する照査 (主筋ひずみ)

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	-	-	-	-	-	-
中床版	20	①	S s - D 2 (++)	622 $\mu$	1725 $\mu$	0.37
側壁	-	-	-	-	-	-
隔壁	113	①	S s - N 1 (-+)	470 $\mu$	1725 $\mu$	0.28
導流壁	-	-	-	-	-	-
妻壁	-	-	-	-	-	-

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：止水機能が要求される部材の範囲は図 5-5 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$



表 5-6 せん断破壊に対する照査

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 せん断力*3 $V_d$ (kN/m)	せん断 耐力 $V_{y d}$ (kN/m)	照査値 $V_d/V_{y d}$
底版	-	-	-	-	-	-
中床版	20	①	S s - N 1 (-+)	2634	4420	0.60
側壁	-	-	-	-	-	-
隔壁	104	②	S s - N 1 (++)	1300	1958	0.67
導流壁	-	-	-	-	-	-
妻壁	-	-	-	-	-	-

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：止水機能が要求される部材の範囲は図 5-5 に示す。

\*3：照査用せん断力＝発生せん断力×構造解析係数  $\gamma_a$

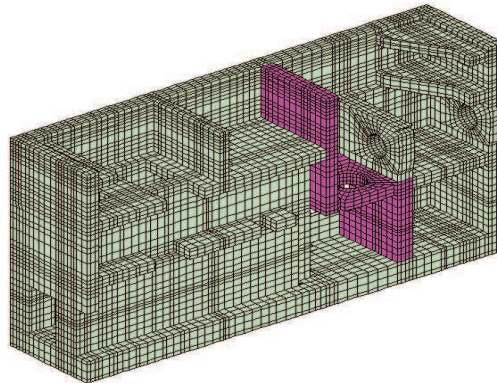
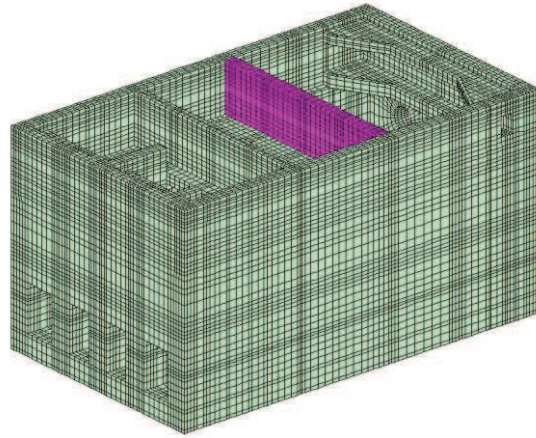


図 5-5 止水機能が要求される部材の範囲

5.1.3 Sクラスの施設等を支持する機能に対する評価結果

鉄筋コンクリート部材の曲げ・軸力系の破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-7 及び表 5-8 に、せん断破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-9 に、各壁部材の面内せん断（面内せん断ひずみ）に対する照査値を表 5-10 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の照査用ひずみ（コンクリートの圧縮ひずみ及び主筋ひずみ）、照査用せん断力が、S クラスの施設等を支持する機能に対する許容限界を下回ることを確認した。

表 5-7 曲げ・軸力系の破壊に対する最大照査値（コンクリートの圧縮ひずみ）

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	105	①	S s - N 1 (- +)	576 $\mu$	2000 $\mu$	0.29
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-8 曲げ・軸力系の破壊に対する照査（主筋ひずみ）

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	103	②	S s - N 1 (+ +)	449 $\mu$	1725 $\mu$	0.27
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-9 せん断破壊に対する照査

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 せん断力*3 $V_d$ (kN/m)	せん断 耐力 $V_{y d}$ (kN/m)	照査値 $V_d / V_{y d}$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	104	②	S s - N 1 (++)	1300	1958	0.67
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用せん断力＝発生せん断力×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-10 壁部材の面内せん断に対する照査

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 面内せん断ひずみ*3 $\gamma_d$	限界 せん断ひずみ $\gamma_R$	照査値 $\gamma_d / \gamma_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	100	②	S s - N 1 (++)	315 $\mu$	2000 $\mu$	0.16
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-4 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用面内せん断ひずみ＝発生する面内せん断ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

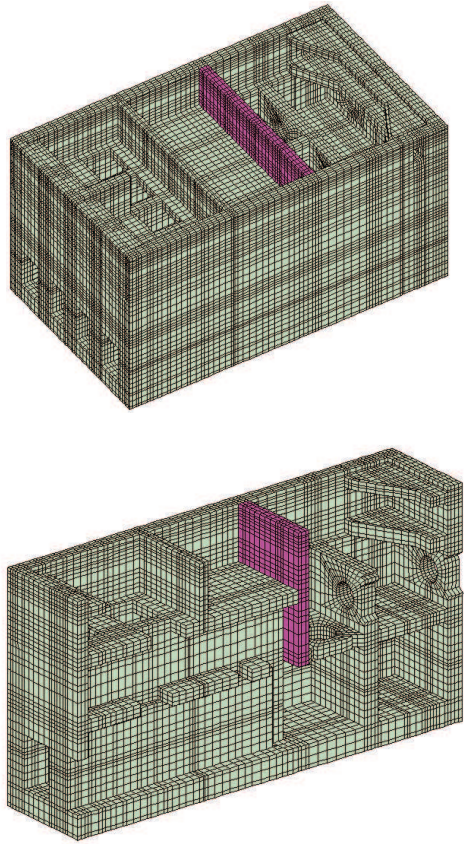


図 5-6 支持機能が要求される部材の範囲

5.1.4 基礎地盤の支持性能に対する評価結果

(1) 基礎地盤（牧の浜部層）

基礎地盤の支持性能に対する照査結果を表 5-11 に示す。また、最大接地圧分布図を図 5-7 に、照査位置図を図 5-8 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の基礎地盤に発生する最大接地圧が、極限支持力を下回ることを確認した。

表 5-11 基礎地盤の支持性能照査結果

解析ケース	地震動	最大接地圧 $R_d$ (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 $R_u$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $R_d/R_u$
④	S s - N 1 (++)	6.8	11.4	0.60

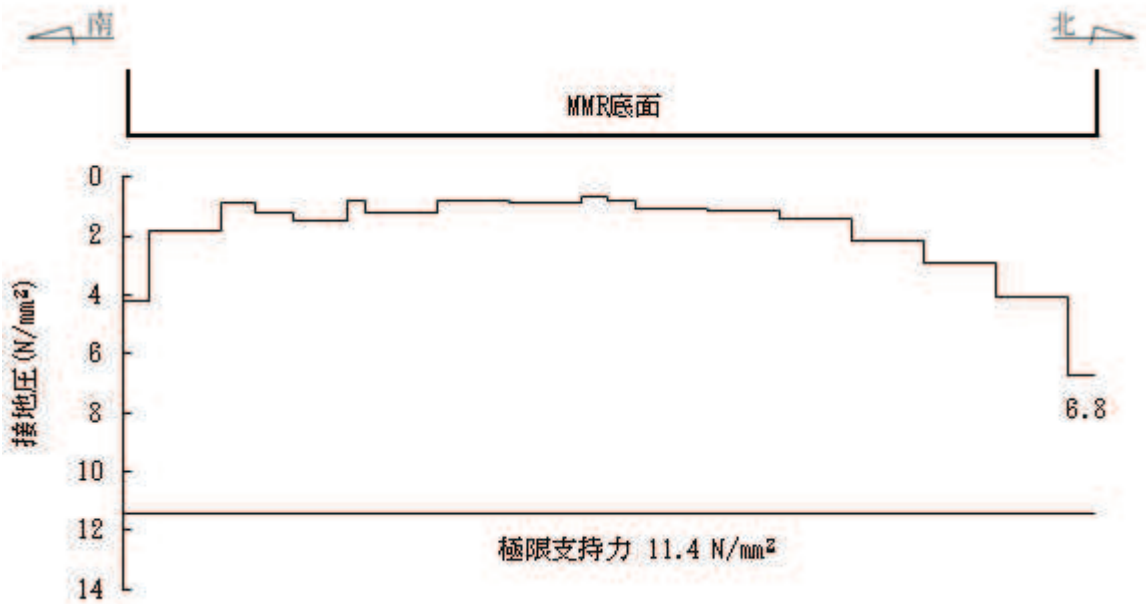


図 5-7 基礎地盤の最大接地圧分布図

(解析ケース④, S s - N 1 (++) , 循環水ポンプエリア)

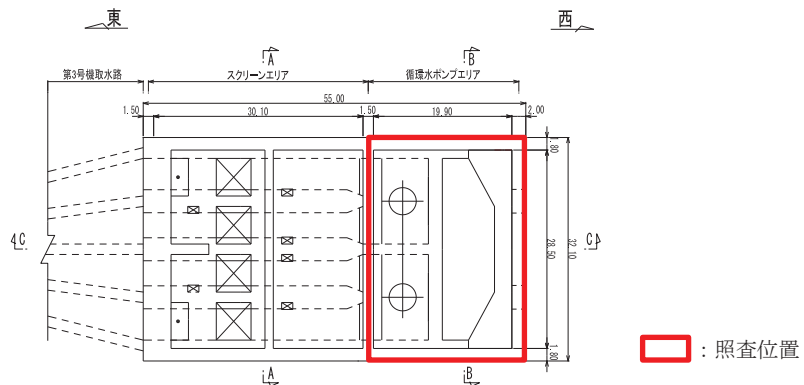


図 5-8 照査位置図

(2) MMR (既設)

MMR (既設) の支持性能に対する照査結果を表 5-12 に示す。また、最大接地圧分布図を図 5-9 に、照査位置図を図 5-10 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の MMR (既設) に発生する最大接地圧が、支圧強度を下回ることを確認した。

表 5-12 MMR (既設) の支持性能照査結果

解析ケース	地震動	最大接地圧 $R_d$ (N/mm <sup>2</sup> )	支圧強度 $f'_a$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $R_d/f'_a$
③	$S_s - N 1$ (++)	5.5	15.6	0.36

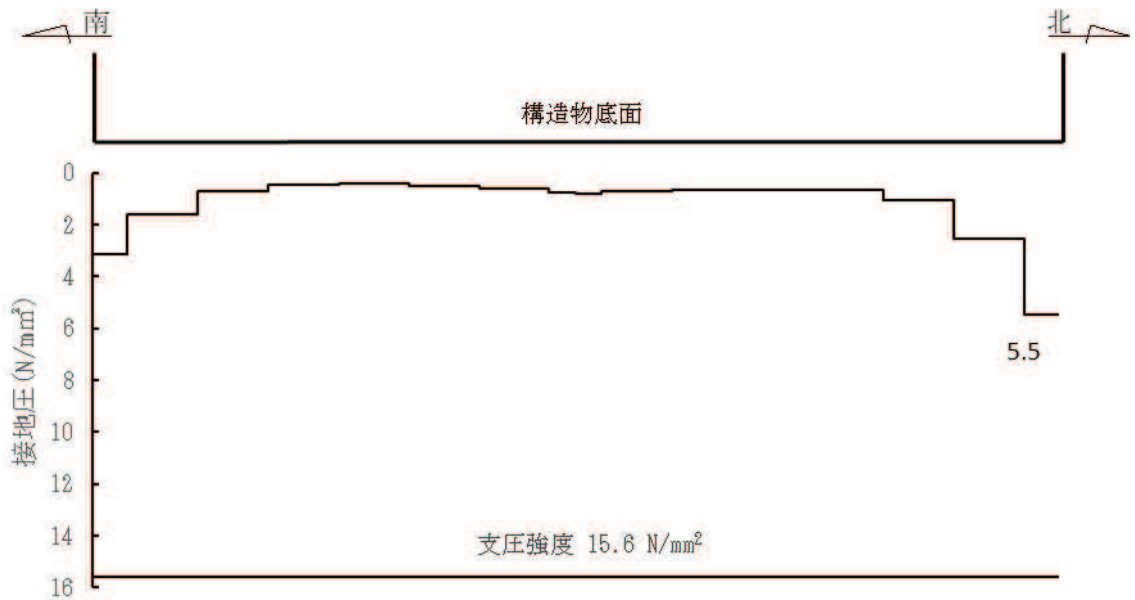


図 5-9 MMR (既設) の最大接地圧分布図  
(解析ケース③,  $S_s - N 1$  (++) , 循環水ポンプエリア)

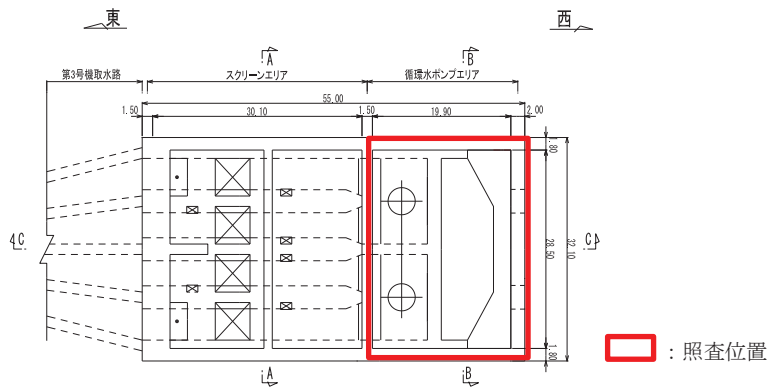


図 5-10 照査位置図

## 5.2 有効応力解析による荷重に対する耐震評価結果

### 5.2.1 構造部材の健全性に対する評価結果

鉄筋コンクリート部材の曲げ・軸力系の破壊に対する最大照査値を表 5-13 に、せん断破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-14 に、各壁部材の面内せん断に対する照査値を表 5-15 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の照査用ひずみ（コンクリートの圧縮縁ひずみ）、照査用せん断力及び壁部材の照査用面内せん断ひずみが、構造部材の健全性に対する許容限界を下回ることを確認した。

表 5-13 曲げ・軸力系の破壊に対する照査（コンクリートの圧縮縁ひずみ）

評価位置*1		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*2 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	2	⑧	S s - N 1 (- +)	623 $\mu$	10000 $\mu$	0.07
中床版	12	⑥	S s - D 1 (- +)	1078 $\mu$	10000 $\mu$	0.11
側壁	43	⑥	S s - D 1 (++)	832 $\mu$	10000 $\mu$	0.09
隔壁	114	⑥	S s - N 1 (++)	730 $\mu$	10000 $\mu$	0.08
導流壁	62	⑥	S s - D 1 (- +)	1223 $\mu$	10000 $\mu$	0.13
妻壁	77	⑥	S s - D 1 (- +)	1672 $\mu$	10000 $\mu$	0.17

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-14 せん断破壊に対する照査

評価位置*1		解析 ケース	地震動	照査用 せん断力*2 $V_d$ (kN/m)	せん断 耐力 $V_{y d}$ (kN/m)	照査値 $V_d / V_{y d}$
底版	2	⑨	S s - N 1 (-+)	6393	10025	0.64
中床版	12	⑥	S s - D 1 (-+)	3010	4018	0.75
側壁	53	⑨	S s - D 2 (++)	3351	4250	0.79
隔壁	103	⑧	S s - N 1 (-+)	1141	1792	0.64
導流壁	63	⑥	S s - D 2 (++)	2244	2785	0.81
妻壁	81	⑥	S s - D 1 (-+)	3645	5460	0.67

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：照査用せん断力＝発生せん断力×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-15 壁部材の面内せん断に対する照査

評価位置*1		解析 ケース	地震動	照査用 面内せん断ひずみ*2 $\gamma_d$	限界 せん断ひずみ $\gamma_R$	照査値 $\gamma_d / \gamma_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	110	⑥	S s - N 1 (++)	543 $\mu$	2000 $\mu$	0.28
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	70	⑥	S s - D 1 (-+)	323 $\mu$	2000 $\mu$	0.17

注記\*1：評価位置は図 5-4 に示す。

\*2：照査用面内せん断ひずみ＝発生する面内せん断ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$



5.2.2 各要求機能に対する評価結果

(1) 止水機能

鉄筋コンクリート部材の曲げ・軸力系の破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-16 及び表 5-17 に、せん断破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-18 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の照査用ひずみ(コンクリートの圧縮ひずみ及び主筋ひずみ)が、止水機能に対する許容限界を下回ることを確認した。

表 5-16 曲げ・軸力系の破壊に対する照査 (コンクリートの圧縮ひずみ)

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	-	-	-	-	-	-
中床版	19	⑥	S s - D 1 (-+)	429 $\mu$	2000 $\mu$	0.22
側壁	-	-	-	-	-	-
隔壁	113	⑥	S s - N 1 (++)	648 $\mu$	2000 $\mu$	0.33
導流壁	-	-	-	-	-	-
妻壁	-	-	-	-	-	-

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：止水機能が要求される部材の範囲は図 5-5 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-17 曲げ・軸力系の破壊に対する照査 (主筋ひずみ)

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	-	-	-	-	-	-
中床版	20	⑥	S s - N 1 (++)	460 $\mu$	1725 $\mu$	0.27
側壁	-	-	-	-	-	-
隔壁	114	⑥	S s - N 1 (++)	552 $\mu$	1725 $\mu$	0.32
導流壁	-	-	-	-	-	-
妻壁	-	-	-	-	-	-

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：止水機能が要求される部材の範囲は図 5-5 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-18 せん断破壊に対する照査

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 せん断力*3 $V_d$ (kN/m)	せん断 耐力 $V_{y d}$ (kN/m)	照査値 $V_d / V_{y d}$
底版	-	-	-	-	-	-
中床版	19	⑥	S s - D 2 (-+)	1683	2989	0.57
側壁	-	-	-	-	-	-
隔壁	103	⑧	S s - N 1 (-+)	1141	1792	0.64
導流壁	-	-	-	-	-	-
妻壁	-	-	-	-	-	-

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：止水機能が要求される部材の範囲は図 5-5 に示す。

\*3：照査用せん断力＝発生せん断力×構造解析係数  $\gamma_a$

5.2.3 Sクラスの施設等を支持する機能に対する評価結果

鉄筋コンクリート部材の曲げ・軸力系の破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-19 及び表 5-20 に、せん断破壊に対する各評価位置での最大照査値を表 5-21 に、各壁部材の面内せん断（面内せん断ひずみ）に対する照査値を表 5-22 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の照査用ひずみ（コンクリートの圧縮ひずみ及び主筋ひずみ）、照査用せん断力が、S クラスの施設等を支持する機能に対する許容限界を下回ることを確認した。

表 5-19 曲げ・軸力系の破壊に対する最大照査値（コンクリートの圧縮ひずみ）

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	105	⑥	S s - D 1 (++)	440 $\mu$	2000 $\mu$	0.22
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-20 曲げ・軸力系の破壊に対する照査（主筋ひずみ）

評価位置*1, 2		解析 ケース	地震動	照査用 ひずみ*3 $\epsilon_d$	限界 ひずみ $\epsilon_R$	照査値 $\epsilon_d / \epsilon_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	104	⑥	S s - D 1 (++)	363 $\mu$	1725 $\mu$	0.22
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用ひずみ＝発生ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-21 せん断破壊に対する照査

評価位置 <sup>*1, 2</sup>		解析 ケース	地震動	照査用 せん断力 <sup>*3</sup> $V_d$ (kN/m)	せん断 耐力 $V_{y d}$ (kN/m)	照査値 $V_d / V_{y d}$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	103	⑧	S s - N 1 ( - + )	1141	1792	0.64
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-1～図 5-3 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用せん断力＝発生せん断力×構造解析係数  $\gamma_a$

表 5-22 壁部材の面内せん断に対する照査

評価位置 <sup>*1, 2</sup>		解析 ケース	地震動	照査用 面内せん断ひずみ <sup>*3</sup> $\gamma_d$	限界 せん断ひずみ $\gamma_R$	照査値 $\gamma_d / \gamma_R$
底版	—	—	—	—	—	—
中床版	—	—	—	—	—	—
側壁	—	—	—	—	—	—
隔壁	100	⑥	S s - D 1 ( - + )	240 $\mu$	2000 $\mu$	0.12
導流壁	—	—	—	—	—	—
妻壁	—	—	—	—	—	—

注記\*1：評価位置は図 5-4 に示す。

\*2：支持機能が要求される部材の範囲は図 5-6 に示す。

\*3：照査用面内せん断ひずみ＝発生する面内せん断ひずみ×構造解析係数  $\gamma_a$

5.2.4 基礎地盤の支持性能に対する評価結果

(1) 基礎地盤（牧の浜部層）

基礎地盤の支持性能に対する照査結果を表 5-23 に示す。また、最大接地圧分布図を図 5-11 に、照査位置図を図 5-12 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の基礎地盤に発生する最大接地圧が、極限支持力を下回ることを確認した。

表 5-23 基礎地盤の支持性能照査結果

解析ケース	地震動	最大接地圧 $R_d$ (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 $R_u$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $R_d/R_u$
⑧	S s - N 1 (-+)	6.1	11.4	0.54

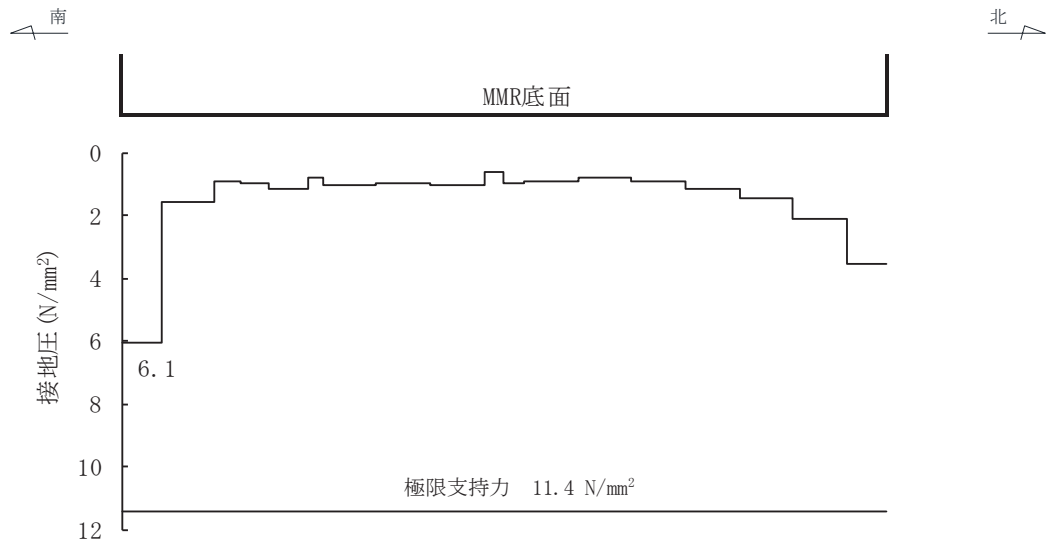


図 5-11 基礎地盤の最大接地圧分布図  
(解析ケース⑧, S s - N 1 (-+), 循環水ポンプエリア)

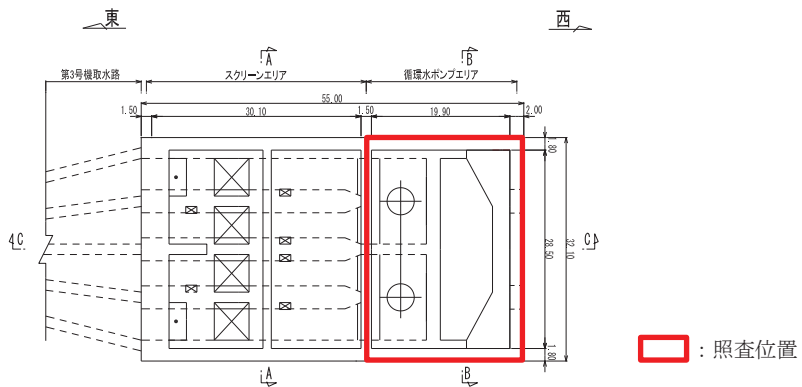


図 5-12 照査位置図

(2) MMR (既設)

MMR (既設) の支持性能に対する照査結果を表 5-24 に示す。また、最大接地圧分布図を図 5-13 に、照査位置図を図 5-14 に示す。

第 3 号機海水ポンプ室の MMR (既設) に発生する最大接地圧が、支圧強度を下回ることを確認した。

表 5-24 MMR (既設) の支持性能照査結果

解析ケース	地震動	最大接地圧 $R_d$ (N/mm <sup>2</sup> )	支圧強度 $f'_a$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $R_d/f'_a$
⑥	$S_s - N 1$ (++)	5.1	15.6	0.33

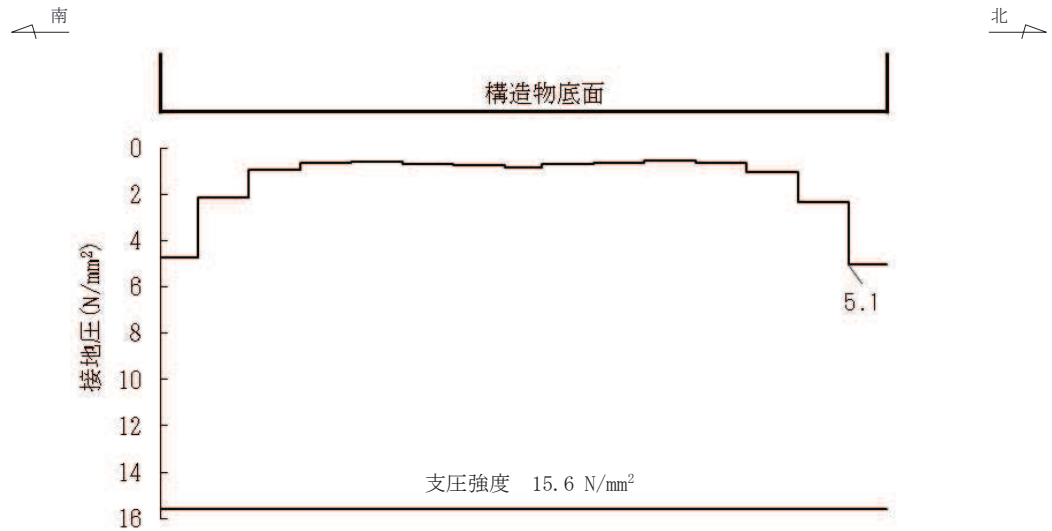


図 5-13 MMR (既設) の最大接地圧分布図

(解析ケース⑥,  $S_s - N 1$  (++) , 循環水ポンプエリア)

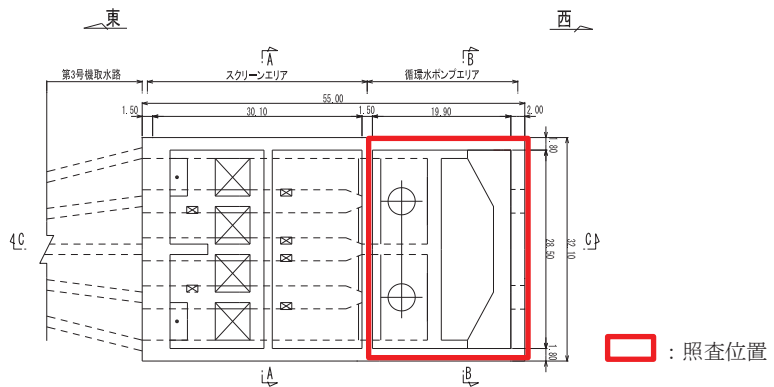


図 5-14 照査位置図